
え、勇者！？こっちに来るな！

洗剤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

え、勇者！？こつちに来るな！

【Nコード】

N6835M

【作者名】

洗剤

【あらすじ】

ひよんなことから勇者に目をつけられた盗人、ランサムザルトが「勇者……頼むから、俺を巻き込むな……」などの思いや不満、あるいはストレスを大量に溜め込みながら悪戦苦闘しつつも稼業をなんとか続けようと必死に行動を起こすが、持ち前の運の無さが災いしてしまい、巻き込まれないためにしたその行動が、かえって目立つ理由になってしまい、頭を抱えることになってしまうランサム。

そんな不運な盗人が送るファンタジー。

プロローグ（前書き）

初投稿なので上手く書けるかわかりませんが、指摘をよろしくお願い致します。

ブローグ

「うおおおおお！！来るなあああ！！」

真っ昼間に目覚まし時計のように大声で叫びながら、必死に町の建物の上を、青年が上半身裸で異常な速さで走り続けている。

その青年の容姿は人当たりの良さそうな顔つきと黒髪、黒目の青年の名前は、ランサム。なぜこの青年が逃げているかというと

半刻ほど前、ランサムは豪華な屋敷の廊下とは対照的な灰色一色の服を着ており、良く言えば地味、悪く言えば汚い服装で、出口に向かつて、今にも歌い出しそうなくらい、嬉しい気持ちを溜めながら歩いていった。

なぜなら彼は、貴族の屋敷に盗みに入ってみば、なぜか兵士がほとんどおらず、不思議に思い気配をさぐってみても、家主までもが不在だったので楽々と侵入し、『なぜか無防備に机の上に置いてあった』黄金色の金貨でふくれた財布を持ち出す。という事ができたからだ。

この国、ステイニエル王国での通貨は金貨、銀貨、銅貨で、金貨1枚で銀貨100枚、銀貨1枚で銅貨100枚であり、そのうえ金貨は1枚で平民の年収なので、それで財布がふくれるということ。後の人生は食うに困らないくらいのお金は手に入ったということなので、貧民街出身であり、時には食うに困り果てたこともあった彼には、大量の金貨を安全に手にするのはとても嬉しかった。さらに、多数の貴族の屋敷に入っては見つかり、そして逃げ切るという危ないことが多かったので、周囲の気配を察知する力とスタミナは鍛えられたのだが、今回は明らかに不自然なのに気付きながらも、嬉しさが勝ってしまい、

「まあ、こんなこともあるだろ」

と、言い出す始末であり、そんな警戒心の欠片もなくドアを開けた彼を迎えたのは、

「武器を捨てろ！お前が今まで繰り返し貴族に盗みを働いてやがった野郎だな！」

王都の兵士の証である紋章の入った、前の開けた鉄の兜をかぶり、分厚く丸みのある鉄の鎧を身に付け、背には剣を背負い、その瞳のように黒い無精髭を生やした、ごつい体つきの格上らしき人物が、その風貌にぴったりな、いかつく、しかし自信に満ち、明らかな敵意を含んだ声で警告し、その周りに控えている、叩き切るための厚みを持った剣や、確実に相手に刺さるための鋭く尖った矢を、めいといった引かれた弓、または先端に魔力の媒体である宝石が先端に付いた、それぞれの身の丈に近い杖を構えている、彼らは武器によって形こそは違えどごつい男と同じく、王都の鎧を着おり、貴族の屋敷に繰り返し侵入したランサムを捕まえにきたか、あるいは殺しに来たのであろう、彼の視界にはいるだけで20人ほどのバリエーション豊富な兵士が、屋敷を囲むような位置にいる光景だった。

「……………は？」

警戒していれば待ち伏せに気付き、それなりの対応はできただろうが警戒心もなく歩いていた結果、天国から地獄に叩き落とされたランサムは拳動を停止した。

そこにまた、いかつい声が

「武器を捨てないか……魔法！放て！」

と、ランサムを囲むように立ちながら先ほどからぶつぶつ呟いていた杖を持った兵士達に呼び掛ける。その言葉で状況を理解した彼に向け、呟きをほぼ同じタイミングで止め、そして彼らの杖の宝石が光り、その瞬間にバスケットボールほどの大きさの火球、が飛来したが、

「危なっ！」

彼はその火のカーテンを、異常な速さでくぐり抜けると、目の前の

自分と同じぐらいの年齢であろう、若い兵士めがけて突っ込み、不意を突かれたかのように慌てて斬りかかってきた若い兵士の右斜め上からの斬撃を、避けようと、防ごうともせずに
そのま
ま突き進んだ

「なっ！？」

それには相手も驚いたが、剣を止めず更に力を込め、肩から彼を切りさ裂かんとした剣が肩に触れた瞬間に出した音は、剣が骨を砕きながら肉を引き裂いた音 ではなく、金属同士がぶつかった音を勢い良く響かせて剣が折れた

「えっ！？」

剣が人間を斬れずに折れるあり得ない事が起こり思わず剣を手放した若い兵士の懐へ踏み込み、左の裏拳で左脇腹を殴った

「ハッ！」

気合いを入れる声を発しながら殴った裏拳が発したのは鈍器で殴ったような鈍い音と、鎧がへこみ何かが折れる音をさせ、若い兵士は数メートル吹き飛ばした。それに何人かが巻き込まれて、困いが崩れた所へ彼は加速しながら走りこんだ。 ランサムの異常な身体能力は肉体強化という魔法を使っており他の魔法と違い、魔力を体内に留めることによって使うことができるので、詠唱がいらす乱戦でもすぐに使える。

魔力に6属性を持たせた状態で留めれば長所、短所が出るようになる。更に、効果の強さは留める量に比例する、体内に留めるだけで詠唱がいらす、使うだけなら入門魔法とも言われるが、魔力量に難がある人には向いていない。

火は全身の力を、その代わり魔力の消費が激しい。風は体を軽く、その代わり留めるのに集中が大量に必要。土は皮膚を硬く、その代わり体が重く。水は回復力を、その代わり持久力が低下。光と闇は短所無しに全身を強化できる。 しかし光と闇は、今ではまったくないので実際には4属性と言われている。

肉体強化でなくても魔力には色々な使い方がある。

その内の1つ、肉体強化の高等技術は体の一部に留めること、そうすれば一部を全力で強化することができる。

そしてランサムはその強化で門を蹴破り、そのまま大通りの人混みに紛れた

しかし、そこから彼の不運は始まった。

プロローグ？（前書き）

二つになった上にほとんど進まない……

プロローグ？

「やっぱりあの屋敷の警備はおかしかったよなあ」

ランサムはため息をつき、少しうつむきながらぶつぶつ呟くという不思議な行動を取りつつも、なるべく人の流れに乗るようにしながら重い足を進めていた。

さっきの兵士は王都にいる俗に言うエリート兵士だが、大した実力も無いのに、金で地位を買ったような奴が多かったので上手く逃げた。

しかし顔を見られたからには、恐らく人相書きがすぐに描かれることが目に見えているので、早く隠れ家に行って王都を離れなければいけない、

のだが、今の格好は灰色のズボンに上半身裸という格好なので……かなり目立つ。

筋肉が隆々なら木材を担げば職人だろうと察してくれるのだが、ランサムは肉体強化に頼っていたため多少しか筋肉がない。目立つに決まっている。それに服を買おうにもさっき盗んだ金貨しかなく、この格好だと明らかに不自然だ。

どうしようか思案しているランサムは、無意識に隣に歩いている人に合わせるように歩いていたため、急ぎ足で流れに逆らいながら向かってくる奇妙な団体に気付かず、先頭の人物に真つ正面からぶつかった。

次の瞬間、何かが割れる音が石畳に響いた

「っ！？」

いきなりだったのでランサムは、派手に尻餅をついたが、とつさに手を着いたので怪我は無い、そして謝ろうと顔を上げたランサムに待っていたのは、優しく差し出された手ではなく、鼻先の20センチほど手前までに革製のブーツに包まれた右のつま先が、勢いよく迫っていた、

「なっ!？」

そして、つま先が左ほほを打とうとした寸前に、何とかその足を右の手のひらで叩き、軌道を外側に反らすことができた。

そしてその場に素早く立ち上がり、構えを作ったランサムが見た相手の風貌は、右の頭部に黄金色の細長い筒状のアクセサリーいくつか髪に付けた、真っ赤な髪と真っ赤な瞳を持ち、軽装である革の鎧を身につけた、ランサムと同年代の女性だった。

「どこ見て歩いてやがる！」

その女性の第一声は男のよな言葉使いで発せられる、怒気をむき出しにした声だった。

「ああ、悪かったな。だが何も蹴ることはないだろ」

ランサムは構っている余裕が無いためさっさと事を治めようとするが、その態度に腹が立った相手は、

「ふざけんな!これが何だと思つてやがる！」

と、明らかに怒気を増し、自身の足元を指差しながら言うのでしぶしぶ目線を落とすと、どこか見覚えのある真っ白な布がカバンからはみ出しており、その隙間からは無惨に割れた水晶玉が入っていた、

「これは何だ？」

ランサムの問いに、

「王宮の依頼で泥棒の家から回収した、王宮から盗まれた物だよ」

と、女性の後ろにいる王宮魔導師の真っ白なローブを着た男性が、落ち着いた声で返答した。その言葉にランサムはその水晶玉が、自分が王宮から盗んだ物であることを思い出すと同時に、それはかなり気に入った物だったのでつい、

「ああっ!俺のコレクションがああああ！」

と、必死になって叫んでしまい 空気が凍った。少し間が

空いてから、赤髪女性がゆっくりと口を開いた

「お前、今なんて言った?.....たしかその泥棒はちょうどそんな服装だったよな？」

戦闘体制に入りながら、前半はランサムに聞き、後半は自分に確かめるように言っていた。

ランサムは今、自分の隠れ家が見つかった事と、自分が盗んだ本人だとバレているのを理解したが、こんな所で戦う訳にもいかないし、倒しても罪が増えるだけなので逃げることを選び、肉体強化で足を全力で強化、そして建物の上へ跳んだ。

それを見た彼らは犯人の発見を風の魔法で詰所に知らせ、そして自分たちも上へ文字どおり飛んだ。

これからランサムは勇者によって様々な面倒事に巻き込まれる。

第1話（前書き）

遅れました。

第1話

ランサムは走っていた、建物から建物へ跳び移りながら、自分のできる魔力消費の効率が一番いい肉体強化を下半身に全力でかけながら。

ランサムは魔力の量は上の上ぐらいあるので、走って逃げるのは肉体強化を使えばすぐに逃げれる。

しかし、彼がぶつかった柄の悪い女性こそが、聖霊に選ばれた勇者であり、ランサムは王宮から水晶玉を盗んだのがバレた上、それをみごとに割ってしまったので、元から短い堪忍袋の尾が切れたようである。そのため、

「待てつつつてんだらうが、ゴラア！」

さっきの白い魔導師はいないが、一緒にいたらしい小柄な緑の服装の弓兵と、詰所より派遣された軽装兵を引き連れてのこのセリフ。

勇者がまるでチンピラである、これだけでもおかしいのに、ランサムの速さは後ろに続く肉体強化をしている軽装兵すら息を切らししているのに、チンピラ勇者は肉体を未強化で重装備、だが息切れをせずに追いかけている……悪夢にしか思えない。

さらに、ランサムは魔力の密度を高めたまま飛ばすという操作が全くできないので、遠距離攻撃もできないし肉体強化しても勇者には勝てる気がしない。

そのためランサムは、

「待つか！おかしいだろ？なんで未強化でついてこれるんだよ！？」と、叫ぶぐらいしかできない。

対して勇者は、

「待ったら話してやる、だから止まれ！」

と言い、それにランサムが同じ事を言い、勇者が同じ事を言うループ状態である。

いつまでも続くかと思われた追跡にも、意外な形で終わりが訪れ

た。

建物のちょうどランサムの足元に、一瞬で黄色に光る大きな魔方阵が現れ、陣の中全体に強力な電撃を放ち、ランサムの全身を襲った。

「!?」

その電撃はランサムの肉体強化による電撃への耐性を退け、意識を刈り取った。

「手こずらせやがって……」

そこへ、少し汗をにじませながら呟いた勇者と、連れの白い魔導師を筆頭にした先ほどの魔方阵の犯人達が、ゆっくりと近づいて行った。

第2話

ここは、地下のため空気がこもり、湿気の多い空気と、血の匂いが混じる不快な臭いが立ち込める地下牢。

この牢はみんな立方体の形をし、通路側の壁は鋼鉄で作られた柵になっており、囚人を見せつけるように拘束具が通路に向かって配置されている、それ以外には何もない簡素な作りの牢が通路を挟んで向かい合っている。

ランサムは、ランサム「リザルトはここに拘束されていた。そして彼に何かを持ちながら牢を開けて近づき、彼の頭をその中に突っ込ませた。

それは、水がめいいつぱい入った桶だった。ゴツゴツした手で頭を押さえつけられしばらくして、ランサムは苦しそうに、そして必死にうめく、

「ゴボツ!?ゴボボツ!」

しかしそれは奇怪な音になり、さらに手足を使って逃れようとするが、ジャラジャラと鎖がこれ以上伸びるのを拒絶する音が出るだけだった。そして動きが鈍くなった途端に頭を押さえつけていた手がどけられた。なんとか顔を上げたランサムに向かって

「どうだ?顔だけじゃなくて、体の中も洗えてよかっただろ?」

その声の主はランサムが屋敷から逃げる際に吹き飛ばした、若い男だった。

「……なかなかよかったぜ?あの傷は水の魔法で治したのか?お前は動きにキレがなかったから楽だったぜ?」

それにランサムは、息も途切れ途切れだが言い返す。若い男はため息そして、

「まったく、口が減らないなあ!」

膝を着いているランサムの腹をおもいきり蹴りつけた、

「うげっ……!」

そこからは一方的な私刑が始まった、蹴り、殴り時には桶で強打する。見るに耐えない暴力がまだまだ続くかと思われた、その時「おい！何やってんだ！」

チンピラ勇者が現れた、意外にも彼女は若い兵を止めに入った。その声を聞いた若い兵は、

「これはこれは勇者様。何って拷問に決まってるじゃないですか？結界で守られたあれを、どうやって盗んだかを知りたいんでしょう？」

妙にかしこまって若い兵は答えた。それに対して勇者は激昂し、「ふざけるな！普通はまず尋問だろう！」

今度はうんざりした様子で若い兵は答える。

「そんなのは形式だけですよ、それに勇者様も見たでしょう水晶に映ったこいつの属性を？」

属性は水晶を通して見るができる。火なら赤、水なら青といった具合に属性を色で判別するのである。しかし、ランサムの色は何もかもを呑み込みそうな暗黒だった。

「闇の属性は魔族のやつらの属性です！人間が闇の属性だなんて、聞いたことがありません！きっと魔族の手先です！」

それに対して勇者は

「なら、なぜ王宮に入った時に王を殺さなかった！？なぜ逃げる時に私を殺そうとしなかった！」

終わりの無いような言い合いを中断させたのは、さっきまで黙っていたランサムだった、

「なあ？もう夜だろ、飯くれないか？できるならシチューがいいな。」

その言葉に若い兵はキレた。

「黙ってる！」

振り向いて叫んだ瞬間、顔に桶が直撃した、
「いっちょ上がり！」

ランサムは、両手足を自由に動かして立ち上がった。

第3話（前書き）

読みにくい……

第3話

鎖はランサムの手足から引きちぎれ、軽い音を響かせて床に落ち、同時に若い兵の鎧は鈍い音を響かせた。

「あーあ、跡が付いたな……」

ランサムはうんざりした様子で、縛られていた腕を見ながら呟きながら歩き出そうとすると、勇者が右手で剣を突きつけ、

「なんで立てんだ！？魔力封じの鎖で縛られた上になんか殴られてただろ！」

剣を突き付けた割には、結構心配した様子の言葉を投げかけられた。

魔力封じの鎖とは、縛られた者の魔力を操作できなくする鎖で、結論を言つと魔法の類いが使えなくなる拘束用のマジックアイテムである。

「じゃあ、まずなんで捕まえたやつの属性を調べるか知ってるか？」

斬られる心配はなさそうなので、ランサムは答えることにした。

「身元を調べるためじゃないのか？」

勇者は質問したのに質問で返されたが、この国は戸籍に属性を記入する決まりのため、当たり前のように答える、

「それもあるけど魔力封じの鎖は、相手の属性に反した属性を持つ鎖じゃないと封じれないんだ。だから俺の魔力を封じれなかったんだよ。だから肉体強化をしたから無事だし、鎖を引きちぎれた」

ランサムは手首を回しながら言った。

「お前は闇だろ？なら光の鎖で縛ればいいじゃねえか」

勇者がまた当たり前のように言う、

「お前、あの鎖は魔力を流し入れて属性を持たせてるんだぞ？お前以外に光属性がいるか？」

ランサムはため息をついて言った、そして今度は足首を回し出す。

「……………あ！じゃあ俺がやれば捕まえられるんだな」

勇者が納得したように言った

「ああ、そうゆうことだな」

ランサムは平然と言った……………そして、沈黙が訪れたなぜなら、ランサムは墓穴を掘ったことに気付き、勇者は今はチャンスだと気付いた。

先に動いたのは勇者だった、突き付けた剣に魔力を纏わせ、腹部めがけて突いたのを、ランサムは肉体強化で右に避け、そのまま左足で後ろ回し蹴りを頭を狙って繰り出し、右手で防がれた、

「なっ！？」

ランサムも気絶させるつもりだったが、肉体強化をしているとはいえ、女性に片手で防がれたのはショックだった。

そこへ勇者はランサムの足をそのまま引き寄せ、左脇腹を拳で殴った。ランサムの耳には、肉体強化をした拳がもろに入った嫌な音が届くと共に、意識が飛びそうになる。

しかし、歯を食いしばって耐え、全身から魔力を放出した。

それはランサムを空気を波紋になって伝わり、勇者と若い兵を２メートルほど弾き、霧散した。

「なんだ今の？」

勇者が問うと、

「魔力を一気に放出した。本当ならあの魔力量だともっと大きいけど、魔力の密度を高めるのが苦手だからな」

ランサムは脇腹に強化を集中させながら答える。

「そうか、パンチは結構効いたか？」

勇者はニヤニヤしながら言った。

「ああ、けど肉体強化は苦手みたいだな」

殴るときに拳に強化を集中させれば、気絶させられたのにしなかった。そうすればすぐに終わったのに。

「ああ、剣がメインだからな！」

勇者が自信を持って言った瞬間に、右手の剣がランサムを切り上

げ、それをランサムは2、3歩引いて避け、剣がめいいつぱい上が
りかけた時に合わせて踏み込み、剣を掴んだ右手を逆手に掴むよう
に右手で上から掴み、右足で相手の左のふくらはぎを蹴って倒し、
そのまま組み敷いた。

「俺は泥棒だから剣なんて邪魔だから使えないが。肉体強化をした
ら格闘で負ける気はしない」

ランサムはニヤつきながら勇者に言った。

第4話（前書き）

疲れたので一旦休憩……。やりすぎかな？
PV2000ありがとうございます！

第4話

「さっきの音で上にも気付かれたかな？そろそろ逃げないと……」
ランサムは勇者の腹の上に馬乗りになったまま1人で考え事を始めた。

「出口は1つかな？天井壊そうか？でもどんな深さにあるか分からないし、まだ気付かれてなかったらそれで気付かれる……でも……」
完全に勇者を放置してるのだが、力を全く緩めないランサムはさすがと言つか、なんとというか。さらには、

「なあ、勇者？気付かれたと思うか？どうだろう？」

などと聞き始めた。

「黙れ、退け、叫ぶぞ、殺す」

勇者は肉体強化で押しても全く動かないランサムに、キレぎみに言いたいことを簡単に言った。

「それは困るな」ランサムは両手を右手で押さえていた。

なので、左手しか空いていないランサムは、苦笑いしながら左手で口を強く押さえた。

ランサム、今の状態をよく考えていないらしい。

「！」

勇者が口を動かすが、ほとんど音が出ていない。

「そろそろ、勇者様が遅いから様子を見に誰か来るかもしれないな。そういえば、俺を捕まえる時に何で肉体強化無しであんなに速かったんだ？右手、離すから大声出すなよ？まあ、『出したらこの体制からどうなるかは想像に任せる』から」

訂正、ランサムはよく考えていたらしい。

勇者を脅迫した………えげつない。

ランサムは口を押さえる手だけを離れた。

「このバ　わかったからやめろ！」

叫ぼうとした勇者を見てランサムは、ゆっくりと右手を顔から胸

の方にはずらそうとする素振りをする。勇者は静かになった。

「最初からそうしてくれたらなあ……………で？何でなんだ？」

ランサムはうんざりした様子で言う。

「あれは、あの鎧の付加効果で身体能力が上がっただけだ」

勇者は少し顔の色が髪の毛の色に近づいたまま言った。

「意外に……………。付加であの効果か？どんな魔力を込めたんだ？それにあの鎧はどこから？」

付加の効果の強さと持続力は、込めた魔力の多さに比例する。ただし、効果が強いと持続力が少なくなるし、込めた対象がもりいと込めた瞬間に壊れてしまう。

だからランサムは驚いた高い持続力と効果を持てる、強い防具に「魔力は俺の魔力を少し込めただけだ。あの鎧は聖霊にもらった。

……………意外って何がだ！？」

勇者は、後に言った付加について説明した後、手前に言った事について言い出した。

「少して……………。まあ、こんな気にならないタイプに見えてたから」

ランサムは渋った様に言い出した。

「こいつ！「よっ！」 なっ！？」

いきなりランサムは、勇者の胸に左手を押しつけた。

「……………」

そして驚いた顔をした。

「意外に大「死ね！」

かなり鈍い音が響いた。

勇者はなんと、腹部に乗った人に頭突きをした。

「……………！？」

「死ねっ！死ねっ！」

痛みで頭を少し下げたランサムに、頭突きのコンボ。

まずはノーマル、次に右頬、そして左頬、ラストにあごへ。

肉体強化された頭突きによって、強化していなかったランサムは
たまらず気絶した。

気絶する寸前にランサムが見たのは、髪の毛の色と顔の色が同じ
になった勇者の顔だった。

第5話（前書き）

p.v.3000ありがとうございます！まさかこんなに伸びるとは...
...。
文章にまとまりが無い.....

第5話

「どんな体制からの頭突きだよ……」

その言葉がランサムに、気がついた後の第一声だった。

「急所狙いやがって……ん？」

まだ痛むあごを手でさするうとするが、動かない。そして体全体に固い感触がした、

「まさか!？」

焦ったランサムが唯一動かせる首を傾けると、自分の体がぼんやり光る魔力封じの鎖でぐるぐる巻きにされていた。

「よお、やっと起きたか。あまりにも遅かったから、王に処刑の許可をもらったぞ。」

目の前には赤鬼がいた。ランサムはその言葉より光景を見て、絶望した。

「さあ、何か言い残すことはあるか？」

仁王立ちの勇者の右手からは、溜めすぎた魔力が外にバチバチと漏れ出している。

ランサムは、とにかく鎖を引きちぎりたいため肉体強化をしようとするが、魔力を操作できない。

ランサムは、勇者をキレさせ、鎖を砕くぐらいの攻撃をさせるしか逃れる方法が思い付かなかった。ランサムは生まれてから一番の恥ずかしいセリフを言う、

「ああ、聞いてくれ。俺は！魔王討伐に参加したかった！けど……闇属性だから言い出せなかったんだ。それに、盗人を止めたかった！」

もちろん嘘っぱちである。

ランサムは、『今さら何を言う!』という怒号と共に、攻撃が来るのを待った。

「!？」

勇者は……………フリーズした。

「あれ？おい」

ランサムは、てつきり溜めた魔力をぶつけて来ると思っていたので、完全に予想外だった。

ランサムはつい黙ってしまった。

するとだんだん何かが聞こえてきた、

「ま……………な。

ランサムは、途切れ途切れで何か聞こえてきたので、黙って聞く。

「まっ……………許可を……………な」

ランサムは少し耳を近づけた。

「まって……………許可を……………て……………からな」

ランサムはさらに耳を近づける。すると、勇者はいきなり、

「待ってる！許可を取って来るからな！」

とつさに耳を押さえるランサムを尻目に、走ってどこかに行ってしまった。

一人、残されたランサムは状況を理解すると思わず呟いた。

「……………まじで？」

第6話（前書き）

短いです

第6話

ランサムは、どうしてこうなったか納得いかない顔をしながら城壁に向けて町を歩いている。

なぜなら、成り行きで勇者と仲間になってしまい、さらに魔王を倒す旅に出ることになってしまったからである。

そんなランサムに弱そうな声がかけられた、

「あの……、軽業師さん」

この声の主はランサムを捕まえる時にいた王宮弓兵、ちなみに風属性である。

軽業師というのは勇者がランサムを連れて行くのに対して王宮が、盗人を行かせるのは無理と言った際、「じゃあこいつは今から軽業師だ！」

と言った無理矢理に押しきったためである。

「なんだよ？」

ランサムがそのままのテンションで答えると、

「ひっ……！？その……自己紹介とかしないんですか？」

勇者に追われてから彼は名乗って無いので、誰もランサムの名前を知らない。ランサムは後のことを考えて偽名を名乗ることにした。しかし、とっさに偽名が思い付くはずがないので「どうする…

…名前……名前……！」かなり必死だった。

そして何とかひねり出したのが、

「ジョーン＝スミスだ、よろしく」

とても怪しい。いきなり山田太郎と名乗られるくらい怪しい。

しかし、

「ジョーンさんですか！よろしくお願ひします」

にこやかに言う弓兵の少女。ランサムに大きな罪悪感が芽生えた。
「それ本名か？」

いきなり立ち止まり、勇者が問いかけた。

「……当たり前だろ？勇者様の名前は？」

少し間が空いたが、話をなんとかそらした。

「ああ、レイア」ファンションだ。それとわざわざ勇者様つてのやめろ、気持ち悪い」

さらっと言った後に一言多い、口の悪い勇者である。

「セ、セレナ」アードレスです。がんばります」

弱気な声で弓兵が言う。

「アーク」ゼンデインスです、よろしく」

白魔導師が言った。

メンバーを見て、ランサムは疑問に思った、

「なあ、なんで元は前線一人、援護二人なんだ？」

それを聞いたレイアは、

「今は依頼を受けて森に行ってるから、戦士ギルドに迎えに行くんだよ」

どこかを見ながら答える。

ギルドとは酒場のような建物で、依頼の仲介役をしたり依頼を受諾した者をまとめたりしている組織である。

「じゃあまずギルドに行けばいいんだな」

そして一行は戦士ギルドに歩を進め出した。

第7話（前書き）

おとといに投稿したはずなのに……

第7話

「やけに騒がしいな？」

戦士ギルドが入っている酒場に行くと、レイアが言った。

「どうせ喧嘩だろ？酒場はもめ事が多いからな」

「% x & !」

ランサムが言うと同時に、聞き取れないような怒声が聞こえた。

勇者一行がそちらを見ると、凜とした軽装の女性に、激昂した柄の悪い鎧の男が突っかかっているのが見えた。

「品の無い男だな」

ランサムが呆れたように言うと、

「心配ですね」

アークがいたわるように言った。

「あの女、サーベル持つてるとはいえ軽装だからな」

ランサムが同意するように言うと、

「……いえ、あの男がです」

アークが意味不明なことを言った。

「どういうことだ？」

ランサムがわけが分からないといった風に言うと、次の瞬間に男はサーベルで袈裟懸けに斬られていた。

「は？」

酒場の空気が凍った。

「心配するな、死にはしない」

そこへ、冷たい声が響いた。

真っ先に我に返ったのはランサムだった。

「おい！何やってんだ！？」

女性に問いかける、

「捕縛しようとして抵抗されたから斬っただけだ。今兵士に連れていかせる」

さも当然のように女性は答えた。

ランサムは思った、「いくらなんでもやり過ぎだ」　　ちなみに

ランサムは、今年に入って半年で40人ほどに重症を負わせている

……どっちもどっちである。

それを知っているセレナは、

「あ、あの。ランサムさんもあまり変わらないんじゃないんじや……」
がんばった。

「貴様も騎士か？……あっ！？勇者殿！」

それを聞いた女性が、ランサムの職業を勘違いしつつ、勇者に気づいた。

「久しぶりだな。仕事、はかどってるか？」

勇者がそれに返す。

「知り合いか？」

ランサムが小声でアークに聞いた。

「ええ、もう一人とは彼女のことです」

アークは女性を見ながら答えた。

「アークとセレナは分かりますが、そいつは誰ですか？　もし

かして仲間ですか？」

すると女性がランサムを見ながら勇者に聞いた。

「ああ、緊急で入ったんだ。不満か？」

それに勇者が答えた。

「いえ……しかし、試させてもらいます」

彼女がそう言い、いきおい良く踏み込んだ時には、予想していたかのように勇者一行はランサムから離れていた。

「は？」

そして、ランサムが声を出した時には5メートル程距離を詰め、ランサムをサーベルで斬った。

「うおっ！？」

しかしそれはランサムの一つ覚えの肉体強化で硬くなった皮膚を、ガリガリとした音を立てながら引っ掻いたただけだった。

「肉体強化か」

それに女性は苦虫を噛み潰したような表情をした。「何すんだ！」
ランサムは問いかけた。

「言った筈だ！試させてもらうと！」

きつく女性がいった。そして刀身が赤くなる。

それにしても勇者と話しているときと言葉遣いが違いすぎる。

「げっ！？炎かよ！」

ランサムの表情が引き吊る。

なぜなら、火属性は近接戦闘に特化した属性だからである。

女性がサーベルでランサムの首の位置を外側から薙ぐ。それをランサムはしゃがみ、右アッパーを繰り出す。

しかし、それを女性はそのままの勢いで、左の後ろ回し蹴りでわき腹を狙う。ランサムは腰をひねり、アッパーしている右手で止める。

「くそっ……結構速いな」

ランサムが悪態つき、体勢を崩させるために足を払いにいくと、

「火傷するぞ」

女性がそう呟くと、体を赤い魔力がぼんやりと覆い、たランサムのズボンが燃えた。

「うおっ！？」

急いで身を引き、ズボンの火を消そうとすると、

「目は硬くないだろう？」

目の前まで赤いサーベルの切っ先が迫り、ランサムの右目に吸い込まれるように進んだ。

第8話（前書き）

6600PV……最初は1000いかなかったと思うけど、この小説を見てくれてありがとうございます！

第8話

酒場に金属がこすれる音と同時に、柔らかい物が潰れ、焼ける音、さらには苦しみを感じられる堪えた声がした。

「ぐっ……………!？」

金属がこすれる音は、まぶたの剣が触れた部分から。

柔らかい物が潰れ、焼ける音は剣先が突いた眼球が、剣の魔力で焼ける音。

苦しみの感じられる声は喉の奥から。

全てランサムから発せられた音。

まともならその音を聞き、表情を歪めない人はいないだろう……
……相手以外は。

「やはり、眼球は硬くないみたいだな」

苦悶の表情を浮かべるランサムを見下ろしながら、その女性は冷たく言った。「ぐっ……………なんてことしやがる……………」

ランサムは右目を押さえながら言った。

「まあ、もう二度と右目は使えんだろ。旅は諦める」

女性が剣を鞘に収めながら言った。

まあランサムに行く気は無いのだが、このままではまた牢屋行きで、即処刑もあり得るので意地でも途中までは行く必要がある。

しかし、目を潰されると距離感も分かりにくくなり、隙もできるため戦力外になり、行けなくなる。

どうすべきかランサムは迷い、ひとつの結論に至った。

「ははっ……………くははっ！」

ランサムは自嘲気味に笑いだした。

「どうした？気でも触れたか？」

女性は呆れたような顔でランサムに問いかけた。
すると、

「右目が使えないなら、使えるようにすればいい」

ランサムはそれん言うと同時に、右目と右手に魔力を集中。右目の治癒力を高め、そこに右手の魔力を叩き込んだ。

「ぐっ!?!」

ボコボコという音が、その右手から漏れ出していた。

しばらくすると、大きく息をはくとランサムは、

「手応え……あつたな」

と呟き、ランサムが手を離すと、魔力の影響により白目まで、真っ黒になった眼球がランサムの右目にあつた。

「なっ……!?!」

それを見て女性は驚いた。肉体強化はあくまでも治癒力を高めるだけで、なくなった部位を作るなんていう効果は無いからだ。

しかも魔力の色が黒……だが勇者がそれを黙認しているということとは、これだけのことをしたのが人間だということだ。

そんな女性を見据え、

「今度はこつちが潰してやる……!」

ランサムは、肉体強化で全身に力を溜めながら言った。

「終わりだバカ野郎!」

そこへ、怒声と共に光弾が飛んできて、勢いよくランサムの頭に直撃した。

「っ!?! 何しやがる!」

ランサムは頭を押さえながら、光弾の犯人であるレイアに言った。「まったく、迎えに来ただけで殺し合いでもする気か?」

そう言うレイアは出口に向かって歩き出した。それにセレナとアークがついて行くと、女性も焦ってついて行く。

「おい!いきなり始めたのそいつだろ!?!」

ランサムがむなしく叫ぶも、一行はすでに聞いていなかった。

第9話（前書き）

一話一話が短い………

第9話

「さて、お前の武器を買いに行くか」

活気のある通りを歩きながらレイアが言った。

「けど俺の金は没収されたぞ」

ランサムが苦々しい表情でそれに答えた。

「盗んだお金ですけどね」

アークが付け足す。

「お前は何をやっていたんだ？」

それを聞いて女性が問いかけた。

一同の足が速まる。

「か、軽業師だって」

ランサムが焦りながら言うつと、

「そうか……軽業の技術で盗みか」

女性が納得したように言った。しかし、口元が引き吊っている。

「いや、これはだな……」

ランサムが考え込むと、

「いや、この先は王都を出てから聞こう」

今度は、誰もが魅了されるような笑みを浮かべていた
笑
っていない目が殺気立っているのに、気付きさえしなければ。

「おい、着いたぞ。それと金はある程度、王宮からもらった」

レイアが一行に言った。そこは斧と剣がクロスされた看板が、
扉の上に掛けられている建物だった。

一行が中に入ると、

「はい、いらっしゃい。……冷やかしはお断りだよ」

カウンターにゴツイ老人がいた。

「短剣を見せてくれるか？」

ランサムが前に進み出て言った。
すると、

「見るだけか？」

老人は冷たく言った。

「ロクなものが無かったらそうなるな」

ランサムは、煽るように言う。

「フンツ、口が過ぎるガキだ」

老人が嫌そうに言いながら、カウンターの奥から商品をいくつか出す。

「ほら、さっさと決めろ」

そしてぶつきらばうに言った。

出されたのは何本かの鞘から出された、形も長さも様々な短剣やナイフ。

「ん。じゃあ、この3本と投げナイフを15本と、それぞれ鞘をくれるか？ 投げナイフは5本ずつで」

その中から、刃渡り20センチ程の片刃のつば付き短剣を。さらに、刃渡り10センチほどの切っ先だけが両刃のナイフ。それと、金属だけの何の飾り気も無い投げナイフをランサムは選んだ。

「注文も、買うのも多いな。暗殺でもする気か？」

老人がランサムに言った。

「剣は使いづらいんだよ」

ランサムは苦笑いしながら言った。

「そうか。ほら、長さは自分で変えろよ」

ベルトが何本かと、ベルトを通せる鞘に入った武器が渡された。

「ありがとよ。代金はそいつが払うから」

レイアを指差して言い、ランサムはせっせと装備を付け始める。

「ああ」

そいつ発言に納得いかなかったようだが代金を老人に渡す。

「……確かに。さあ、けたらさっさと出てってくれよ」

老人はそう言うのと奥に引っ込んでしまった。

「よし、終わったぞ」

腰の後ろで刃先が左を向くように短剣を、ナイフを左手に、投げナイフを太ももと両方の二の腕にしまった。

「……………慣れてないか？」

女性が言った。

「気のせいだつて！」

ランサムが言うと、一行は王都の門に向かって歩き出した。

第10話（前書き）

すみません、同窓会などで忙しかったので遅れました。

第10話

同じ大きさに切られた石で丁寧に造られた巨大な壁の間に、王都の出入口の一つはあった。

それは普通の建物より大きく、表面を魔法で幾重にも守られている両開きの木製の扉で、所々に金属で装飾が施されている。

「はい、これが道中にある皆の通行証です。再発行はここです。できませんので、くれぐれも無くさないようにしてください、勇者様」

「ああ、ありがとよ。王様にはよろしく言つといてくれ」

その前で、勇者一行は都から出る手続きをしていた。

「さあ、行くぞ。」

レイアは、まるで子どものように笑いながら後ろを振り向いて言った。

「ああ、夜までには野営ができるところに行きたいしな」

それにランサムが嫌そうに返す。

そして一行は、送り出すように開けられた門の間を歩いて通り、長く、辛いけれども楽しい旅が始まった。

半刻ほど歩くと酒場にいた女性が立ち止まった。

「そろそろいいだろう、お前は何者だ？」

ランサムにサーベルを構えながら言う、

「なぜ闇の属性なのに人間なんだ？ 擬態でもしているのか？」

続けて淡々と問いかけた。

「いやいや、前例が無いだけで魔族扱いしなくていいだろ！」

ランサムが焦りながら答える、

「魔王討伐という大仕事に、いきなり闇の属性を持つやつが入ってきて怪しまないわけが無いだろう？」

女性は訝しげに聞いた。

「あゝ、それはレイアに聞いてくれ」

ランサムはそれに苦笑いしながら答えた。

「レイ……！？なぜ名前で呼んでいる！」

女性が驚きながら言った。

「お前が言つと気持ち悪いから、勇者様って言うなって言われたんだよ」

ランサムがため息をつきながら返した。

「それもそうだが、なぜ名前なんだ？」

気持ち悪い発言には同意のようである。

「……………苗字で呼ぶのが面倒なんだよ」

軽くへこみながらランサムは言った。

「……………いいんですか勇者殿？」

女性が聞くと、

「堅苦しいのは嫌いだからな」

それにレイアが軽く答える。

「勇者殿がいいなら…………。話がそれました、なぜ彼はいるんですか？」

ランサムを横目で見ながら言った。

「ああ、こいつは盗人なんだよ。けど、この属性のせいで表社会に出れないから魔王を倒して、魔族じゃないのを証明して、足を洗いたいんだってよ」

ランサムが、微妙に言つた覚えの無いことを言ってくれた。

「……………そうゆうことだよ」

しかし、指摘するわけにもいかずに同意した。

「そうか……………名前は？」

納得した様子の女性がサーベルを降ろして問いかける。

「……………ジョーン・スミスだ」

ランサムは内心、偽名がバレないかどうかの不安で心臓が破裂しそうだった。

「ジョーン……………か、リリアナ・ジープランだよろしく頼む」

幸いにもバレなかった。それとも、気を使つたのだろうか。

そして一行は再び歩き始めた。

第11話（前書き）

変な所で終わった……。

1万PV……ありがとうございます！

第11話

勇者一行が王都から二刻ほど歩き、森へ入ろうとした時にセレナが立ち止まった。

「モンスターが30メートルほど奥にいます。おそらく10体だと思います」

そして、静かに、丁寧に言った。

「さすが弓兵……。なあ、全部倒すか？」

ランサムが短剣を抜きながらレイアに聞いた。

「ああ、けどお前の實力見てみたいから一人でやれ」

レイアはのんきにあくびをしながら言い放った。

「ええ、幸いアークがいるので、肉体強化で治せない怪我をしても治せますから」

リリアナは、ランサムが眼球を再生したのを無かったことにしていた。

「無くなった部位は生やせんけどね」

アークが付け足すように言った。

「ああ、分かったよ。もし危なくなったら助けてくれよ？」

ランサムはうんざりした顔で森へと歩き出した。

気配を消し、奥へ進むと、そこではガリガリで不健康そうな肌の色をした、小柄な人型モンスター ゴブリンがお食事だった。

それらはどうやら行商人を襲ったようで、近くに中から商品らしきものが散乱した馬車が見える。

15メートルほど先で取り合うように商人の死体をむさぼっているのが5体。10メートルほど先で馬車をあさっているのが3体。5メートルほど先に会話をしているらしき2体。

ランサムはまず手前の2体に近づいた。

両手に肉体強化をしてから、両手に投げナイフを1本持つ。

そして、3歩ほど進んだところで右手で片方に投げナイフを投げつけ、手際よく左手から右手にナイフを渡し、もう片方にも投げつける。

そして、それは放物線をほとんど描かずに、2体の頭に深々と刺さった。

ゴブリンは、傷口から血を少量流しながら崩れ落ちた、ランサムはそれが地面につく前にそれぞれの首を掴んだ。

そして、それを馬車にむけて力強く投げると、短剣を抜きながら、食事中のゴブリン向かって走り出した。

投げられたゴブリンは、投げられた衝撃で首がねじ曲がり、あらぬ方向を向き、仲間へと突き進んだ。

馬車にいたゴブリンは、ぶつかる寸前に気づいたがよけれずに、全身から木が強風で倒れるような音を立てながら馬車の奥へ突っ込んだ。

ランサムは状況が理解できていないゴブリンの集団の中心へ、飛び込んで短剣を横薙ぎに振るい、4体の首をはね、噴水ができると同時に、左手でもう1体の顔をしっかりと掴むと、ゴブリンの頭が手から出た魔力で破壊され、中身が飛び散った。

そして、馬車の中でうごめいているゴブリンを馬車の外へ放り出し、そこで止めを刺した。

「終わったぞ！」

森の入り口へ歩きながら知らせた。

「まったく、簡単にやったな。」

レイアがゴブリンの死体を横目で見ながら言った。

「最後のは何をやったんですか？」

セレナが不思議そうに聞いた。

「ああ、握り潰すのが気持ち悪いから、魔力で相手を弾き飛ばすのを掴みながらやったんだ。密度を極端に高めるのは苦手だけど、一部に溜めて、放出くらいならできるから」

ランサムは、最初の2体から投げナイフを回収しながら言った。

「溜めるのと密度を高めるのは違うのか？」

リリアナが怪訝そうに聞いた。

「なんと言っか……………溜めるのが溜めるで、圧縮するのが密度を高めるなんだ。だから、肉体強化で密度を高めでもしたら、体内に空洞ができる。けど溜めるは、染み込むみたいな感じだから問題が無いんだ」

ランサムは装備から血を拭いながら言った。

「放出しても衝撃波みたいにしかならないから、相手を固定しないと、弾くしかできないんだ」

今度は、短剣の刃の具合を見ながら言った。

「武器が好きなんですか？」

ランサムを見ていたアークが、確かめるように言った。

「まあまあだ」

さつさと短剣を収めながら言った。

「……………そうですか」

納得した表情でアークは呟いた。

「さあ、こいつらの仲間が来るまでに行くぞ」

ランサムが言うと、

「この馬車はどうするんだよ？」

レイアが止めるように言った。

「どうするって……………必要な物もらってからは放置に決まってるだろ？」

場の空気が凍った。

第12話（前書き）

短いし、内容が……

第12話

「……な、なんだよ？変なこと言ったか？」

場の雰囲気、不審者を見つけたようなものに変わったのをランサムは感じた。

「なあ……普通は埋葬してやったりするだろ？」

レイアが気まずそうに言った。

「物色して放置はさすがに……」

リリアナも、意外に優しいらしい。

「それはあまりにも……」 セレナはかなり引いている。

「賛同しかねます」

アークは明らかに不快そうだった。

「いやいや、別にいいだろ。埋葬なんかしてたら、血の臭いに寄せられてここら一帯のモンスターが集まって、対処に日が暮れるぞ？」

「夜に進めばいいだろ！」

勇者が言つと。

「ゴブリンのいる森に夜間もいる気か？」

ゴブリンは、個々は強くないのだから知能が高く、洞窟を根城にして50体ほどの群れで行動する。

さらには、その数で生息できるとなると、栄養状態の良い土地なので強いモンスターも多数いる。

「……………分かったよ。その代わり、物色は無しな」

レイアが渋々同意し、

「じゃあ、頼むぞ」

「……………は？」

ランサムへ丸投げである。

「何で俺が！？埋めるって言ったのお前だろ！」

ランサムが訴えると、

「ほう……女に労働させて、自分は見物か？」

リリアナが黒い笑みを浮かべながら言った。

「……分かったよ！やればいいんだろ！」

洪々、二の腕の途中まで肉体強化をしながら地面に突っ込むと、腕を掬い上げて土をかき出した。

「さっさと行こう」

そこに商人だったモノを入れると、雑に土を被せた。

「……まあ、いいだろ」

レイアは雑なやり方に納得していないようだった。

そして、一行は早足でその場を離れた。

その後は、気配を感じると迂回などをし、強いモンスターに出会わずに、森を抜けた。

森を抜けた先には平原、しばらく行けば関所につく。

「……あの、煙が多くないですか？」

関所がある方向に、多数の煙が見える。

関所は泊まり込みで交代で守りをするため、一度に少しの兵しか炊事をしないはずである。

「確かに多すぎるな……急ごう」

レイアに急かされ、一行はペースを上げた。

関所が見えてくると、門に何かが吊るされていた。「肉体強化で見れるか？」

「ああ、少し待ってる」

レイアに言われ、ランサムは目に強化を集中させると見たのは、鎧を脱がされてめつた刺しにされた兵士が逆さに吊るされていた。

「あれは兵士だな。鎧を脱がされているから人にやられたんだな」

「そうか、動く物は？」

「いや、なにもいない」

「そうか……」

レイアは誰も生きていないと分かって残念そうだった。

一行が関所に着くと、そこでは兵士が惨殺されていた。

四肢が無いものから、座ったままの姿勢で首が無い死体や、はりつけ磔に

されて矢の的にされた死体まで、様々な死に方をしていた。

「ひどいな……」

レイアが呟いた一言に同意するように、全員が顔を歪める。

「とりあえず調べよう。話はそれからだな」

リリアナの提案で一行は散開した。

第13話（前書き）

15000PVありがとうございます！
よろしければ感想を……

第13話

散開してから、まずランサムは、関所の建物の中を調べることにした。

建物の中は荒れていて、盗人の経験上この行動は、何かを探しに誰かが入り、時間が無かった盗人や、興奮状態になった強盗がする行動である。

兵士が全滅していることから後者であると、推測できた。

「火事場と盗人を一緒にするか、あの勇者は」

ランサムは笑みを浮かべながら、この関所の責任者の部屋に向かった。

「まだ残ってるかな？」

部屋に着いたランサムは早速、荒らされた金庫に手を伸ばした。

閉まりかけの扉を開けると、中には通行の際の賄賂であろう、金貨が入った小さな袋が少し残っていた。

「よし、残ってた」

懷にしまおうと手を伸ばした瞬間、首筋に刃が当てられ、言葉をかけられた、

「貴様、何をしている？」

声の主はリリアナである、

「……………襲撃犯は、何を取ったのかなって」

ランサムは、苦し紛れの言い訳を言った。

「ほう、では何が『残ってるかな？』だ」

バレバレである。

若干、ランサムの首筋に刃が食い込む。

的確な指摘に、ランサムは何も言い返せない。

「今回は多目に見てやる。さあ、分かった事を言え」

ため息とともに、首筋から刃が退けられた。

ランサムは首筋を撫でながら、

「まず、方法が荒すぎる。それに、普通は関所を盗賊は攻めない。だから、金に目が眩んだ傭兵だと思う。」

ランサムは、自分なら夜に忍び込むと付け足した。

「傭兵か……それらしいのはすれ違わなかったから、次の街だろうな。勇者殿に報告するぞ」

リリアナは、ランサムの襟えりを掴みながら言った。

「この金貨はどうするんだ!？」

「ここに残しておく」

ランサムの訴えをバツサリと切り捨てながら、リリアナは別れた場所に歩き出した。

第14話（前書き）

今週は用事が立て込むので、あまり更新できそうにありません。

第14話

リリアナとランサムが、レイア達と別れた場所に行くすでに全員、集まっていた。

「手癖の悪い盗人を捕まえてきました」

リリアナがランサムを冷たい目で見ながら言った。「もう少し齒に衣着せてくれよ……」

ランサムが細やかな願望を言うと、

「黙れ、そんな権利があると思うな」

真冬の雪山のような目付きと声質で返された。

「容赦無いな……」

レイアが気の毒そうに呟いた。

「……何か分かりましたか？」

アークが少し躊躇ったが、切り出した。

「ああ、こいつが推測するには傭兵らしい」

リリアナが雰囲気を読み替えて答えた。

「傭兵かよ、追いにくいな……」

レイアが苦々しげに言った

「え？追うの？」

信じられない、といったようなランサムの一声で、リリアナの額に青筋が浮かぶ。

「貴様、何を考えている？」

リリアナが怒気を孕ませた声で言う。

「……またこのパターンかよ」

レイアは人生で、一番深いんじゃないかというぐらいのため息をついた。

セレナも珍しく、呆れている。

「……変なこと言ったか？追ってもメリットが無いだろ。それに、

こんなことする奴等はまともじゃない」

ランサムが呆れたように言った。

「盗人には優しさが無いのか!!」

リリアナがキレた。背後には、盤若の面がボンヤリと浮かび上がっているように……訂正、はつきりと見える。

「優しさって……貧民街育ちにそんなの求めるな！元凶が！」

「ぐっ……………!？」

ランサムの激昂した返答に、リリアナは苦虫を噛み潰したような顔をした。

貧民街は、外から人が人を棄てにくる上に、衛生環境や治安も最悪なため、そこで生き抜くには自分だけを優先しないと生き残れない。

さらに、たとえ貧民街を出ようと、普通の職場では雇ってもらえないため、犯罪で生活するようになるので、更に雇ってもらえなくなる悪循環である。

貧民街ができた理由は、貴族連中が王都内を身分と収入で住む場所を分け、収入の低く身分の低い人が集められた結果である。

「それに、傭兵なんて腐るほどいるんだ。もし見つけたら、でいいだろ？勇者一行にいるんだ、それぐらいなら手伝う」

ランサムは深呼吸をした後に言った。

「……………分かった。頼むぞ」

リリアナが答えると、返事もせずにランサムは町へと歩を進めた。

第15話（前書き）

すいません。用事が終わったら、そのまま行き着いてしまっ更新
できませんでした。

2万PV……！？予想外でした、御愛読（？）ありがとうございます。
す。

第15話

夕焼けに向かつて歩いている一行は 気まずい。今のを一行を一言で言うならこれだろう。

ランサムは機嫌が悪くなって黙々とあるいてる。リリアナは、ランサムをチラチラ見ながら気まずそうにしている。セレナは涙目になっている。アークは眉間の皺が増えてる。唯一大丈夫なレイアは、

「 なあ、今日はこころで野営しないか？」
「 気まずそうに切り出した。」

「 …… 分かった。もうすぐ夜だしな、薪拾ってくる」
ランサムは少し考えた後に言い、背の高い草むらに入って行った。リリアナは、ランサムの見えなくなりつつある後姿を、じっと見ていた。

「よしっ！」 茂みに入ったランサムは暫く歩きながら、薪を順調に集めていた。

彼は勇者一行から逃げるつもりだ。けれども、昼間に逃げても捕まるのがオチである。しかし、夜になれば交代で見張りをするはずなので、今はレイアに従うことにした。

「 おっと、これぐらいか」
どう振り切るかを考えている内に、薪を脇に精一杯抱えるほどまで集めていた。

ランサムが結局思い至ったのは、暗殺しかなかったが勇者を殺せば色々と問題が起きるが、アークは回復魔法が使えるため、生半可な攻撃ではすぐに治されるのでひたすら走ることにした。

稼業のためにはこれ以上勇者には付き合っていると、復帰しても盗んだ物の売り手が無くなるので、それを心配しながら来た道に戻った。

「遅い帰りですね……………多くありませんか？」

「悪かった。それとこの量は念のためだ」

戻って早々、アークが問いかけたのをランサムは、当たり前障りの無いように返していた。

「戻ったか。こっちに運んでくれ、飯にしよう」

レイアが来たので、ランサム達は雨避けだけの簡易テントへ向かった。

「何やってんだ？」

テントへ向かうと、リリアナの火の魔法が、サーベルに刺さった干し肉を勢いよく包んでいた。

「何って、炙っているのだから？」

焦げた臭いがするのにも関わらず、火を弱めないリリアナ。

「ほら焼けたぞ」

火を消し、呆気にとられたランサムに、サーベルに刺さった黒焦げのナニカを突き出す。

「その……………悪かったな」

そのままの体制で、ランサムから顔を背けて、小さな声で謝った。顔を背けて謝るのは、美人が際立って絵になっている。しかし、黒焦げのナニカが台無しにしていた。

「食え」

固まっているランサムに、輝かしい笑顔で言い放つレイア。

「けどコレ」

「食わないのか？折角、来るのを待って焼いてくれたのに？謝りながら差し出されたのに？最低だな」

指摘しようとしたランサムに、軽蔑した目で告げるレイア。涙目になるリリアナ。

退路は絶たれた。いくら盗人でも、女性を理由も無しに泣かすとなれば、従わざるをえない。容姿によるのが大半だが。

「ありがとう！」

リリアナと、何かに礼を言いながらソレを口に運び、美味しそう

に食べて

腹痛になった。

第16話（前書き）

大変、お待たせしました。
展開を急ぎすぎたか？

第16話

「くそっ……まさかここまでとは……………」

じわりじわりと脂汗が浮かび、浅くなる呼吸。更に内臓を引きずり出し、そこに塩を刷り込まれたような激しい痛み。

これら全て　リリアナ作の産業廃棄物による毒性である。

「貧民街で……鍛えた……腹が……………ここまで……………」

貧民街はマトモな食べ物が少ないため、腐ったものや生でネズミを食べるなどは珍しいことではなかった。まあ、そのせいで貧民街を中心に伝染病が流行るのだが。

「……………おい、腹のどこが痛いんだ？」

勇者が、キャンプの端の木に背中を預けているランサムに、小さな声で言った。

「食道が……痛い……………」

消えそうな声でランサムが答えた。

「そうか、暫くゆっくりしてろ」

いたわるように言った、

「　ただし、夕飯はきちんと食べよ？怪しまれるからな」

付け足すように言うと、その場を後にした。

「ホントにすごかった……………」

体調が急激に回復しつつあるランサムが、ゆっくりと後に続いた。

「さあ、飯だ飯だ！」

ランサムが少し遅れてくると、すでに全員が揃っており、セレナが干し肉と兎らしき肉を、焚き火を石で囲った上に乗せたフライパンで焼いていた。

それを今か今かと待っているのがレイア。とても勇者に見えない、寧ろただの子どもである。

「……みんな、料理できるのか？」

そんなレイアを放置したランサムは、セレナに話を振った。

「えっ……はい！多少は。小さい頃から、母の手伝いをしてましたから」

人見知りからか、セレナは驚くと恥ずかしそうに言った。

「私もやりましたね……懐かしい」

アークがうつすらと笑みを浮かべながら言った。

「そういえば、家事は父上が進んでやってたような……」
リリアナが考え込むように言った。

「………無いな」

レイアは、リリアナを納得したような目で見て言った。

ランサムは、もちろんやったことがない。

「……あの、そろそろ焼けますよ」

「分かった。さあ、食うぞ！」

各自が自分の分を木の皿に取った。

「じゃあ、見張りは2人でいいな？」

「ああ、最初はお前とセレナ、次に俺とリリアナ、最後はアークと
代わり番をするのを繰り返したな？」

セレナが言ったことをランサムが確認した。

「じゃあ、ゆっくり寝ろよ」

そして、各自は焚き火を囲むように寝た。

「おい、起きろ。交代だ。」

ランサムは寝て2時間ほどでレイアに起こされた。

「ああ、分かったよ」

ランサムが眠い目を擦りながら辺りをみると、リリアナもセレナ
に起こされていた。

「じゃあ、後は頼むぞ」

そう言つと、レイアは気絶するように寝てしまった。

ランサムは行動するには少し早いので、焚き火に背を向けて辺りを見ることにした。

すると、

「……なあ、魔王は倒せるだろうか？」

リリアナが不安そうに言つた。

それにランサムは、

「倒すとかの前に、場所を調べないとな」
喉を鳴らすように笑つた。

「そうだな。まずは探さないと」

「そうそ……………ん？」

ランサムは右の闇を凝視した。

「あそこ何かいないか？」

「……………私には見えんが？」

リリアナはランサムの視線の先を見るも、その先は闇だつた。

「俺は夜目がきくんだ。ちょっと見てくる」

ランサムは短剣を鞘から抜くと、ゆっくりとそつちへ向かつた

「リリアナ、来てくれ！でかいな……………何だこいつ？」

ランサムは闇の中からリリアナを呼んだ。

「分かつた。今、行く」

リリアナは武器を持つとランサムの声のする闇へ入つた。

「おい、どこだ？」

「こつちだ」

焚き火から15メートルほどの場所から、ランサムの声がした。
リリアナがそちらへ向かうと、『後頭部を』殴られ、気絶した。

「さて、急ぐか」

リリアナが意識を失つたのを確認すると、ランサムは闇に溶け込むような濃い黒の魔力を全身に纏い、音もなく走り出した。

第17話（前書き）

投稿速度が……2日に一回を目指します。

第17話

……もう散々だ。

へマ(?)をして捕まっつて、勇者の仲間になる？ 笑い話にもならない。腹立つこと言われて、おまけに毒物を食わされ、最悪だ。

「けど、もう終わりだ」

勇者一行から逃げた、自分には賞金が付くだろう。けど、今までの暮らしと大して変わらないんだ、いままで通りにやれば問題は無い。まあ、稼業を続けながら別の職にも手を出してみるか……暗殺なんてどうだろう？ 幸いにも闇属性だから暗闇では負ける気がしない。

属性は、状況によって威力が変わる。火なら空気が乾いていること。水なら空気が湿気っていること。風なら微風でもいいから風が吹いていること。土は地面がなるべく固まっていること。光は周りが明るいこと。闇は周りが暗いこと。

それぞれに特徴がある。

自分が闇を使って分かるのが肉体強化の際に、体から黒いモヤが出る。

このモヤは魔力なので霧散するが、纏うと空気抵抗が減ったり、足の裏でクッションになって足音が消える。更には、体を魔力で治した部分 例えば右目とかは、モヤを出し続けると黒い色が抜ける。まったく、便利な物だ。

「ん？ そろそろか」

馬でならされた道をひたすら走っていると、街の門が見えてきた。王都の近くということもあり、かなり大きい。

しかし、門をくぐる気など毛頭無い。安全のために門は夜間には閉じており、空くことは緊急時以外には無い。だから、街を囲う壁を登る。登ると言っても、見張りに見つからないようにコソコソ行くのだが。

「よつと」

なるべく音を出さないように外壁に飛び付き、石の隙間に爪をかける、腕の力だけでゆっくりと登った。

20メートルほど登ると、壁の終りが来たが、弓兵が巡回している。

弓兵は気配の察知に優れている。なんでも、矢を射つ際には風が重要なので、自然と鋭くなるらしい。

そんなことを考えながら、弓兵が横を向いた隙に反対側を悠々と通り抜け、外壁から飛び降り、地面に足が着く前にモヤを足の裏から多めに出し、誰にも見つからずに侵入できた。

やっと平穏な生活だ……魔王討伐なんて誰がやるか！

第18話（前書き）

やっと時間が取れた………

第18話

貧民街は危険だ、グループを組んだチンピラや人拐い、裏社会の組織の数が遥かに多い。だが、それを何とかできれば絶好の隠れ場所になる。

「まずは住む場所だな」

貧民街の奥、ここに住んでるのはロクな人間がない　まあ、金には正直なのばかりだが。

場所を買おうにも夜なので、やはり朝まで待つのだが寝るところがない。

なので家を奪うことにしたが、裏社会の組織の一員の家を奪うと舐められたとかで裏社会にも追われることになり、孤立する。そこで、寝たフリをして自分を襲わせ、そいつから家を奪う。それならば、物分かりのいいやつが多少いればなんとかなる。

演じるのは捨てられた子供、いかにも弱そうなのを。

「ああ、シチューが食べたいな……これからどうなるんだろう……」

その場に寝転がった。

「母さん……」

そして無警戒に目を閉じる

さすがに誰かが気付いただろ、後は夜間に襲いにくるか、それとも朝まで動きが無いのか五感を強化しながら待つだけだ。

こそこそと足音が近づいてくる……大人。2人か？チンピラだな。裏社会の奴等なら単独で殺そうとしてくる。

二時間も待たせやがって、家持ってんのか？

「おい、このガキは金持ってんのか？」

「わかんねえ、持って無かったにしても人売りに売れば良いだろ？」

珍しい髪の色だ、高く売れるぞ。

それに子供なら男でも関

係ない、駄目とてやれば値が張るだろ」

「へへっ、そうだな。じゃあとつとと終わらそうぜ」

チンピラ達は俺をどうするかの会話をすると、足下と頭の上の方にゆっくりと近づいてきた。

あと五歩というところで足音のリズムが少し止まる……飛びかかる気だ。

「行け！」

掛け声と共に、大きな足音が1歩。

その瞬間に目を開け、肉体強化をして体のバネを使い、頭の上の方のチンピラに逆さまで飛びかかる。

「え！？」

「が！？げ……………」

そのまま、あつけにとられたチンピラの喉仏に右手の指をまとめて突き刺し、一気に指の間を開けると、水が沸騰したような音を喉から出しながら仰向けに倒れた。

「ひっ！？」

喉から指を抜きながら爪先を、逃げようとしたチンピラを向けて着地すると、投げナイフを二本投げつける。

投げられたナイフの一本は、その鋭い刃先で狙いを寸分違わずに相手の左膝の皿を砕き、機動力を奪う。

もう一本は相手の左肩に深々と突き刺さった。

「ぎ……あああああ！　ぐっ！？」

そこで叫んだので、力強く踏み込むと、みぞおちを殴り、黙らせる。そして、

「さあ、今から言う要求に答えてもらおう。答えれば手当してやる」

右手で喉に短剣を押し当て、左手で相手の右肘を固める。

「分かった！分かったよ！何でも言ってくれ！」

チンピラは目に涙を浮かべながら懇願した。

「お前の家と特徴を教えろ、その周辺のめばしいものと、そこに住んでいる人数も」

「俺の家はここから北に百メートルほどの所だ！南に二十メートル程に金属の赤いドアの建物に、傭兵団の隠れ家がある！俺の家は木のドアのレンガ造りの小さな建物！そいつと俺以外は誰もいない！すらすらと答えてくれた。楽でいいな。」

傭兵団の隠れ家か……まあ、夜に歩けば問題ないだろう。

「言っただろ！？早く手当てしてくれ！」

うるさいチンピラだ。

「分かった、すぐに楽にしてやるよ」

ナイフで喉を引き裂くと喉を押さえようと必死にもがいたので、固めていた右手を折り曲げ、投げナイフを抜いた後に退いてやる。するとこのうち回り、少しすると動かなくなった。

死体を一別し、簡単な武器の手入れをしつつ、新居に向かった。

第19話（前書き）

やっと携帯を触れた。誰か1日を72時間にしてください、それと
t hの発音を文章で言つときの舌の運び方を……………

第19話

親切なチンピラ二人によって新居が決まった。新居はあんな二人が住んでいたわりには、かなりキレイだった。

……………今日は疲れた、寝よう。食糧は朝市の時に買いに行けば、勇者一行にも会わんないはず。今は寝よう。

よほど疲れていたのかキレイな方のベッドに寝転がると、意識がストンと落ちてしまった。

眠たい目をこすり、伸びをする。ゴキゴキと節々が鳴るのが心地良い。顔を洗いたいが井戸が無いので髪をかき上げる。こういう時には水の魔法が妬ましくなる……………ああ、買い物に行くんだった。鏡で顔に汚れが無いか、武器を着けたか確認。服はこのままで良いだろ、買つつもりだし。

眠気を引きずりながら外に出ると、荒んだ建物の隙間から見える清みきつた青い空の真上には高く昇った輝く太陽が。それは眠気を吹き飛ば……………ん？高く？　寝過ごした！！

勇者に遭遇する確率が上がった上に、朝市も終わった……………最悪だ。とりあえず見かけたら逃げようか、それともある程度叩こうか。まあ、その時に決めればいいか。

「ああ、勇者さえいなければ……………」

鉄球を付けたような重い足取りで貧民街の外を目指した。

やっぱり貧民街はどこも変わらない。孤児や病人、死体、闇市、人身売買、窃盗、強盗、殺人、売春、強姦。どこも一緒だ。家には簡易な罫を仕掛けた。盗まれて困るものも無いんだが、入られたらシャクだからな。

それにしても、三百メートル歩いただけで四回強盗に合った。当然、全員仲良く黙ってもらった。……………いや、殺してないからな！前歯全部折ったり、両目潰したただけだからな！

なるべく人目に付かない場所から市街地に出たのが幸いしたのか、歩いても貧民街にいたことはバレてなさそうだ。バレると面倒の極みだからな……………

買い物事態は大したことは無かった。勇者からくすねた金を使い、店の人には買い忘れたと干し肉や、果物、パンをまとめ買い。そのまま、流行より少し遅れたぐらいの服を買った。

困った事と言えば、鎧を着た危ない雰囲気の兄さんやオッサン達に絡まれた事だが、一人を殴った後に全力で逃げた。後悔はしていない。

仕事は今夜にでもしよう、夜に備えて仮眠、仮眠……………

第20話（前書き）

ああ、進まない……

第20話

夜空に響く、石畳を歩く音が好きだ。

自分が足を踏み出すたびに、心地よい音が一定のペースで鳴らされる。しかし、この仕事には邪魔になってしまふ。この心地よい音は、相手に自分の存在を教える鈴になる。なので、ゆっくり、ゆっくりとその軽やかな足音を小さくしていく。

足音が完全に消える頃には、貴族の居住区に差し掛かっていた。正直に道から入ると衛兵にバレる、これは当たり前だ。だから、居住区の一步手前にある、比較的大きな家の屋根の端に登る。そこから十メートルほどの、小さな貴族の家の庭にモヤを全身に纏わせながら突っ込む。モヤで輪郭が崩れ、さらには月も出ていない夜なら見つからないだろう。

庭師を雇い、キレイに切りつてある庭の隅に、間接を限界まで曲げて音を殺して着地する。

居住区の末端にある家だ。大して衛兵もないし、広さもない。まあ、この国は特別モンスターが多いので、貴族が個別に領地を持たずに国の要職や議会などに就くだけである。個別の領地を持つ大国も西の大陸にはあるらしい、近々行ってみよう。

などということを考えながら屋敷に近づき、二階の窓枠に掴まる………というよりは指だけなので引つ掛かるか？ よじ登って窓から中を見るが、近くに巡回している兵は見えない。投げナイフを隙間からねじ込み、そこから上に引き上げると、金属が擦れる音と共に鍵が外れた。

中に入ると、長く、明かりの無い廊下だった。所々に机があるのが見える。床はキレイな石だった………売れるのかこれは？

さて、金を探すか。物を盗っても、まだ買い手がいないから………。狙うは金庫。あるのは寝室か、書斎か、地下か。地下は寝室は勘弁してほしいな………。どれが何処か分からないし、開け

まくるか。

右に六部屋、左に二部屋あったので、左側にある近い方の部屋を開けた。そこにあったのはベットと鏡台、それとタンスだけ。もう片方も同じみたいだな。

残り四部屋、そろそろ衛兵が来るかな？この部屋で待つか。

衛兵は予想道理に巡回に来た。さすがに部屋までは入ってこれないようだ。待っている間に、いい物を見つけた。なんと、金庫がこの部屋にあった。恐らくサブだろうが、中身が金貨一枚と銀貨が少々だったので金貨一枚にすることにした。

結構盗れたしそろそろ帰るか。意外と楽だな？やっぱり王都がキツかったのか。

第21話（前書き）

やっと投下。更新が遅すぎるのと文章をなんとかしないと……

第21話

翌日の朝、まあ、起きたのは昼だが、仕事をやり遂げた感が清々しい。今日はビールでも飲みに行こう。場所は昨日……まあ、時間的には今日だが。人が少ないと特徴を覚えらるから、大きい酒場にしよう。持ち金は銀貨と銅貨。金貨は使いにくいからな。

「ビールと、この野菜と鹿肉のサンドつてのを一つ」

ギルドが入っているため、昼間は依頼を受けに来た人々で賑わっている。そんな中、カウンターに座ってビールを注文するのは少し浮くが、フードを被り、左手を吊っておいたので療養中と思われるだろう。

カウンター越しに渡されたのは大きなジョッキのビールと、麦パンに焼いた鹿肉と野菜を挟んだもの。これが今日の朝食だ。頼んだ後に思ったが結構、胃にきつそうだ……

そんなことを思いながらパンにかぶりつくと、焼きたての柔らかい鹿肉から肉汁がにじみ出た。熱いと思ったが、水に浸けてあったのか、冷たい野菜から出る水分と少量のオリーブオイルがちょうどいい温度にする。それを適度に味わった後、ビールで流し込む

最高だ。干し肉より格段にうまい。

そのまま一気に、飲み、食べてしまった、追加を頼もう。

「同じのをあと」

「よく聞け！ 関所を襲ったクス野郎！！」

カウンターの向こうの中々キレイなウェ이터さんに頼もうとした瞬間、聞き覚えのある、やけにはりきった声が聞こえた。まさか……いい加減にしるよ……

「お前らは叩き斬る！ どうせ毒でも盛ってから襲撃したんだろ？ 虫ケラどもが！！」

なに言っただ、あのバカ勇者は！？一部のガラ悪い集団から殺気が出てるぞ！……………ん？釣れてるのか、これ？あ、集団から明らかに悪人顔の大きな男が立ち上がった。酒場でしかけるのか！？アホか！！

そいつは勇者一行に向かって回りを蹴散らしながら走ると、セレナに向けて背負っていたクレイモアを振りかぶり、

「ッ！ッ！」

通った軌跡に光を残す、リリアナの火の属性でオレンジ色になったサーベルに腰から肩にかけて切られ、崩れ落ちた。……………あの速さで体勢を変え、居合い切り。更にはその一太刀で傷口を焼き、血が出ないとかデタラメだ……………。

「お前らがやったのか！！」

「心配するな、殺してはいない。まあ、保証はできんがなあ。社会の、人間のクズども」

いきなり襲うのも怪しいが、確定は早すぎるだろ、おい。しかもリリアナの言うクズどもって俺も入りそうだな？

そこからは乱戦だった。それを端から眺めて分かった。

アークの持つている杖は金属の部分で相手を刺して、近距離もなかなかいける。セレナは風刃で範囲攻撃、足の健を切り、相手を近寄らせない。リリアナはとにかく速い、相手の含み針をサーベルで弾く、どうやってんだ、あれ。レイアは速いし、力が強いからテールを粉碎。あれ？こいつ一人でよくね？

まあ、各自がそんなのだから、途中から逃げた客と入れ替わり店に入ってきた奴らを合わせて十人ほどに一方的だった。理不尽だなまったく。……………ちなみに飯はどさくさでタダになった。もうゆっくりできん、帰ろう。

席から立つと、吹き飛ばされたやつを踏みながら家に帰った。他の吹き飛ばされたやつが意識を取り戻し、ランサムの顔をしっかりと

と見たのにも知らずに。

第22話（前書き）

テストってこと忘れてた……。更新がまた遅れる……

第22話

あの後、酒場には衛兵が来て事態は収束されたらしい。

まあ、レイア達がボコボコにしたので後始末だけだったようだが。しかし、その場の事情聴取でせっかく傭兵と分かった容疑者（？）の護送中に、襲われて逃がしたらしい……………あの弓兵といい、大丈夫かこの街。いや、国か？

家に戻ると、窓が開いていた。そこには、窓から入った瞬間に頭上から瓶入りの酸性液が降ってくるのを作ったはずだ。さて、効果はどうだろう？

「……………ん？」

思わず声が出た。

瓶が割れた緑の破片と酸で焼けた跡、それと血らしき赤黒いシミがあるが、死体がない。酸が弱かったか？いや、ワインボトルで被ったんだ、動けるはずがない。仲間がいるな、復讐にくる

な、面倒だな。ああ、もっと違うトラップにしたらよかった。片付けるか……………。ゴミは家の横にばらまいた。もとから汚いから大して変わらなかったが。

時刻は太陽が西に60°くらいのところだ。夜に備えて寝るか。

ここはすることがないのが問題だな。食ってすぐ寝るのもアレだし、鍛練でもするかな？さすがに鈍る。酒場で見た限り、あいつらに見つかったら逃げれなさそうだ。なんか考えるか……………

鍛練と言っても町中の屋根を走りまわったり、高い建物によじ登ったり、投げナイフを暇なときに投げたり、チンピラを殴ったり。色々あるが、取り合えず投げナイフをやるか。

ベッドを別の部屋にどけて（もちろん肉体強化使用）、部屋の端から反対側の壁にナイフを投げ、手元のナイフが無くなったら逆立ちで反対側まで行き、回収する。面倒だが、肉体強化はバランスを強化できない。だから、鈍ると軽業ができなくなる。そうすると悲惨だ、稼業全体に支障が出る。

それを十回ほど繰り返したので、外に出ることにした。

外ではとにかく走る。屋根の上を一定時間走り、下を同じ時間走るのが繰り返す。貧民街は障害物が多いからちよいどいい。

「そろそろ降りるか」

走る時間は勘。大体一緒ならいい。

草の生えた建物の上から思いつきり足元を蹴り、落ちるように飛び降りる。左のつま先が地面に着いた瞬間、逆手の右手と左手を地面に着き、少し曲げていた左膝を伸ばす勢いを使って、前に回る、下方向への勢いを殺す。のだが、回る過程で青い瓶に引っ掛かり、横に弾かれると同時にそれが割れ、破片が刺さる。なかなか大きな破片もあったようで、痛みに顔が歪むが、慌てて体勢を整える。右手、右膝で横に回る勢いを殺す。……………なんと情けない着地だ。

「痛つてえ…………。周りにもつと気を付けないとな……………」

膝と、瓶の破片が刺さった背中が痛いので、その場に座りこむ。首だけを回し周りを見ると、そこはY字路だった。なかなかキレイでさつき引っ掛かった瓶以外はゴミがほとんど無い……………。どんだけ運が悪いんだよ。瓶に引っ掛かった時に焦って魔力が乱れて背中強化が半端になった、これは直さないと…………。まあ、怪我の方が先か、治そう。…………。治すとガラスが埋まるか？困ったな、鏡見てやるか誰かに、

「久しぶりだな？貴様、覚悟はいいか？」

……………この声、聞きたくなかった。

「リリアナ、これには訳が……あれ？他の奴らは？」
リリアナだ。逃げるとき殴ったから殺されるな……いや、逃げた時点ですか？

第23話（前書き）

久しぶりだとなんか違和感が……

第23話

足元にゴミの少なく、Y字路になっている以外はしばらく直線が続く路地。逃亡に的さないそこで、会いたくない奴と会ってしまっ
た。

「そのゝあれだ。先にこの街に入っただのは理由があつてだな……」

「ほう？三文芝居し、不意打ちをした理由？
是非とも聞かせて欲しいものだな？」

言い訳をしようとしたが、やっぱ無駄か。喋りながら斬りかかってきた、血の氣が多いなあ……

抜刀の勢いを乗せたサーベルが、首を切り落とす寸前にバックステップで回避しようとする。しかし、リリアナは更に踏み込み、返す刃で真つ赤になったサーベルを自分の胸の高さで薙いだ。

「げ！？」

思わず声が出た。背中のガラス片が埋まらないようにするため、胴体の肉体強化はしたくないな、長引くとやってしまいそうだが。

へソより十五センチほど上の位置めがけて左側から迫る刃を、左の二の腕 というよりはほぼ肘だが、それで何とか防ぎ、肘を置んだ腕の下へ潜るように腰を落とし、そのまま刃を皮膚に滑らせて右側に流すと同時に踏み込みながらのボディブローを放つ。

「が、あ……！」

手応えが浅い……寸の所で後ろに跳んだか？しかし、肉体強化をした上に、今まで格闘が主体だった人間の拳は痛いようで、うめき声を上げた。

一気に畳む！

殴った流れで左腕からナイフを抜き、リリアナに一気に迫る……
……はずだった。

「ぐっ！？」

腰を捻った瞬間、突き刺さったガラスが食い込み、激痛が脳を支

配する。やばい、殺られる！

「ハッ！」

態勢を立て直したりリアナが振るったサーベルは赤い光を帯びながら、痛みで怯んだ俺に向かって真っ直ぐに突き出された。

熱した刃物に刺されたことあるか？え？俺か？ 現在体験中だ。

「ぐっ……がぁぁ！！」

「チッ、腕か」

肉の焼ける音が自分の腕からする、かなりきつい！痛い上に精神的にも追い詰められる。肉体強化で治そうにもサーベルは刺さったまんまだ、治せない。

「ほう？気絶しないか。……痛いだろう、苦しむのを見て悦ぶような趣味はない。すぐ楽にしてやる」

そう言つと、リアナはサーベルを腕から引き抜き、俺の首へ振り降ろそうとする。が、ここで死ぬつもりなんてあるわけがない！

「誰が死ぬか！！」

黒い魔力を全身から波のように放出して、リアナを弾き飛ばす。追い討ちをしたいが、そんな余裕はないので肉体強化で屋根に跳び上がり、全力で走る。その際に、背中以外の傷を治しながら。

第24話（前書き）

色々あつて遅れました

第24話

疑問 聖霊様は俺を見た瞬間影も残さず消すくらい嫌い、それは実行されつつあるんじゃないかって。

理由 家が無くなっていた。いや、建物は無くなっているんだけど………派手に燃えてました。

家のある方向に向かって建物の上を駆け抜ける。背中と右の二の腕がひどく熱いが、そんなことは気にしていられない。今は家に帰り、鏡を見ながらガラス片を抜き、傷を治す。それを最優先にしないとダメだ！

「……くそつたれ」

脂汗が滲む、背中 of 激痛が足を動かす度に酷くなる。そのせいで普段は言わない一人言を言ってしまった。だが、もうすぐ家だ、帰れば……帰れば……！！

強化された視界に自宅を捉えた時、嫌なものが見えた。昼間の傭兵達とその仲間らしきやつらが、自宅の前でこそこそやっている。暫くすると、自宅は突然炎に包まれた。

「……は？」

あのまま啞然としてしまい、傭兵は悠々と隠れ家に戻ってしまった。そして今、石造りの自宅の窓や、扉があつた所からは嘲笑うように炎と煙が出ている………

ああ、もういいや、隠れ家に殴り込もう。あいつらが、どっかの組織と繋がっているかどうかは関係ない。

取り合えず、殴り殺そう

取り合えず、蹴り殺そう

取り合えず、惨殺しよう
取り合えず、斬首しよう
取り合えず、拷問しよう

さて、そうと決まれば即実行だ。体力的にはキツイが、まあいい
だろ。殴り込みだ。

歩いて二分もかからない場所に、傭兵の隠れ家はある。窓には力
ーテンがかかっている。よくある、二階建ての建物だ。
まずは、玄関の前に立っている見張りに近づき、

「あ……あ………！？」

ナイフで喉をかつ切る。傭兵は、喉から血の泡と汚ないうめき声
を出すと痙攣し、暫くすると動かなくなった。

よし、順調、順調。次は室内だ。

第25話（前書き）

これだけ書くのに2日もかかる……

第25話

ドアを魔力の放出で吹き飛ばし、全身に肉体強化をかけて全身の傷を治す。そして、背中にガラスを埋めながらお邪魔する。……右側にドアは二つ、左側には何もなく、廊下の奥に階段があり、その先にありそうな曲がり角がある。

「なんだ、お前！？いきな　あああああ！！」

抜き身の両手剣を右手に持った、体格のいい男が一番近い部屋から早足で出てきたので、さっと懷に飛び込み左の手刀で相手の右手首を吹き飛ばす。そして更に、左膝を右足で正面から踏みつけるように蹴ると間接が逆になり、その場に倒れた。

「ぐっ……この！クソ野　」

頭を潰すように踏んで止めを刺す。目玉や脳などが汚い床に転がり、靴の裏が汚れたが歩く感触で骨は刺さっていないらしい。

「おい！どう　」

同じ部屋からもう一人、さっきのよりは小さい男が出てきたので右手で顔を掴み、魔力を放出する。顔面が落としたタマゴみたいになったが、前よりはマシだろ。

その部屋のドア付近の壁の向こう側から音がしたので、右手に強化を集中させて壁に手刀を作り、肩まで突き刺す。仕止めた手応えがあったが、空いた穴と腕の隙間からレイピアが飛び出し、俺の右胸にまっすぐ伸びる。しかし、肉体強化を破れずに折れてしまった。
「くそっ！」

反対側から苛立ちを込めた声がした。だんだんと、二階のゆっくりだった足音が激しくなってきた。

「さて、急ぐか」

全身から魔力を放出すると、魔力の爆発音と壁の吹き飛ぶ音と共に、破片が飛び散る。中心はこちら側だからそれは相手に襲いかかる。

「うわ……」

ホコリが煙のようになり視界を遮るが、どうなったか気になったため確認すると、かなり惨かった。死体が二つあり、片方は四肢が吹き飛び、更には破片が胴体をごっそり奪い取っていおり、見る影がない。もう片方は最初に仕止めた方だろう。損傷は比較すれば少ない……比較すれば。この戦法は使えるか？いや、今度からは……

……

少し考えにふけた時、左から、肉体強化が無ければ半身を持つてかれそうな衝撃を受け、壁の残骸に突っ込んだ。

「……なんなんだ？」

辛うじて受け身を取り、四つん這いの姿勢になった状態のまま顔を向けると、そこには体格がいいとは言え無いやせ形で、皮の鎧を着、変わった模様の手袋をした男がすぐそばに立っていた。

この男がさっきのを？いや、無理だ。武器も持っていない、杖も持っていない。まさか、魔力の放出か肉体強化？
いいや、とりあえず殺ろう。

腰の短剣を抜くと、男は右の指先をこちらに向け………□元が歪んだ。

悪寒を感じてとつさに間合いを取るが、男の手袋の模様が光った瞬間、俺の胸に瓶の口ほどの風穴ができた。

第26話

一瞬、何が起きたのかわからなかったが、うつ伏せに倒れた体と、体温が抜ける感覚が教えてくれた。

奇跡的に心臓や肺は外れたが太い血管や気管をやられた。更に、背骨が吹き飛んでる。胸から下が動かない……………とりあえず止血を。

俺が咳き込みながら穴を必死に治そうとしていると、男は気色の悪い笑みを浮かべながら両手をこちらに向けた。さっきより手袋の模様の発光が強い。どうやら、止めを刺すらしい。……………せめて、道連れだ！

無駄な治癒をやめ、腕に強化を集中する。そして、腕力だけで思いつき飛びかかる。

「くっ!？」

驚いたようだが、男は手袋からのナニかを放つ。俺はあいての首に食らいつく。あいての放ったナニかは俺の足を潰したが、もう遅い、俺は既に男の両肩を掴んでいる。勢いよく引き寄せ、男の首に食らいつく、肉を噛みちぎる。それを吐き捨て、再び食らいつく。何回も繰り返すうちに、男は前から背骨が見えた。俺は胴体の風穴が増えた。これじゃあ自己再生は無理だ……………ああ、死ぬんだな。こうなった成り立ちを思えば、散々な人生だった。

貧民街で生まれ、父は不明。母は俺を捨てた。そして物好きな盗人…………『あいつ』に拾われ、盗みの技術や貧民街に外があること、家族を教えられた。俺には『あいつ』に親みたいだと言った。

するとあいつも息子みたいだと言った。けど違った。十二歳になった時に殺された、その時に『あいつ』は言った「お前を育てたのは家族として成長した後殺し、自分の感情の変化を観察するため」だった。それは夜の出来事だった、そして『あいつ』は酒

を飲んでいた。盗みの技術がある以外は普通の子ども、それなら殺せると思っただろう。けど、俺は普通じゃなかった。だから『あいつ』を殺し、家を奪った。

その後は盗みを繰り返した、強盗もした。そして同業者……『そいつ』に会った、『そいつ』は同年代でいいやつだった。けど、ある貴族の家に盗みに入り、いつも通り分け前の配分を始めると、にダガーを突きつけてこう言った「分け前が減るから死んでくれ」けど、『そいつ』は俺より弱かった

それからは手を組もうとしてくる奴を殺しまくった。殺して、殺して 完全に一人になった。

勇者に会った時、正直羨ましかった。心から慕う関係、快樂や金が人生の中心である俺とは違った……。属性が物語るように勇者は光の頂へ、俺は闇のどん底へ。

勇者達から逃げた。稼業は楽しい、続けたい。けど、そんなことは本意じゃなくて、本当はあの生き方が羨ましくて、眩しくて、認めたくなくて逃げたんだ。こういうのを素直な思考っていうのか？死ぬ寸前には素直になるのか、珍しいもんだ。

思い返せば返すほど、ろくでもない人生だった。……………やっぱ稼業は続けたいな。

力が抜けて目を閉じる瞬間、音が聞こえた。踏み出した音と、何かが爆発したような音。そして、

「大丈夫か！アーク！治療をー！」

「はい！」

「貴様……あんな魔法程度に……………」

「リ、リリアナさんも手を貸してください！」

羨ましいやつらの声が。何で助けようと？まったく、どこまでお人よしなんだ……

慌ただしいやつらの声を聞きながら、意識が太陽のように落ちて

い
っ
た。

第27話（前書き）

あれ？昨日投稿したはずなのに……

第27話

暗い……暗い………見渡す限りは完全な闇。いったい、ここはどこだ？体を動かそうとしても動かない。何で動かない？落ちる、そんな気がした。

「！？」

急に仕事中に幾度と感じた、落ちていく感覚がし、驚きのあまりに声が出そうだったが、声が出ない………あれ、耳が聞こえてない？聞こえてるよな？呼吸の音もしないから聞こえてないのか？………そういえば、呼吸してるのか、俺？上下する胸の感覚が無い。つまり、空気を吸い、吐く、そんな当たり前のことをしていないのか俺は？

そう考えると、急に眠気が間欠泉のように溢れてきた。

寝よう。起きていてもいいこと無いだろ、寝てる方が楽だ。

そう考えると落下する感覚がどんどん強くなるが、不思議と怖くなかった。むしろ、不思議な解放感を感じた。それにより、更に眠気が強くなり、眠りそうになった時にふと思った。

どうしてここにいるんだ？

急に眠気が不信感になった。頭が冴え、今の状況を理解しようとする。すると、落下する感覚が弱くなった。

ここに『来る』まで俺は何をしていた？そもそも『俺』って何だったんだ？

じわりじわりと、這うように恐怖が背筋を登ってきた。

思い出せ、『俺』は何だ！？ここはどこだ？どうしてここに『来た』！？

恐怖、不信感が一気に高まり、正常な思考ができない。

怖い怖い怖い怖い怖いコワイコワイコワイコワイ！！　　ここは

どこだ！！

ふと、聞こえていないはずの耳が何かを聞いた。

「息はしてるか？」

一言……その一言が不思議と俺を落ち着かせた。

そうだ、息をしないと。

動かないはずの肺を動かし、呼吸をし、胸を上下させる。すると、落下する感覚が消えた。

「起きろ、そこはそんなに楽しいか？」

……またあの声だ。

起きろって言っても、寝てないんだから起きようがない。どうしろと？

「しょうがない……オラア!!」

腹部に耐え難い激痛。殴られた？誰もいないのに!?

痛む腹を押さえようと手を動かそうとしたその瞬間、急に真上に吹っ飛ぶ感覚がした。

「うおっ!？」

声が出た。

上昇が更に加速する。

「よし、これでいいな」

そう言つと、声はどんどん遠ざかる。

「おい!俺は誰だ!？」

出るようになった声を張り上げ、聞いた。

さらに加速。

「お前?ジョン・スミスだっけ？」

……違う、俺はもつと違う名前だ。そう、確かサムだ。貧民街生まれのランサム・リザルトだ!

ラン

「違う、俺はランサムだ!」

さらに加速する。前方に光が見えてきた。

「偽名だったのか?あいつなんて言うかな……?」

声は、なぜか困ったようだ。けど、これは聞こえろ。

「お前は誰だ！」

加速により、潰れそうになるが声を振り絞って聞いた。

「俺か？レイア・ファンション　勇者だ。忘れたか？」

俺は、勢いよく光の中へ飛び込んだ。

「よう、調子はどうだ？」

目を開けると、そこには勇者がいた。

第28話（前書き）

駄文です……

第28話

正しい意志疎通って大事なんだな。

「調子はどうだ？」

暗闇を抜けると、自分がいるのは宿らしき部屋のベッドで、目の前に勇者がいた。

「あ……ああ、大丈夫だ………」

上体を起こそうとすると多少の痛みが背中走ったが、それを除けば楽に起こせた。

あの暗闇は何だったんだ？夢か？

いや、夢なら加速や落下の時の感覚はしないだろ。じゃあ、あれは事実か？だとしたら名前言っちゃったのは……改名するか？いやいや、あんな場所聞いたことがない。ましてや俺は街にいるんだ、夢だ夢。

「本当に大丈夫か、ランサム？」

………夢、だよな？なんでランサムって呼んだ！？そう言っただのはあの夢の中で

「ああ、あの暗闇の事で混乱してんのか？」

軽く言うな！！こっちは焦ってんだよ！

「あれは所謂あの世だ。よかったな、俺が居なかったら死んでたぞ………得意気に何言ってんだ、こいつ？」

「おい、その可哀想な人を見る目をやめろ！止め刺すぞ！！」

俺がドン引きしていると、青筋がこめかみに浮かんべながら引く原因がキレてきた。気が短いにも程があるだろ………

「悪かったよ。で、何で俺が生きて」

「俺が助けたって言うてるだろ！」 最後まで聞かずに答えてきた。なんでこんな不機嫌なんだ？

「違う、方法を聞きたいんだよ。あの世って事は、俺は死んだんじゃないのか？」

背中にガラス片が埋まり、胸に風穴が空き、脚が潰れたのになぜ生きてるんだ、俺は？

「死んだよ。アークが治療したんだが、傷が治るとほぼ同時にな」
レイアは思い浮かべるように言った。

「やっぱり死んでるじゃねえか……」

今見てるのは何だ？死んだら生き延びた場合を見るのか？

「ここからだ。お前が死んで肉体が空になったから、聖霊に頼み、俺が入ってお前が肉体に戻るよう働きかけた。賭けだったが、成功した。以上だ」

訳が分からん。まあ、気にしたら負けだな。

「そうか。賭けて言ったが、リスクってどれくらいだ？」

聖霊がなんたらかんたらには触れず、引っ掛かった部分を聞いた。
「リスク？俺も死ぬだけだが？」

「……………勇者が死ぬ『だけ』？」

「すまん、耳の調子が悪いみたいだ。もう一回言ってくれ」

「仕方ねえな。俺が死ぬだけだ」

「すまん、もう一回」

「……俺が死ぬだけだ」

「すまん、もう一回」

「俺が死ぬだけだ！」

「すまん、もう」

「うぜえ……」

綺麗、かつ鋭い右ストレートが顔面に刺さり、上体だけ起こしている俺を、ベッドに叩きつけた。

「い……………つつ……!？」

「何度も聞き返すな、蹴り飛ばすぞ……!」

蹴られはしないが、殴られたな。いや、それよりも言わねば、俺の生活のためにも！

「あのな？お前まで死んだらどうする気だ!？」

鈍い感覚の残る顔を押さえながら上体を起こし、言った。

勇者が死んだら代わりはいない。魔王がいるか不明だが、対抗できるやつは死なない方がいい。死なれると稼業が不味い、盗まれる側の物が無くなる。

「そんな時はそんな時だよ」

笑いをながらレイアは言った。

こいつ……何考えてんだ？

「まあ、成功したからいいだろう？ そんな事言ったら一人で殴り込んでこうなった、お前も大概だぜ？」

ん？

「気絶させられた上、衛兵なのに置いてかれたリリアナはかなりキレてたんだ。説教がありそうだな！」

ケラケラと楽しそうに笑うレイア。

話が噛み合って無い気が……。衛兵を逃走に連れていく犯罪者？アホか。それに、リリアナには説教どころか斬られたわ！

「まあ、魔具も手に入ったからいいだろ」

そう言うのと、レイアは懐からあの忌々しい手袋を取り出した。

「魔具？なんだそれ？」

今までに聞いたことの無い単語だった。

「ああ、王都にずっといたお前は知らなかったか。最近、魔物が使う付呪武器が付呪じゃ無いことが分かった。あいつらは武器や防具に特殊な呪文を刻み、魔力を流す事により効果を発揮する特殊な物、魔具にするんだ。」

「付呪武器とはどう違うんだ？」

「魔力を流して発動するから範囲や威力の調整が利く。欠点は使わないと効果が分からないのと、持っている奴が極端に少ない」

レイアは得意気に言った。

それを聞いた俺はこの事しか考えなかった。

「つまり……高く売れるってことか！？」

きつと今の俺は目が輝いているだろう、欲の光だが。

「……あ、ああ、物にもよるが結構高値で売れるぞ。売却には安全

管理上、戦士ギルドを通さないといけないが」

「よし！行くぞ！売るぞ！」

そう言い、ベッドから勢いよく立ち上がると、

「おい」

少し強めに背中を叩かれ、

「ぐ！？」

刺すような激痛に襲われた。

「ガラスは抜くのにアークの水魔法で場所を調べるんだ。けど、他の傷を治すのに魔力を使ったから今はまだ無理だ。明日になったら調べるくらいは出来るだろうから抜いてやるよ」

そう言つとレイアは俺をベッドに寝かせると、なぜか俺の枕元に手袋を置き、部屋を出ていく。が、扉を開けると立ち止まり、

「ああ、目印とはいえ、派手すぎる狼煙はあれだけにしてくれよ」
苦笑いしながら出ていった。

目印？狼煙？ああ、俺の家の火災か。多分、この手袋はちゃんと使いこなせてこともあるだろうが。

第29話（前書き）

描写が足りない……

第29話

「もうちょつと優しく抜け!!」

「黙ってください。もつと奥に埋めますよ」

体を動かさないようにしながら言った俺の助けを求める治療される側からの声は、アークの治療してやる側からの一言で潰された。

俺は目尻に涙を溜めながら、動かないように堪えていた。なぜなら麻酔をせずに、破片を取り出しているからだ。どうして麻酔もせずに破片の取り出しをしているかと言うと

「起きてください、治療します」

その声と共に、俺に何か冷たいものがかかり、眠りの海で泳いでいた意識が一気に釣り上げられた。

「うお!?!」

反射的にベッドから飛び出し……壁に頭をぶつけた。

「ぎ……あ!?!」「何してるんですか?さあ、早く上着を脱いでベッドに寝てください」

悶えている俺にアークは事務的な言葉をかけ、掛け布団をどけると、洗面器をベッドの横の椅子に置いた。

「じゃあ水被せんよ……………」

ベッドが枕を中心に濡れているので、寝心地はとても悪かった。

「麻酔したいですか?」

こいつ…………!

「当たり前だろ!」

「残念ですが、無理です」

「は?」

呆気にとられた俺を置いて、アークは話を進めた。

「麻酔に使う薬草が今季は不作なんです。それに、午後には出発し

たいので」

え？俺も一行に付いて行くこと決定してるのか？

「ですから麻酔はしません……ああ、これを着けてもらいます」

そう言いながら手に嵌められたのは、太陽みたいに光る手錠。

「リリアナさんの魔封じの手錠に勇者様の魔力を込めてもらいました。摘出の最中に肉体強化でもされれば、命に関わりますから。…

……さあ、始めますよ」

アークはそう言う杖を持って詠唱を始めた。暫くすると、一瞬、青い波紋がアークを中心に広がり、それと同時にガラス片が背中から抜け出ようと動き出した。

「ぎ……あ！？」

ズズズ……と動き続ける破片が肉を、皮を突き破り、少しずつ外に抜け出る痛み。そして同時に破片の通った後が再生するという、奇妙な感覚に襲われた。

「ぐ……う……！？」

呻く俺の後ろにいるアークは、集中しているのだろう何も言わない。

これが今の状態になる成り行き。もつとスマートなやり方は無いものか……

苦痛と耳に入る音は自分の呻き声。いつまでこの苦痛が続くのかと思つた矢先、呻き声ではない、ベッドに何かを落としたような音が立て続けにした。すると、痛みが次々と消えていき、

「終わりましたよ」

治療が終わつた事を知らされた。

「あー。もうちょっと優しく抜けよ」

「無理です。後、リリアナさんから伝言です。今後は魔法が使えない、魔具と軽業や格闘しか出来ない男、ランサムと名乗ってください」

背中をさすりながら不満を言う俺に、アークがさらっと言った

「おい、なぜ付いて行く事になってんだよ！？それにランサム？ジョンでいいだろ！」

なぜ俺が

その気持ちに頭が埋め尽くされた。

そんな俺に、

「ジョンは死亡したと昨日、報告しました。名前はこの一行しか知らないの」

「行く理由にはならん！今まで散々だったのに誰が行くか！！」

そう言い、上着を着て窓から出ようと窓枠に足を掛けると、

「そうですか……………せつかく、魔族から今のより”高値で売れる”魔具取り放題、今までの罪を”帳消し”、そして”魔王討伐後の不干渉”なのですが。無駄になり」

「俺が行くに決まってるだろ！さあ、旅は長いぞアーク！！」

見事に釣られた俺は、アークの腕を掴み、意気揚々とドアから部屋を出た……………手錠はしたままだが。

「おい、大丈夫か？」

部屋を出るとレイアがいた。

「ああ、大丈夫だ。さあ、旅を続けよう！」

高値で売れる魔具！帳消し！平穩！最高だ！！

「……………アーク、ちゃんと治療したんだよな？」

「思考まではどうしようも。しかし、あんな条件をよろしいのですか？」

「ああ、少しでも戦力が欲しい中で、腕が立ち、信頼できそうなやつがいたんだ。これぐらい安いさ」

そう言うのと、レイアは笑みを浮かべながら階段を降りて行ったので、俺とアークもそれに続いた。

……………さて、逃げ出すタイミングはどうするか。魔族について色々知って、信頼しきられたら上手いこと抜けるか、先は長くなりそうだ。

スリルがない盗みなんて面白くないからな

第30話（前書き）

大変遅くなりました。テスト期間中からちびちび書いた物なので長くなっています。

更新が止まった場合は、よろしければ活動報告をご覧ください。

第30話

年期が入っているが風格は失っていない、立派な門の外側に俺たちはいた。

「さあ、行くぞ」

レイアが気だるそうに言い、歩き出し、それに続いた。前々から気になった事がある。今のうちに聞いておこう

「なあ、馬は使わないのか？」

長くなるであろう旅に、なぜ馬を使わないのか、馬を使えば歩きよりも遥かに長く、速く移動できる。それに、大抵のモンスターなら振り切れるから消耗も少ない。

「この島国に魔王はいねえよ。これから船で大陸に渡るのに馬は要らん」

『しま』国？……なんだそれ？

「『しま』国って何だ？」「海に囲まれた国の事だ……海、見たこと無いのか？というより知ってるか？」

レイアは珍しそうに聞いてきた。

「ああ、出稼ぎでさっきの街に出たくらいで、王都からはほとんど出たことがない。海は聞いた事がある、水溜まりのでっかい版だろ？」

俺がそう言つと、

「そうか。結構知らないんだな……じゃ、なぜ魔王がこの国にいないか、聞いたそうだから話してやるよ」

と言つて来たので素直に聞くことにする。

「魔王、と言うより魔族がこの国にはいないんだ。けど大陸にはいる。恐らく、大陸がどうにかなれば、この国はどうにでもできるんだろうな。王都から一日で違う街に行ける狭さだしな……」

レイアは困ったように笑いながら言った。その笑い方はまるで、不安を隠すような笑いだった。

話題を変えよう

「これから名乗る名前はランサムじゃないとだめか？」「ああ、お前には言っただけだったな。リリアナが偽名を名乗ることにキレてな。本名じゃないとダメだって言っただけ、じゃないと切り捨てるってよ！」

レイアは先程とは打って変わり、はしゃぎ始めた。

この話題は好きらしい。玩具を買ってもらった子どもみたいだ……
……こういうのを微笑ましいって言うのか？……まあ、此方としては楽しくない話題だが。

「そうか。じゃあ、わざわざ魔法を使えないことにしたってことは、肉体強化も禁止だな？」

一番の問題はこれだ。この属性がバレると色々問題になる。けど、魔法が使えないということにするらしいが 肉体強化だけ使えるのはおかしいよな？この魔具（？）があるとはいえ、肉体強化が無いと心もとないんだよな。

「ああ、極力控えてほしいが、普段から強化しとけば問題ねえよ。それに、勇者の一行なをだからよ、仕方ないで済まされるさ」

レイアは意地の悪い笑みを浮かべながら言った。

勇者の意味を不思議な人達に履き違えてないか、こいつ？……
……まあいいか、勇者だもんな。普通のやつとは違うんだな。

俺がレイアの思考に呆れていると、

「リリアナは苦手か？」

後ろを歩いているリリアナに聞こえないように、小声で聞いてきた。

苦手か……むしろ嫌いだな。あんな辻斬り衛兵を誰が好きになるか。

「少々斬られたんだ、嫌いに決まってるだろ」

小声だが、当然のように言うと、

「だよな……お前の怪我の七割くらいがあいつからだもんな……」

……」

レイアは頭を押さえながら言った。

「リリアナはさ、犯罪者に時効と人権は無い主義だからさ、逃げる　逃げた犯罪者に容赦が無いんだ……」

レイアが、足元にあった石をまたぐ。すると、後ろから変な足音がしたので、誰かが躓いたようだ。

それにしても、悪かったな犯罪者で。自分が社会的にはクズだと自覚してるから、言ってることも分からなくはないが……

「だからさ、それを踏まえた上で少しずついいから交流してくれないか？」

「めんどくさ」

「乱戦の最中に斬られるぞ。冗談とか脅しじゃなくて……」

レイアの顔は気のせいかわつまつた様子だ。心当たりがあるのか？……どこまでこの旅に参加するかは分かんが、これ以上斬られるのは絶対嫌だな。少しの面倒で安全が少しでも得られるならそうするか。あのサーベルは痛すぎるしな。

「　分かった。善処する」

「そうか、そうしてくれると助かる」

俺の返答を聞くと、レイアは安堵のため息をついた。

さて、この一行の戦い方を聞いておくか、巻き添えとか嫌だしな。勿論、される方だが。

「なあ、お前らの　」

「敵です！」

俺がレイアに聞こうとした瞬間、後ろにいたセレナが声を張り上げた。それに反応し、全員が戦闘体勢に入る。俺は手袋の実験がしたいから武器を構えてないが。

それにしても、セレナの警戒が凄すぎる……言われた今もどっから来るか分かん。

「来たか……」

「あれは犬か？」

「狼のようですね」

俺以外には分かったようだ……肉体強化しよう。なんか不安だ。
肉体強化をすると、前方の林と右方の草原から生き物が動く音と、
獣の唸り声が聞こえた。

俺がレイア達を本当に人間かどうか疑っていると、

「あの、ランサムさん」

セレナから声を掛けられた。

「前方は私達が対処しますので、右方をリリアナさんとお願ひします」

俺が呆気にとられていると、

「そういう事だ。頼んだぞ」

レイアが付け加えるように言った。セレナは、木でできた弓に手を添えて、矢を弦につがえようとしているようにしながら、レイア達と前方に走って行った。

「え、勇者殿!？」

そこには俺とリリアナが残された。

「あー、よろしく」

取り合えず、納得のいかない様子のリリアナに声をかけると、

「手元が狂っても謝らんからな」

どうやらよろしくする気は無いらしい。……………手袋で後ろから

攻撃すれば大丈夫だろ、多分。

「じゃ、手袋試すから当たったら御免な」

「うっかりサーベルが飛んでくるかもしれんから気を付けろよ」

リリアナはこめかみに青筋が立ち、どう過失で始末しようか考えている。そっちがその気なら、防いでぶん殴ってやる。嫌いなやつに、容赦はしない。

俺たちは何をやっているんだろうか、近くまで敵が来ていたというのに

「ヴウ！」

「げ!？」

「つつ!？」

振り返っていたので、左から狼に飛びかかれた。「くそつたれ!」

首に食らいつかれそうになったので、倒れそうになるのを堪えながら左腕を噛ませる。……が、

「ぐ!？」

背面は防げず、延髄に食らいつかれた。ミシミシと、首から骨が軋む音がする。そして、狼のごわついた毛の向こうに、リリアナが狼の体重に負けて押し倒されてサーベルを落とした上に、喉に食らいつかれまいと狼の頭を必死に押さえているのが見えた。

助けは無い。武器も出せそうにない。なぜか、首から下の感覚が薄れる、何故だ!？格闘も使えない。魔力の放出で弾き飛ばすしかない!まったく、最近コレばっかだ。

「!!」

魔力を全身から放出する。黒い魔力は俺を中心に一瞬で広がり、膨大な魔力を短時間で放出して密度を持たせることで、足元からの岩石でも落としたような重い音と共に、周囲を弾き飛ばす。その瞬間だけ俺には何も聞こえなくなり、更には魔力の瞬間的に大量放出したことにより、のし掛かるような疲れに襲われる。食らいついていた二匹の狼は、断末魔を上げることもなく、顔面を粉碎され、弾き飛ばされた。

「あー、首が……………」

肉体強化を治癒に集中させると、首と腕の傷がみるみると塞がっていった。腕の方には狼の物らしき歯が刺さっていたが、指で掻き出して無理矢理取り除いた。その時に嫌な音がしたのは、言うまでもない。

首に手を当てて、治り具合を確かめっていると、リリアナが襲われていたのを思い出し、そちらを見ると 茶色を被ったようなリリアナが、無言で狼を次々と切り捨てていた。リリアナに敵わな

いと判断すると、狼が何匹かこちらに走ってきた。さっきみたいなことやったやつに向かって来るか、普通？さっきの出血が原因か？まあ、手袋の実験体が多いのはいいげどな。

一匹に右の掌を向け、魔力を手袋に流し込む。すると、模様がぼんやりと光り始め 何も起こらない。

……終わり？流すだけじゃ駄目なのか？いや、あの傭兵の時はある覚えだが、もっと光ったような………属性か？使い方なのか？そう思った瞬間、掌から何か見えない、恐らくは不可視の魔力が風の魔法だろとは思うが、それが発射され、狼は悲痛な鳴き声を発して吹き飛び……何もなかったかのように、体勢を立て直した。狼の足と、俺が止まる。

「……………なんだ、このがっかり感」

やはり、道具は使い込まないと本来の効果を發揮しないんだろうか。狼の視線が、人が同情する時のそれに見えて仕方がない。

溜める魔力の量を上げたらどうだろう？

そう思った俺は、全身に掛けていた肉体強化を腕と目だけにし、余った魔力を手袋に回す。すると、模様の光が一段と強くなり、あの傭兵と同じぐらいになった。「いける」そう思った俺は、手袋に溜まった魔力をゆっくりと放出する。すると、黒い魔力ではなく、不可視の魔力が、空気に指向性を持たせるために掌から吐き出された。魔力は周りの空気を巻き込みながら槍のように狼へと迫り、その身体を一直線に貫いて絶命させた。

「ヴォウ！」

それに驚いたのか、残っていた狼が一気に襲いかかって来た。迎撃のため、手袋に魔力を溜めようとしたが、通すだけだとうなるかが気になったので魔具を意識し、放出ではなく、ろ過をするイメージで魔力を出す。すると、先程の貫通力は無く、貫くと言うよりは叩き潰すための空気の塊が狼に叩き込まれた。

「キャンッ!?」

悲痛な声と共に大きく吹き飛ばされ、地面に何回かバウンドする。肉体強化を耳にしてないので聞こえないが、身体中の骨が折れたのだろう、ピクリともしない。

この魔具はかなり強い。けど……燃費が悪すぎる。一度撃つのに威力相応の魔力を使う上に、貫通させるには溜めがいる。そして、潰すのにも自分の魔力を放つ範囲より少し狭くなるから、より魔力を使う。やっぱり零距离かな?

そう思いつつ、リリアナのいる方向を見ると、すでに片付き、サーベルを持ったままこちらを見ていた。声を掛けようとすると、

「終わったのか」

先にリリアナから声を掛けられた。

「見ての通りだ」

「そうか……まさか助けられるとはな。一個人として礼を言う」

リリアナが急に謙虚になった。

礼を言われるようなことしたか、俺?

「あのままでは、喉に食らいつかれていただろう」

一気に放出した時の余波か? まあ、いいか。

「なんで炎使わなかったんだ、燃やせるだろ?」

間接的に助けることになったが、自力で狼くらいどうにでも出来るはずだ。

「……………少し取り乱したんだ」

狼ごときで? あり得ないだろ、特にこいつは。詳しく聞いてみよう、弱点でもあるのか?

「ホントか?」

「なぜそこまで聞く?」

俺の問いかけに、リリアナは少し声を冷たくして答えた。

弱点探すためとか言えないからな……………

「体調でも悪かったら大変だ。移動距離を縮めないといけないが、風邪にでもなられたらもつと厄介だからな。

あと、少し心

「配なただけだ」

なるべく、気に掛けてないように言う。

どうだ、これなら納得するか？

「な！？いや、よく考えろ……だが………」

そう言つと、レイアたちが行った方向に、何かを呟きながら歩き出した。話し相手が行ってしまうので俺もリリアナに続いた。

第31話（前書き）

これまた微妙な所で終わった気が……
描写不足などをお知らせいただけると助かります。

第31話

しばらく歩くと、狼の死骸が散らばる道の中心に腰を下ろしているレイアたちが見えた。こちらに気づいていたようで、しっかりとこちらを見ている。そのまま歩くとレイアが話しかけてきた。

「よう、そっちはどうだった？」

「見ての通りだ」

狼に食いつかれ、服が血まみれだ。これは洗ったら落ちるのか？
きつと、シミになるだろうな……

「そうか、首を……………魔具はどうだった？」

「ぼちぼちだ。殺傷力は申し分無いが、貫通させるには溜めがいる。まあ、ゴブリンや人間相手なら問題無さそうだ」

他にも攻撃が透明だから気づかれにくい。とかはあるが、言わなくていいだろう。それにしても

「この狼、どうやって殺したんだ？この風穴は一体？」

レイアたちが倒した狼の死骸に、この手袋での傷とよく似た風穴がある。更に、それぞれの位置はバラバラだが急所を貫いている。

「ああ、これか。これはセレナがやった。 セレナ、説明頼む」

「え！？」

いきなり話を振られたセレナは驚いている。

レイアは説明が面倒なのか、どうやったか分かってないのか……

……

「えっと、刻んだ文字を隠してはいますが、この弓は風の矢を作れる魔具なんです」

セレナは、一度で覚ええるような短さで言った。

分かっているなら言ってもよかった短さだよな、これ。それだけなら面倒じゃないだろう……

「付け加えるなら、この弓は同時に複数の矢を発射、連射もできま

す」

セレナに会って間もないが、この性格だところやって付け加えるのは珍しいと思う。

自分の戦い方を教えるってことは、警戒はされてないのか？

「え？そうだったのか？」

レイアが驚いたように言った。

……………お前は知ってないと駄目だろ、一応この一行の頭なんだから。

「へー。毎分何発ぐらいだ？」

恐らく一撃で狼の頭蓋に風穴を空ける。連射の度合いによつては、肉体強化でも危ないかもしれん。

「えっと、ちよつと待ってください……………9600発ぐらいですね。私の魔力と体力が尽きなければですが」

セレナが照れくさそうに言った。俺は固まった。

9600を60で割って……………えーと……………学が無いのはきついな……………160か？一秒に160！？死ぬ、確実に死ぬ。引き撃ちされたら終わりだ……………

「あ、威力は多少落ちますよ。あくまで支援なので、実際には多対一か多対一、その上破壊してもいい場所じゃないとそんなに撃てません」

少し残念そうにセレナは言った。

「それでも充分強い」

多対一、この一行を抜けるときになりそうな状況だな。その時には、誰かを盾にするか。

「もういいか？」

いつのまにか立ち上がっていたセレナが、埃を叩き落としながら言った。

「急いでるのか？」

歩くだけなんだから、ゆっくりでもいい筈だ。

「ああ、大陸に渡るって言ったよな？それには船で行くから、天気

が変わらない内にな」

レイアが計画的なことを言った。これは大嵐だな。

「分かった。じゃあ行こう」

今の考えは心の中に閉まっておこう。船が沈んだら大変だ。

「魔具はどうでしたか？」

黙々と歩いていると、アークが話しかけてきた。

「レイアに言った通りだ」

これが無難だろ。ほとんど事実だしな。

「そうですね。しかし、あなたの戦い方には合わないのでは？」

その通りだ。あれは近接じゃなくて中距離、遠距離の武器だ。一気に距離を詰めて戦うための武器じゃない。「あの手の魔具は使えば使うほど、持ち主に合います。中には成長する魔具もあるそうなので、使い続ければ自然と馴染むようです」アークは解説するように……解説か、これは。

「これからは主にそれを使うのですから、それに馴れないと怪しまれますよ。本当に長い間、魔具を使っているのか？」と

アークは真剣に言った。

よく分からないが、これは分かる。少しでも怪しまれ、属性がバレたら絶対に面倒になる。

「それは不味いな」

「でしょう？ セレナさんほど使い込まなければ、ドラゴン相手には苦勞すると思いますよ」

それっきり、アークは何も言わなかった。

ドラゴンが見たことないな。確か、ドラゴンの鱗を使った装飾品を、やけに厳重に保管してた貴族がいたな……魔具の扱い、考えてみるか。

そんなことをふと、思った矢先。

「寄り道をして、明後日には港に着く予定だから」　そう言うレイアは干し肉をかじっていた。

「分かったよ。それ、つくれるか？」　人が食べているのを見ると、自分も食べたいくなるのはなぜだろう。

「ああ、いいぞ」

そう言うのと、ポーチに手をつ込み、

「　あ、無い。補充しなかったからな」　とんでもないことを言いやがった。

「無いって……さっきの街で買っただろ？」

王都を移す計画が囁かれるほど王都から港に近い国とはいえ、補充をしてないのはおかしい。

「いやさ、誰かさんが金を持っていったおかげで、船代しか無いんだよ」

レイアとセレナはジト目で、リリアナは刺すような目付きで、アークは諦めたような目で見られた。

俺が持っていた金か。……自業自得になるのかこれは。

「まあ、多少は返ってきたんだが、お前の服や、紛失した武器を買ったしな」

止めを刺すようにレイアが言った。

「　と、言うわけで。さっきの街で依頼を受けたんだ。依頼はさっきの街と、港の間に出没する山賊の討伐。あの傭兵の例もあるから魔具には気を付けろよ。ゴブリンにも持っているやつがいるらしい」

「なあ、魔具って魔物からしか手に入らないんじゃないのか？　ゴブリンはモンスターだろ？」

疑問に思ったので聞くと、レイアは何か間違えてしまったように話し始めた。

「あー、最近のモンスターと魔物の区別が曖昧なんだ。まあ、どちらも同じように使われるな」

「なんだそれ……」

これには呆れてしまった。今までは、魔族に使役されている物が魔物。自然界に存在しているのがモンスター。その分け方が一般的で、それによってギルドでの依頼の難度も決まっていた。

「仕方ないさ。最近人間以外は獣っていう輩も増えてきたからなエルフやドワーフのような奴等もいるのに……きつと魔族が、違う種類が怖いんだろう……後々まで続きそうな問題だ………」

レイアは心底まいった様子で俯いた。

これからの種族関係を左右できるかもしれない、勇者という役は相当重く、この事を深刻に思っているようだ。まあ、俺には関係ないが。

「まあ、何とかなるだろ。それより、山賊探した」

そう言つと、レイアは呆れたようにため息をついた。

「ああ……そうするか。けど、こっちは待つだけだ。探しても無駄だ、特に昼間はな」

探しても無駄、昼間は特に。ということとは、

「夜襲待ちか？」

「言わなくても分かるだろ」

いや、違つたらどうするんだよ。

「詳しく言つなら、夜にはわざと見張り無し、その上寝た振りだ。

………朝になったら一人だけ死体だった、とかはやめろよ」

嫌味か、それは。

「じゃあ、進めるだけ進むぞ」

そう言い、俺の肩を叩くと歩くペースを上げた。

第32話（前書き）

どうしても遅くなる……

第32話

陽が傾き影の成長期が起こり、成長しきると夜の闇に溶ける。一行は、影が成長しきる少し前に歩みを止めた。

「今日は此処等で休むか。セレナ、ランサムと食料取ってきてくれ。できれば肉な、肉！」

レイアは歩き疲れた様子もなく、肉のある夕食をお望みのようだ。どんな体力をしているのかが疑問になったが、あの防具のおかげと思えば納得した。

「ああ、分かったよ。太らんように気を付けろよ」

「黙れ」

そう言つと、俺の拳ほどの石を投げてきたので、強化した右手で受け止め、それを弄びながら近くの川へ歩き出す。

「セレナ、狩り方教えてくれるか、魚は分かん」

「ええ、いいですよ」 セレナは快く応じてくれた。これがレイアなら面倒とか言うだろうな。

渡し船も橋もない広い川が、道沿いの野営地点から少し逸れた位置に流れていた。その河原で俺はセレナの説明を聞いていた。

「いいですか？この方法は魚を追い込まない限り、運試しのようなものです。しかし、釣りや罟よりは手軽にできます。同時に、大きな音がするので周囲への警戒は怠らないでください」 そう言つとセレナは足元にあつた石を両手で抱え、少し下流に行くと水面から半身を出している大きな石に叩きつけた。鈍い音と共に、石の下から魚は飛び出すが、何匹かは浮いてきた。

「だいたいはこんな感じです。力が弱いと逃げるだけです」
セレナはそう言いながら、浮いた魚を草の籠に入れていた。

案外簡単そうに思えたので、自分の太ももから膝あたりの大きな石を抱え、

「よつと」

「え!？」

さらに大きい石に力強く叩きつける。

弱いとダメらしいからな。砕くつもりでいいだろ。

すると、鈍い音と共に、両方の石が周囲に破片を撒き散らしながら砕けた。すると、それらの残骸の隙間に、魚の尻尾や頭などが見えただけで引つ張り出す。

頭が潰れてるものや、鱗が肉に食い込んだ魚が六匹ほど取れた。

「これでいいのか？」

「……………だ、だいたいそんな感じです」

いかにも美味しそうな魚をすでに捕まえていたセレナは、俺の持った魚から苦笑いしながら目を背けた。同じ方法の筈なのに、なぜだ？

「コツはあるのか？」

「もう少し優しくした方が……………いえ、もう少し優しくしてください」わざとに思われたのか、多少言い方に刺がある。真面目にしたいんだけどな……………

「へー、ランサムにも捕れたのか」

野営地点に戻るなり、レイアが俺の魚を見に来た。

「ボロボロだな。セレナのにしたほうがいい。鱗を食べることにするぞ」

まったく、見たらどちらを食べるべきか分かるだろ。わざわざ食べにくい方を……………あれ？何でレイアを気にかけてるんだ、俺？魚を捕れたから機嫌がいいのか？

「……………いい、お前の食うから」

俺が自分の思考に首を捻っていると、ボソリと呟くようにレイアは言った。

「は？まさか 鱗食べたいのか！？」

「違う！さっさと寄越せ、焼いてやる！」

怒鳴るように言つと、呆けている俺から魚をひつたくり、調理を始めた。

一体何なんだ？呪いでもかけられたのか。飛びきり協力なのを。

「なあ、リリアナ。魚を捕りに行つてゐる間に何かあったのか？」

アークは見張りをしているのでリリアナに聞くと。

「さあ？勿体無いのかもしれない」

よく分からない返答が返ってきた。

理解不能な返答をしたリリアナは、セレナの魚の調理を手伝い始めた。

まったく、どうなつてんだ。まさか、俺に思いやり？……………ア

ホか俺は。死刑を免れてこの一行に入ったんだ、牢での一件もあるからにはあり得ないな。と、いうことは毒入りの飯？いや、あいつはそんなことするくらいなら、真っ正面から斬りかかって来るに決まつてゐる。……………分からん。気まぐれか、セレナの魚だけじゃ足りないと考えよう。

「おい、手伝えよ！」

レイアが大きな声で呼んだので、仕方なくそちらに向かった。

「獲つてきたんだから調理ぐらいしてくれよ」

「馬鹿言つな。夫婦でも無いのに」

「だよな。お前が妻とか、夫に同情す」

「死ね！！」

調理のため、外していた籠手で叩かれた。鼻が痛い…………

逃れようとしたが、やはり無理だった。いい加減、武器の点検とかけたんだけどな。

「で、何をすればいい？」

「虫と細かい所はセレナが処理してくれたから焼くだけだな」

「おい。俺が手伝う必要があるのか？」

なぜ呼んだ。別に焼くだけなら俺はいらんだろ。

その言葉を聞いたレイアの雰囲気は鬼気迫ったもの変わった。

「いいか、リリアナは気が利く。そして、セレナと俺が一人で調理している。恐らく手伝おうとするだろう。けど、セレナは料理上手だから手伝いは殆んど要らない。すると、俺の所に来る。そして、魚を焼く。そうすると……どうなるか分かるな？」

飯抜きか拷問か、救いが無いな。

「ああ、手伝わさせてくれ。あれはもう食いたくない」「まあ、そこに居てくれるだけでいい。怪しまれるからよそ見はしないようにな」

そう言うのと、レイアは鼻歌まじりに、串で貫いた魚をたき火の周りに刺した。

待つだけだと暇になるから、少し手伝うか。自分の好きな焼き加減もあるしな。金網があると良かったんだけど……

「いや、手伝う。暇だしな」

「じゃあ、時々火に当たる面を替えてくれ」

レイアはそう言うのと、ポーチの中を整理し始めた。

もう少しで焼ける頃合いに、おずおずとレイアが話しかけてきた。

「なあ、答えたくないかもしれないが、聞いていいか？」

「何を？」

余程のことじゃない限り、答えたくないことなんて思い付かないな。暇だったし、丁度いいか。

「旅が終わったら何をしたい？」

はい、答えたくありません。なぜこうも一発で……予定としては今まで通りの生活。けど、大陸を観て回りたいのもあるから無難に一人旅でいいか。

「一人旅をする。大陸を観て回りたいしな」

「王国に戻る気は無いのか？」

「戻っても良いことが無い。生きてると知れたら即刻処刑だ。なら大陸にいた方がましだ」

書類上でジョン・スミスは死んだかもしれないが、名前以外が同じのランサム・リザルトはまだ生きているんだ。バレルに決まってる。聞かれたからには聞いた奴の也想きたいな。

「お前は何をしたいんだ？」

「……………俺か？」

レイアの表情が歪んだ。

まあ、理由に想像はつくが。

「王国に戻るしかない。一度、魔王討伐の報告に戻ったらそのまま良くて軟禁。政治の道具になるのを拒めば魔法か魔具での洗脳もあるだろうな。最悪、兵器扱い……………いや、すでにその可能性もある」
思ったよりも深刻らしい。戦力的にも、風評的にも、魔王を従えたのと同じになるからな。さすがに、これは同情する。保身的で欲深な、ろくな政治をしない奴等だ、大陸に侵攻でもする気だろう。その時の相手が人間な分、魔王より質が悪い。レイアは無意味に人を傷つけるのが嫌そうだからな。

「で？」

「でって……………だからな、王国に」

「しないといけない事じゃなくて、したい事を聞いたんだ。先に聞いたのはお前だろ？」

せめて終わるまでは明るいこと考えてろ。飯がまずく……………あれ？俺って最後まで行く予定だったか？

「したい事か……………平穩に暮らしたいな。剣を捨てて、普通の仕事に就いて、結婚して、家庭を作って、子どもより早く死ぬ。それができたら幸せだ」

そう言うレイアの顔は悲しみが浮かんでいた。

現状じゃ、不可能に近いからな。それよりも、剣を捨てるってのには驚いた。平穩が今まで無かったのか？

そこから深い推測を立てようとした時、

「そうだ おい、火、見てるか？」

ああ、そういえば魚焼いてたな……………あれ？串に黒い塊し

か付いてないぞ、魚はどこだ？

第33話（前書き）

こんなに短いのに、クリスマスイブより前に書き出した、なぜ大晦日まで……

第33話

「腹減った……」

「いいだろ。お前は干し肉食ってたんだから」

「あれは別腹だ」

「それ、別腹って言うのか？」

レイアと俺は結果的に飯抜きになった。リリアナ達が分けてくれそうだったが、レイアが頑なに拒否したので夕食は抜きになった。まあ、自己責任だから受け取る気分にならなかったのだろう

俺は普通に受け取るうとしたが、睨まれた。

「腹減ったから寝る。アークにも休めって言うてやってくれ。次はランサムな」

そう言つと、レイアはたき火の近くにポーチを置くと、それを枕にして横になった。

ああ、なるほどな。少し自然にか。

「じゃあ、アークに言うてくる。リリアナとセレナも休んでくれ」

「分かった。サボるなよ」

「じゃあ、お願いしますね」

返事を聞くとアークの所に向かった。

「おい、交代だ」

「おや、そうですか。このまま力カシになってしまふのかと思いましたが」

「挽き肉になってしまえ」

アークが皮肉を言ったので皮肉を返そうとするが思い付かず、捻りもない事を言う。

学が無いのは良いことなしたな。

「それではお言葉に甘えて、休ませていただきます。くれぐれも、いつものように熟睡しないでくださいね」

「お前もか……」

「常日頃の行いですよ。寝てる間に襲われないようにしてください。近頃物騒ですから」

アークはそう言うと言った。

近頃物騒ってことは、もう近くに盗賊がいるのか。アークはまだしも、レイアはなぜ気づいたんだ？勇者だから？それとも光の魔法か……よく分からん。知っても大して意味もないだろ。

ため息を吐きながら、近くの石に腰を降ろした。開けてるんだ、そうそう見逃さないだろ。

それよりも、大陸に渡ってから何を考えるか。問題は通貨だ。通貨はこの国と制度が違うだろう。盗んでも、使い方を知らなければ意味がない。そもそも、俺は島国や魔具を知らなかったんだ、貧民街の外には生き延びる以外の知識も必要はずだ………あ、金目の物だけじゃなく、本も盗めばよかった。字は小さい頃に教わったが、書ける自信がない。それに、金目の物にも、もつと種類があるのだろう。やるが増えた。レイアに……いや、からかわれそうだからセレナに教わろう。

音が聞こえる。正面の左寄りにある草むらからジャラジャラと金属音、右側の丘から矢筒の中が揺れる音、左側は河の音だけ、後方にはレイアがいるが、何も聞こえない。

今、俺は灯りを付けている、確実に狙われるために。そして、惹き付け、一気に倒すために。相手は盗賊だ、金属板の鎧は着ない。さっきの金属音はチェーンメールだろう、布で挟んでないな、恐らくは黒塗りもしていか。陽動の可能性もあるが、チェーンメールは打撃と刺突に弱い。ナイフと拳で何とかなるだろ。暗闇だ、先に弓から始末するか。正面からはレイアたちに任せよう。

距離はある。しかし、矢を矢筒から抜く音が、左から聞こえた。肉体強化に使う魔力を、ほとんど再生に回す。

同業に近いからこそ分かる、危険が迫れば即逃亡、物より命が優先。だからこそ、正面から来るやつらが俺を通り過ぎるのを待て。

正面からの足音が、一気に走る物に変わった。

さあ、痛みに堪えろよ、俺。

そして、空気を貫きながら矢が飛来し、俺の右の二の腕に刺さり、筋肉をその位置に縫い止めた。

「ぐっ!？」

立ち上がると、更に矢が飛来し、右腕の隙間を縫いながら脇腹に突き刺さり、内蔵に風穴を空けた。

「お……………」

そしてよろよろと河に向かって歩き、全身の力を抜いて河原に倒れこむ。

すると、正面からの足音は傍目から見れば死体の俺を素通りし、レイアたちの所へ向かった。

やばい、死ぬ……。

二の腕の血は止まったが、思ったよりも内蔵の損傷は激しく、魔力を湯水のように使って治癒をしている。

足音が少し離れるのを確認すると、起き上がり、二の腕の矢を引き抜く。返しが肉を挟ったが、構いやしない。脇腹の矢は……………やりたくないが、ナイフを刺さった根本に突き刺し、すぐに抜くと隙間ができる。そして、矢をそちらに引き、一気に引き抜く。

意識が飛びそうになるが何とか堪え、再生する。

すると、十数秒で動けるぐらいになったので、忌まわしき弓へ黒いもやを出しながら接近する。

男なら接近戦だろうが、卑怯な弓なんて使ってんじゃねえ!

不意打ち、騙し討ちはありだけどな。

第34話（前書き）

この時期は暇になるだろう。と思ったらそんなことは無かった。眠い。

第34話

黒いもやを全身から湯水のように噴出させ、体に纏う。まだ、完全な夜でないため、触れている部分は動く殻と言ふよりはローブのようになっている………中途半端感が否めない、これは密度が少ないからちらほら俺の姿が見えるだろう。まだ肉体強化による再生で魔力が溜まり、操作も下手なので散りきっていない右腕と脇腹からまるで太い血管を切ったように………さっき確実に破れたな、うん。とにかく、すごい勢いで噴き出してる。昔話に出てくる魔族みたいで嫌だな、これ。

チラリと横目で野营地を見ると、謎の水の壁が野营地囲み、その内側で火と光とその光を受けて時折見える不可視の塊が飛び交い、その根元目掛けて矢が飛んでいくという、戦争でもしてるような光景が広がっていた。本当に人間かあいつら………

その光景と想いを胸の奥に押し込み、走る速度を上げた。

真後ろから回り込み、ナイフと短刀を構え、そして延髄に突き立てようと構えると、

「くそっ！なんだあいつら！？」

「いいから射て！頭を援護しろ！さっきのやつは射ったら死んだんだ、あいつらも死ぬんだ！」

恐怖に飲まれ、焦った声でこんな会話を始めた。

狙ったようなタイミングで言う、などと思いながら刃を突き立てた。すると、何も言わずに膝から崩れ落ちた。

殺すのはそんなに好きじゃない。けど、殺すことはああいう連中への対処に一番だと思う。襲われたなら確実に殺す。以前、殺さずに無力化で済ませたことがあったが、後々に害があった。それから
の教訓。

さて、援護に行くか、見に行くか。まあ、見に行ったら気づかれて援護しろって言われるだろうな。逃げても大陸のことが分からない上に、船代がな……それに、大陸のことを聞くにはレイアたちが一番早いだろう。

野営地を見ると、未だに戦っているようだ。ここまで長引くのも変なので目を凝らすと……………トカゲのような頭。耳まで裂けた大きな口、それにびっしりと並ぶ牙。小さいが、存在感が漂う後頭部から後ろに向かって生えた、ランスのような二本の角。黄色を混ぜた赤い鱗で全身を覆われ、背と胸には鱗の発達だろうか、トゲの生えた甲冑のようになっていて。前足の無い、コウモリの腕と同じように翼が生えて前足の無い、ドラゴンと言うよりは爬虫類の王である。まだ子どもだろうか、五メートルほどの大きさのワイバーンだった。

見間違いだと思いたい。生態系の頂点に位置するような生き物の親戚が、こんな場所にいるなんて。子どものワイバーンといえど、並の冒険家では太刀打ちできない。

しかし、そのワイバーンは地上に降りて戦っていた。猛毒を持つという尻尾を振るえば前衛のレイアとリリアナは避け、その隙に一撃を加える。しかし、刀剣の類いは鱗には強いようで、火花が散るだけで刃は通らない。セレナが風の矢を射つが、魔力の矢のため、ワイバーン自身の膨大な魔力に負けて鱗を傷付けるだけで破れない。それはアークも同じようだ。水の塊や、氷柱のような物を放つが、決定打にはならない。昼間ならレイアが使えるであろう光の魔法でなんとかするが、肉体強化でもない限り、効果は激減する。人ぐらいは楽に倒せるだろうが、ワイバーンはそうはいかない。なぜ言い切れるかというと、闇の属性である俺の魔力は太陽の下となると、ただでさえ操作ができない魔力の密度はより操作ができなくなる。ここで気をつけてほしいのは『した』魔力が拡散ではなく、魔力の操作が『できない』から拡散する。つまり、対外に放出する時の操作が限られる。レイアは近距離戦をするが、武器がロングソードと

いうこともあり、あまりにも近距離には馴れていなさそう。最低でも触れないと、鱗は破れない。

そう思った俺は、盗賊の死体から弓と矢を奪い、野営地に走り出した。

その間にもワイバーンは炎を吐き、目を狙われるのを避けようとする。距離を取らせると尾を振り回し、レイアたちを追い詰める。

レイアはたちは苦虫を噛み潰したような表情をしながら、しきりに空を気にしている。恐らく、他のワイバーンがこの個体を助けに来ないか心配なのだろう。ワイバーンは普段は単独行動を取る割には戦闘になると集まってくる。

これは個人的な考えだが、実際は群れで行動していると思う。個々の間隔が広く、それを補う連絡手段があるのだろう。

肉体強化で走った俺は、さほど時間もかからずに野営地にたどり着いた。ワイバーンもレイアたちも自分たちの戦闘に夢中で、気配を絞め殺そうとしてる俺には気付いていないようだ。ここに来る少しの間にも状況は悪くなっていた。不規則な尻尾の動きからか、その一撃をリリアナが受けたのだ。

リリアナは尾を避けると懐に入り、喉を刺そうとした。しかし、ワイバーンは振った尾をサソリのように曲げ、自分の懐に叩きつけた。リリアナはそれをサーベルで防いだ。だが尾はしなり、尾の先端付近に付いているトゲが左肩に突き刺さった。その瞬間、セレナがワイバーンの鼻先めがけて矢を放ち、それは鼻先で炸裂した。それに怯んだワイバーンからリリアナが離脱した。生で見たことはなかった、ワイバーンの毒は肉体を焦がすようで、手当てに駆け寄ったアークはリリアナの左肩に向けて切羽詰まった顔で詠唱し、爛れた傷口を中心に水の玉を作るとそこに緑の液体が皮膚からじわじわと滲み出てきた。リリアナは苦悶の表情を浮かべてはいたが、呻き声は発しなかった。しかし、ワイバーンは治療を待つわけがない。ワイバーンは後ろ足で立ち、翼を羽ばたかせて飛び上がる。とする。

そのまま炎でも吐く気だろう。しかし、セレナ自慢の高速連射により翼に強い衝撃を受け続け、それを断念。そこへレイアが飛びかかり、翼膜をロングソードで引き裂いた。翼膜にも痛覚はあるようで耳を覆いたくなるような叫び声をワイバーンは上げた。

その間に俺は邪魔な弓矢を足元に落とし、ワイバーンの腹にに強化した拳を叩き込もうと一気に速度を上げた。ワイバーンの殴ったら痛そうな鱗と鎧から思わず雄叫びを上げたくなったが、せっかくの不意打ちなので無言で迫る。そして走る勢いのまま、怒り狂ったワイバーンの腹めがけて右側から突っ込んだ。

右手に走る勢いを乗せ、体重を乗せ、腰を捻る勢いを乗せ、燃費を考えない肉体強化を全身にかけ、ワイバーンの胴を殴り付ける。

「ぐっ!?!」

肉体強化で堅くしても、指はクルミで割るような音をたてながら骨が皮膚を突き破り、血が吹き出す。しかし、ワイバーンにも効果があったようで鱗がミシミシと割れる音と、痛みに支配された指に手袋ごしだが、柔らかい肉の感触がした。鱗を破った。もう一撃で仕止められる。手袋に魔力を籠め、肉に穴を空けようとした瞬間、

「グアオオオオオオ!」

ワイバーンの悲鳴にも聞こえる咆哮が聞こえ、

「ランサム!」

レイアの叫び声が聞こえた。視界が一瞬揺れた。そして俺の右目にはワイバーンの大きく裂けた口が、ナイフのような牙が俺の二の腕を挟んでいるのをしつかりと捉えた。その牙の隙間は急激に紅くなり、炎を吐いた。

「がっ……ああああああ!」

炎に焼かれ思わず悲鳴を上げた。炎が胴に移る前に、左の手刀で右腕を根元から切り落とし、後ろに転がるように飛び退　　転がった。

肉体強化が痛みで切れたのが幸いしたのだろう。脇腹と肩、左手にも少し火傷をしたが命に別状は無い。痛みで少しは怯んだと思う

た、しかし、痛覚は鈍いようだ。悲鳴が少し遅かった。噛まれて切
って焼かれるのは生まれて初めてだ。ショック死するかと思った……
……まあ、なんとか堪えたようだ。最も、今は失血死しそうだな。……
……腕、どうしよう。

目の前には、ほとんど炭化した腕を噛み砕いているワイバーンが
いる。腕の切断した傷は肉体強化で治してはいるが、表面の火傷が
なかなか治らない。ワイバーンの炎は特殊なのか？尻尾の毒は気化
して炎にも入っていたりして……そう考えると目の前が暗くな
ってきた。音が異様に遠い。なんだこれ、前にもこんなことがあっ
たような無かったような。人間相手にしか戦ったこと無かったから
な……知識だけじゃ無理か。

あ、倒れる。

足に力が入らなくなり、仰向けに倒れた。草が傷口に当たって痛
いが、なぜか気にならない。

霞んだ視界には、ワイバーンが腹から血を流し、作った水溜まり
を踏み、俺を勢いよく飛び越えたのが見えた。レイアにでも飛びか
かるのだろうな。あ、そういえば弓矢どうしたんだっけ。セレナは
見つけてくれるか？運任せだな。

頭上からは剣と鱗のぶつかる音や、地面に重いものを叩きつけた
音が不規則に聞こえる。意識は飛ばないが、周りで戦われるのは気
が参る……流れ矢で死にそうだ。鱗を剥いだんだからそこを狙って
くれ、頼むから。そうだ、腕を生やそう。物は試した、目ができた
なら腕もできるだろ。

肉体強化をひとまず止め、使っていた魔力を治癒だけに回す。傷
口は熱を持ち、痛みは少しずつ消えるが、やはり火傷が邪魔であま
り変わらない。

そうだ、火傷を抉ればその下は切り傷だよな？……いや待て、

火傷じゃなく、炎に混じった毒が原因なら悪化するだけだ。後でアークに診断してもらおう。リリアナのサーベルの音も聞こえるし、毒は大丈夫そうだ。あと少し待てばいいだろう。心配なのは、ワイバーンの仲間だな。集団で教われたら確実に死ぬる。こんなので魔王を倒せるのか。　　まただ、洗脳された覚えは無いぞ、感化されたか？大陸に行ったら逃げて、いい街を見つけて稼業の再開。それでこそ我が人生、だな。まあ、ここで死んだら元も子もないが。

教会に行けばパンが貰えるが、大陸でもそれはあるかどうかについて考えていると、

「！！」

人のモノではない、背筋が冷たくなるような断末魔が聞こえた。

どうやら終わったようだ。止血も済んでやる事が無いので適当な事を考えてはいたが、意外にも早く済んだようだ。

ガサガサと音を発てながら何人か近寄ってきた。

「おい！アーク、急げ！」

傭兵の時といい

「生きてるか！？」

またこれか。

今までに感じたことのない達成感に戸惑いながらも、心の中でニヤリと笑った。

第35話（前書き）

大変遅れました

第35話

「あー、痛い」

「無茶するからだ！この、バカ野郎！！」

深夜と言える時間、焚き火にあたりながら、アークに火傷の治療をしてもらっていた。そして、ふと思い付いてポツリと呟いた独り言に、不機嫌なレイアが油を火にぶちまけたような勢いで反応した。例えじゃなくて耳が痛い。人の真横で大声を……真横だけじゃなく、全方向を囲まれてるのはなぜ？

「いいだろ、勝ったんだからよ」

「良くない！傭兵の時といい、単独行動しやがって」

「いや、今回は仕方ないだろ、奇襲ができるタイミングだったんだから。合流したら奇襲ができない」

「その奇襲で返り討ちに遭ってどうするんだよ」 レイアが一転して冷たい視線を向けてきた。

今はレイアの独壇場だな。リリアナたちも何か言いたそうだが、言うタイミングが無さそうだ。しかし……これについては返す言葉がない。返り討ちになっても鱗は砕いたよな？

「鱗砕いたからいいだろ？」

「いいわけあるか……腕、どうするんだよ？」

レイアはそう言いながら、水球に包まれた俺の右肩を見た。

「アーク、ランサムの腕は治せるか？」

今度はアークに視線を移し、不安そうに聞いた。

「無理です。治療には自信がありますが、無いものは治せません。ワイバーンの毒を抜くくらいしか……」

話を振られたアークは、苦虫を噛み潰したような顔をした。恐らく、治療を使える者の責任感だろう。まあ、過剰な責任感だが。仲間が死んだら、どうなるのだろうか？

「で、毒は抜けたんだな？」

気になるのはそれだ。「遅効性で、昼寝したら永眠になりましたー」なんてことになったら死んでも死にきれない。

「はい、済みました。どうやらワイバーンは複数の毒を持つようで、リリアナさんよりは軽い毒でした」

「リリアナは？」

「酸のような毒でしたので肉が焼け、しばらくは動かせないでしょう。定期的に治療をしないと……」

ぐったりした様子でアークは言った。大怪我の治療ばかりで疲れているのだろう。治療は大怪我を治せるかどうか怪しいのが、一般的な治療の効果だ。二度も三度も治す、アークはかなり凄いのだろう。

個人的な評価をしていると、

「ランサム……………お前、ここで降りろ」

「誰が降りるか」

レイアが人の予定を壊すようなことを言ったので、即答しておい

た。

「片腕だけじゃ無理だ。頼むから降りてくれ」

「嫌だ」

レイアが淡々と、しかし感情を押し殺したように言う。

降りたら俺は捕まって殺される。レイアは俺が無罪放免の代わりに、これに参加したことを忘れてるのか？代えたと言っても名前だけで、衛兵のやつらには、名前は知られて無いんだぞ……………レイアが報告したかもしれんが。

「死ぬかも知れないんだぞ！」

今度は怒鳴るように言ってきた。必死すぎだろ。

それに、途中抜けするんだから、降りない方が死にくい。死にやすい方に誰が行くか。

「ここで降りても無罪放免分働いたとは言えない。それに、散々引っ掻き回された連中が引っ掻き回した俺を、本当に無罪放免にするか、怪しい。このまま戦う方が死にくいんだよ」

そう言つと、レイアはひどく悲しそうな顔をした。そして、二呼吸ほしてからこう言つた。

「……来るんだな？」

「それ以外にない」

そう言つと、レイアはスツと息を吸つて、

「じゃあ死ぬなよ！いいか、腕も生やして強くもなつて、とにかく死ぬな！俺の許可のみで死ぬ、いいな！」

なんとも我が儘な、滅茶苦茶なことを大声で言つた。恥ずかしくないのか、こいつ。

普通なら嫌気が刺すのだが、逆にこの我が儘が好ましかった。

「ああ、分かつたよ………なあ！聞いてくれ！」

そつだ、これを言わないと、一生後悔する。言おう。

「な、なんだよ」

俺の熱意を感じたのか、少しレイアがたじろいだ。アークたちは固まっている。

「ワイバーンっていくらで売れる？できれば、なぜ成体が来なかったかも教えてくれ！」

あばら骨の末端を無言で殴られた。嫌な音が聞こえたのは、気のせいじゃないだろう。

「何しやがる！？」

「真面目な話しかと思つたじゃねえか！」

「俺は真面目だ！」

レイアがかなり苛立ってる。俺、変なこと言ったか？

「金銭面がかなりまずいって言ってただろ！」

「確かに言ったが、話の流れが……」

レイアは戸惑いぎみに言った。

「そうか？」

「……………もういい」

それでも押すと、レイアは折れた。意外に口は弱いんだな。

「で、いくらで売れる？」

「時価だ。それに売らん」

レイアはそう言つと、潮の匂いのする方向へ歩き始めた。まだ治

療中なんだが……………

「さて、行きましようか」

「行くぞ」

「行きましよう」

そう言いながら、アークたちも歩き出した。

「治療は？」

「とつくに終わりました」　一瞬止まっただけで、黙々と歩き出し

た。これは船の中で寝れそうにない。

第36話（前書き）

毎日ちまちま書くのに一週間かかる不思議。更新間隔を縮めなければ……

第36話

平野に出て、冷たい風が吹き抜ける深夜にも関わらず、あのまま歩き続けているが先頭を歩くレイアが一言も喋らない……霧囲気が悪いにもほどがある。ワイバーンの群れが来なかったことは勿論、弓兵がなぜワイバーンに気づかなかったか誰に聞こう……

迷っていると、強化した聴力が波の音と人の声をかすかに捉えた。もう少しで着くようだ。船でもこの雰囲気なら圧迫感で死ねるな。マトモな話をするマトモな相手が殆どいなかったらな、こういうのには馴れん。マトモな話をしたのは盗品の転売屋くらいか……いや、マトモな相手じゃないか。

自分の交遊関係の無さに沈んでいると、リリアナがゆっくりと歩く速さを落とし、横に並ぶと、

「なあ、義手を付ける気はあるか？」

提案のような、確認のようなことを話し出した。

「ギシュ？」

聞いたことのない単語があったので聞いてみる。付けると言うからには、良いものだといいが。

「義の腕だ、魔力を通していれば動かせるぞ。いい物は感触を感じれる。温度は無理らしいがな。余談だが、製作者は名称を魔手にしようとしたが、イメージが悪いから無くなったらしい……まあ、どうでもいいか」

「動かすだけじゃなく、感触まで………」

「気にしない方がいい。便利に越したことはない」

義手……魔力で動かせる腕か、何か仕込めるか？隠密性と価格、複製のしやすさが気になるな。まあ、隠密性だけ聞いておくか

「なあ、それって目立つか？」

リリアナは少し悩み、こう言った。

「そうだな……義手と知られれば目立つが、そうでなければ手袋を

すれば殆ど分からない。本物の腕のような見た目の物もあれば、正面からの戦いのみを考えたタイプもあるからな」

世の中には色々な物があるな。もしかして、盗みってハイリスク・ローリターンか？いや、まさかな。

「それにしても、意外に知らないのだな。価値のあるものは調べ上げてあるのかと思ったのだから」

驚いたように言った。

「いや、盗むもの以外は調べない。面倒だからな」

「さらっと自分の無計画を言うな……………」

少し呆れたようだ。

しかし、義手の話がなぜ今、リリアナが言うんだ？レイアなら付けて戦えとか言いそうなんだが？

「そんな物があるなら、どうしてレイアは俺を降ろそうとしたんだ？それなら足が飛ぼうが、腕が飛ぼうが戦えるだろ？」　そう言う
と、リリアナは嫌そうな顔をして俺を見た。

「ついさっき目の前で腕を無くした相手に、腕を付けて戦えって言う。私としては、十分に外道の言うことに感じるがな。そう思わないか？」

「あー、嫌気が刺すな」

「そうだろう？あの人は負傷者を無理矢理戦わせない。普段はさがらせるんだ、本人の意思を問わずな。……………さっき参戦しようとしたら止められてな。勇者殿どころか、アークやセレナにも…………」

心底とは言わないが、不服そうにリリアナは言った。

さっきのワイバーンの時に参戦しようとしたのか？当たり前だ、あんな怪我で戦えるわけがない。戦えたとしても、戦力外だ。一応何回か戦ったんだ、死なれると寝覚めが悪い。欲で裏切るようなやつじゃなさそうだしな。

「当たり前だ、あの状態で戦おうとする方がどうかしてる。肩の肉が焼けたんだぞ？剣が振れなかったら戦いは無理だ」

うん。言うことははっきり言わないとな。言い回しを変えるよう

な、器用な真似は無理だし。

「そうか……当たり前のことか………だが、お前は腕を無くした。もし参戦していれば、違ったかもしれん」

「は？」

リリアナの雰囲気と顔つきが一気に悲しそうな物になった。

「そうだな。『違ったかもしれん』じゃなくて、『違った』な。ああ、あの時参戦していれば………」

戦いは無理と言ったのに………どうしてこの勇者一行には責任感が過剰なやつが多いんだ………もしかしたら、レイアとセレナもじゃないよな？リリアナは凜としてるから、責任感は切って捨ててると思ってたが……意外だな。少し話題を変えるか。

「それはいいからさ、あのチェーンメールを着てた盗賊は剣で倒したんだろ？やっぱり首狙いか魔法か？」

「何？」

鎖帷子と言った途端、リリアナの顔つきが変わった。

「どうした？」

何かおかしいこと言ったか？

「盗賊はリングメールじゃなく、チェーンメールを着てたんだな？」
俺の肩を掴んで言った。

「音と感触からはそうだ。それがどうしたんだよ？」

「チェーンメールは製作に手間がかかる高価なものだ。略奪品にして、盗賊の多数が持っているのは………」

「不自然と？騎士崩れの可能性は？商人を襲った可能性もあるぞ？」

「それもあるが、疑った方がいいだろう」

疑り深いな、職業柄か？衛兵みたいだし。まったく、疑うのが職業なのは嫌なもんだな。

「これは少し注意するか。まいったな、指以外も持ってくればよかった」

「指？」

「依頼の証拠品だ」

どうやらギルドの対人間の依頼の証拠品は指らしい。首だとかさばるからか？指だけ渡す可能性もあると思うんだが、それは治安で分かるか。依頼、ギルド、街……そういえば……！

「なあ、夜間は街に入れないだろ？下手したら兵士のお出迎えだ、どうやって入る？」

冷たい風が吹いた。話が聞こえていたのか、レイアの足が止まった。つられてこちらの足も止まる。

そして、レイアは気まずそうに振り返った。

「……………やべえ、忘れてた」

近場で野営をした。

第37話

夜明けと共に人々は起き、港町特有の賑やかな一日が始まる。その日は開門と共に、賑やかではなく、騒がしい一行が入ってきた。

「いくらワイバーンに会ったからって閉門の時間まで忘れるか……」
「うるせえ！」

「おー、人の話を聞かないばかりか、それを遮って罵倒するか……」

「……とんでもない奴だ」

「黙れ！！」

声と共にハイキックが側頭部目掛けて繰り出されたが、肉体強化を施した左手で受け止める。

回りから見れば隻腕が蹴りを入れられ、それを残りの腕で止めるという珍しい光景だろう。

朝からレイアは元気だ。稼業の関係で夜行性の俺は生活リズムの狂いや、睡眠時間が少なすぎる事で死そうだ。こっちはくたくたなのにレイアは元気。それがしゃくだから適当に嫌みを言ったら、更に元気に…… あーあ、生活リズムを変えるの疲れるんだよなー
「ランサム。ちゃんと義手のこと、考えてるよな？」

独りで眉間の皺を増やしていると、後ろを歩いているリリアナがレイアをチラチラ見て、小声で話し掛けてきた。

「ああ、考えてる考えてる」

「………本当にか？」

明らかな考えてない姿勢に、『考えてないだろお前』という目で見てきた。いいだろ、義手を付けるのはその話が出た時点で決定のようなものだし。

「まあ、考えているのならそれでいい。どうするかは大陸に入ったら聞かせてくれ」

振り向いてないので分からないが、少しリリアナの頬が緩んだよ

うな気がした。

「 ああ、分かったよ」

そう思うと、不思議とこちらも頬が緩んだ。

「リリアナ、大陸の……と、いうより今から行く国の事を教えてくれ。言語とか通貨とか」

ついでだ、この微妙なことも聞いておこう。ワイバーンなどの戦闘のことは後回しだ。

リリアナは考える素振りも無しに、すぐに口を開いた。

「大陸のほとんどは一国、ウィーリア帝国が占めている。言語は方言以外は統一されているが、中には異国の言葉に聞こえる方言もあるらしい。通貨は銅貨、銀貨、金貨だ。銅貨はこちらと価値が変わらないが、銀貨、金貨は価値が低く、十五枚ずつで交換する。気を付ける、こちらの通貨は価値が高いから盗賊やスリの標的に……」

「同業者同士なら臭いで分かる。それに、同業者に手を出すのは間抜けだけだ 大陸でも同じかは分からないがな」

この話はレイアに隠す必要もないので、普通に言った。

同業者は雰囲気や気配、目付き、手のひらで分かる。街を歩くと石を投げたら当てられるくらい見かける事もあるからな。

「そうか……やはり、どんな職でも同業者は分かるものか……ここらにもお前の同業者はいるか？」

そりゃあ、もちろん。

「いるな。何人かはこっちに來たが、俺に気づいて止めたよ」

背中に、ものすごく冷えた風が吹き付けた気がする。

「そうか………ならいつそ、ここにいる全員を職質して……」

「無理無理、逃げられるに決まってる。それに、会話を聞かれてるから近くにはほとんどいないしな」

そう言つと、リリアナは石を蹴ったようで、石畳も敷かれていない地面を靴が掠める音がした。

ほとんどいないというのは出任せだが、同業者が捕まってもたまらないからな。

「……まあ、仕方がない。船が出るまで時間もある。港町に来たんだ、ギルドで報酬を受け取ったら魚料理でも食べるとしよう。昨日はほとんど食べてなかっただろう?」

言葉通り、仕方がないといった様子でリリアナは言った。

なぜ、いきなり話が飛んだのか分からない。まあ、食い物は食べるうちに食べるべきだ、いただこう。

「ああ、ゴブリンになりそうなくらい腹が減って仕方がない。美味いもの教えてくれよ」

「ああ、期待してくれ」

振り向いて、腹が減ったときの決まり文句を言うと、少し楽しそうにリリアナは言った。

視線を前に戻すと、武器を持った男が出入りし、剣の紋章の入った看板を掲げた酒場があった。看板からして、恐らくギルドだろうか。

そう思ったとき、右手の少し前にいたレイアが立ち止まった。

「よし、アークとリリアナは食料を買ってきてくれ。セレナは雑貨を、ランサムは………着いてこい。迷われて船に遅れられたら面倒だ、問題に首を突っ込みそうな気もするしな。終わったらギルドに来てくれ、酒場ということだし飯を食おう」

どうやら役割分担するらしい。この街のことは分からないことだし、レイアの言い分も納得できる。けれども、俺の役割を言う手前の間に、釈然としないのはなぜだろう。

「分かったな、じゃあ解散。アーク、少しでいいからライム忘れるなよ」

レイアはそう言うと、俺の襟を左手で掴んで引っ張り、酒場へ歩き出した。それを合図に、各々は担当の物のある方向へ歩き出した。猫か、俺は。身長的には多少、無理してるようだが。それにしても、レイアはライムが好物なのか?ライムだけということは無いだろうが、買い出しまでさせるなんて………まあ、いいか。

酒場はいいが、酒場に集まる人間は嫌いだな。何よりうるさい。ガヤガヤと、なかなか広い酒場は声と人で溢れていた。それは依頼の内容についてだったり、報酬の良し悪しだったり、はたまた、酔っぱらいや頭のイカれたやつらの罵声だったり。いつも不意打ちに備え、五感を常に強化している身としては、かなり耳障りだ。もし俺が獣人なら逃げ出しそうだ。

「おい、こっちだ」

カウンターで受付嬢から依頼の報酬を受け取っているレイアが、少し離れていた俺を呼んだ。

さすがに酒場へ入ってから手は離され、レイアに着いていくだけになっている。

「ああ、分かったよ」

この広さの酒場では、ギルドの仕事を担当するカウンターも多い。

「ランサム、お前の生年月日教えろ」

「は？」

いきなり何を言っているんだこいつは。

「ギルドへの登録だ。他は書いてやったから早くしろ」

登録と聞いて受付嬢を見ると、受付嬢は右腕が無いのが気になっていたようで、右肩を見ていた。俺の視線に気づくと、気まずそうに笑った。

生年月日か、心当たりが無いな。まあ、覚えてないなら仕方ないな。

「あー、覚えてないから空欄にしてくれ。いいよな、受付さん？」

「えー？あ、はい」

気まずい雰囲気なのに、いきなり話を振られて驚いたようだ。しかし、マニュアルのような本を見ると、すぐに承諾した。

「分かった、空欄だな」

こういうのは本人が書くのだろうが、俺は書ける自信がない。大体は読めるんだけどな。

「ランサム。少し時間がかかりそうだから、適当に座ってる」

「言われなくても座りますよ」

立ちっぱなしは歩くより辛いのはなぜだろう

酒場は大人数の座れる長テーブルばかりだが、近場にまとめて五席も空いていなかった。辺りを見回すと、少し離れたが入口から三列目の端に空きがあつたので座ることにした。

「ふー……………」

やっと一息つけた。盗賊にワイバーンか……嫌なやつらばかりに会つたな。盗人が奇襲して隻腕とは情けない。魔具も左しかなく、右の二の腕にしまつてあつた投げナイフは紛失。もうそこら辺の物を投げたほうが財布に優しいかもな。後で武器の携帯位置を変えるの手伝ってもらおう。

そう思いながらレイアが来るのを待った。

第37話（後書き）

十数日ぶりと、大変遅くなりました。これから暫く、実生活が落ち着くまでは合間を縫って更新させていただきますので、このペースになりそうです。

ヘルシングが攻殻機動隊が書きた（ry

第38話（前書き）

遅くなりました。完結がいつになるやら……

第38話

「意外に早いな」

「少しって言ったぞ」

登録は意外に早く終わったようで、レイアは向かいの席に着いた。

「ん？何だそれ」

よく見ると、指の間から灰色の指輪が覗いていた。

「ん？ああ、これは冒険ギルドの員の証だ。これが無いと、依頼でも立ち入り禁止区域に入れないから無くすなよ」

知らなかったのが意外だったのか、少し驚いたようだ。そう言う
と腕輪を差し出してきた。まあ、着ければ無くさないだろう。

指輪を受け取り、嵌めようとするが、疑問が浮かんた。『肉体強化して硬いものを殴れば壊れるんじゃないか？』壊れたら無効なら、格闘中心の俺には合わない。破損防止に、肉体強化が及ぶような代物なら指を怪我する危険がある。それは余計に駄目だ。

「どうした？嵌めないの……ああ、邪魔か。それなら紐をやるから、首にぶら下げてろ」

レイアは察したようで、藁の色をした紐を鞆から出した。

「分かった」

レイアの手に乗った紐を取ろうとすると、いきなり手を引っ込めた。

「何だ？」

レイアの顔を見ると、やけに不機嫌そうだった。そして、

「……………ありがとうは？」

と、催促すると言うよりは、諭すように言った。

長引くと面倒になりそうだが、嫌という訳でもない。しかし、どうも『ありがとう』を面と向かって言うのは気が引ける。気恥ずかしいというか、なんというか。言う相手が結構いなかったからだろうな。

「あ、ありがとう?」

「聞くな」

レイアはこういうことには厳しいようだ。きちんと躡られたんだろつな…………『指図するな』と言えば恐らく引くだろうが、理由も無いのにそんな餓鬼のようなことを言うのも馬鹿馬鹿しい。ほとんどの人は、盗みはできるのに一言礼を言うこともできない俺を、情けないと思うんだろうな。

「……………ありがとう」

「駄目だ、俺の眼を見る」

ああ、本当に躡が厳しいな。視線を合わせたつもりなんだが…………レイアの眼を見て言う。こう考えると何か気恥ずかしい。くそっ、思春期の餓鬼か俺は！思春期なんて終わった…………はず。

「眼を見て、だな」

「ああ。一応、王国の代表みたいなものだ。まあ、こういうのは守ってくれ。政するやつらは面倒なやつが多いから……………さあ、言え」

今気づいたが、少しニヤついてやがる。気恥ずかしさが知られたか……………拷問だな、これは。

「あ」

「あ?」

よし、がんばれ俺！楽しいことを考えろ！そうだ、終わったら飯があるんだ！がんばれ、俺！

そしてゆっくりと声を出し。

「……………アリガトウ」

駄目だ、無理、恥ずかしさで死ぬ。今ならあのワイバーンにも無傷で勝てるような気がする。自分の恥ずかしさへの耐性のなさがもう嫌だ。ちくしょう、笑え、笑えよ！爆笑しやがれ！

俺は思わず、勢いよく机に突っ伏した。

「どういたしまして」

あれ、笑わないか。……………よかった、笑えと言ったが、本当に

笑われたら心が折れ

「くくっ……ふっ……いや、笑って……無理、ははっ、ははははははは！まさか、まさか、片言で言うとは！」

レイアは腹を抱えて、まさに抱腹絶倒物だったようで、回りの視線も気にせずに笑っていた。普段なら俺は怒るのだろうが

もう恥ずかしさで死にそうだ。周りの視線はレイアに行き、それから正面で『アリガトウ』発言と共に机に突っ伏した俺に行くわけで、盗人稼業のために、普段は人目に当たらない俺には未強化の体に刺さる矢より痛い、顔を上げれない。アーク、リリアナ、セレナ、早く来てくれ。

「で、死にそうだったと？」

隣に座ったリリアナは、俺の死にそうな表情に、少し引き吊った笑みを浮かべながら言った。

「生きてきた時間が、一気に恥ずかしさに変わった気がする……」

「……」
その後、リリアナ達が戻って来たが、何事かとはしばらくは見えていたようだ。

「……よく分からないが、恥ずかしかったんだな」

リリアナの笑みが、引き吊った笑みから苦笑いに変わった気がした。

「ああ……」

さっさと飯を食べよう。もうそれしかない。

「で、リリアナ。飯は何がうまいんだ？」

物珍しさで注文し、失敗したらかなり悲惨だ。

「ん？そうだな……」

そう言つと、リリアナはギルドの業務カウンターとは別の、酒場としてのカウンターへ顔を向けた。

カウンターの向こうの壁には古い木の札が架かっており、その表

面には青白い光がパズルのように組合わさり、文字になっていた。
これを見て、無駄に凝った作りだと思ったのは悪くないだろう。

「ああ、あれだ『海の』」

「あ、ランサム。これ食え、『赤い悪魔の丸ごと煮』」

リアナが普通の料理を言おうとすると、レイアが明らかにヤバそうな。と、いうよりは、それだけメニューの字が赤い料理を言い「すいませーん！『赤い悪魔の丸ごと煮』を一つ」ウェイターも呼ばずに、わざわざ大声でカウンターに言った。

料理名を聞いた途端、何人かが急いで会計を済ませて出ていったのは気のせいであると信じたい。レイアと俺以外の勇者一行含め、逃げた連中以外の客全員がフリーズしているのも気のせいであると信じたい。

「いったい何を頼んだんだ！？赤い悪魔ってなんだ！？」

気づけばレイアの両肩を掴んで迫っていた。名前だけでこんな反応を示される料理だ、ろくなものじゃないだろう。

「何って、海でとれるモノだよ」

レイアは若干身を引きながら言った。

「魚や貝か？」

「魚や貝じゃなくてモノだって。柔らかいというか、骨がないというか……」

不安だ、不安しかない。もしスライムみたいなのが浮いてたりしたら……

そうだ、注文を取り消そう。今なら間に合うはずだ。

「すいません！今の注文、取り消

「やめろ」

カウンターに取り消しを言おうとした途端、机の向かい側からレイアが乗り出してきた。それだけならいいが、右の手のひらで俺の口を塞ぎ、左手で首の後ろを持って引き寄せて固定した。

「あの料理はすぐにできる。もう持って来ようとしてる途中だろうからやめろ、迷惑だ」

なぜそこまで把握してるのかと突っ込みたい。しかし、レイアの謎の真剣さがそれを許さな……………口を塞がれてるから喋れないか。

「お待たせしました」

俺が胸の前で手首を合わせた輪と、大きさが同じくらいの大きな鍋をウェイターが一人で持ってきた。肉体強化だろうか。

「……え？」

思わず声が出た。

ゴトリと重い音を立てて置かれた鍋には、透き通る琥珀色のスーブがあり、そこに赤い悪魔が鎮座していた。その姿は、赤ん坊の頭ほどの真っ赤な楕円形から何本かの太い触手が生え、それには丸い模様がせり出したかのような隆起があった。付け加えるなら、表面の妙なツヤが気持ち悪い。

「こ、これは？」

恐る恐るウェイターに聞くと、笑顔でこう言った。

「赤い悪魔　タコの丸ごと煮込みです」

どうやら赤い悪魔はタコというらしい。

「ご注文は以上でお揃いですか？」

「あ、はい……すいません」

つつい物怖じしてしまった。それだけの威圧感が、このタコからは出ていた。

ウェイターは大きめのナイフとフォークを数本置くと、カウンターの奥へ入っていった。

「どうやって食うんだ、これ？」

見た様子、柔らかそうな肉をしている。切って食べるのだろうか。鍋だ、切りにくいことこの上ない。だとすれば……

「リリアナ、切ってくれ」

あの刃物を赤くする強化なら、焼き切ることで切れるだろう。まあ、無駄遣いと言われそうだが。

「……ああ、いいぞ」

リリアナはナイフを手にとると、ナイフに強化を施して王都で間近で聞いたあの焼ける音を無言の酒場に響かせながら切り分けていった。

「切ったぞ」

リリアナはナイフを置くと、黙祷のように目をつむった。よく見ると、他の客もほとんどが目を……いや、目も押さえてるものもある。口を押さえてる奴は一体何なんだ……

不安を押さえながら、大きな切り身をフォークに刺した。感触は固くもなく、柔らかくもない嫌な感触だった。

正面からガン見してくるレイアに押されながら、恐る恐る口に運んだ。弾力のある食感、味は淡泊……あれ、これって。

「あれ、うまい？」

それを言った瞬間、酒場に笑い声が響いた。

「よっしゃあ！賭けは俺の勝ちだ！」

「どうだ、坊主？うまいだろ？うまいだろ？」

「あーあ、また負けた。今回は嫌がると思ったんだけどな……」

爆笑と共に、酒場の客はワイワイと騒ぎ始めた。中にはさっき出ていったはずの顔もいる。

「レ、レイア？」

何が起きたか分からなかったので、目の前でも爆笑しているレイアに話しかけた。

「ふっ……くくっ……ランサム、これは恒例なんだよ」

「いやー、楽しかった。さらば、王国」

買い物で荷物が重くなったレイアは、満足そうに言った。

レイアが言うには、酒場に初めて来た奴にはこれを食わせるのが恒例らしい。この港町限定の、見た目はゲテモノのメニュー。これな反応で賭けをするのが、漁師の楽しみらしい。そして、不味いと

言った奴は少しオハナシされるのも、恒例らしい。

「やはり、船は明るいうちに乗るのがいいですね」
そして、俺に大量のライムを持たせたアーク。

「今日は風がいいですね」

なかなか話さないが、話すと明るいセレナ。

「ああ、いい天気だ」

レイアと組んで、あれを仕組んだりリアナ。

何も無かったかのように振る舞う一行への反応は、いったいどうしたらいいのか。

「何だ、ランサム？酔ったか？」

レイアが話しかけてくるが、今は突っ込みたい。

「船に乗るの早すぎだろ！」

あの後、酒場から出るなり急いで船に乗り、出港。港町への滞在は半日もなかった。

「何だ、それか。いいだろ、遅いよりは。じゃ、何かあったら言えよ」

レイアはそう言うと、甲板で昼寝を始めた。マイペース極まりない。

船はそこそ大きく、貨物船のようだ。俺たちの他にも、何組かの冒険者や、傭兵が乗っている。

「ランサム、勇者殿の側にいる。護衛とは言わんが、念のため……な」

出港前、レイアは大陸での歩き方を言った。こちらより治安が悪いらしく、決して一人になるなど。

今も船にちらほら見られる傭兵達だが、あいつらは質が悪い。たとえ味方でも、金銭のためには二束三文でも何でもする。そんなやつが集まっているのが傭兵だ。冒険者との違いは、肩入れする対象がいるかどうか。冒険者は基本は国や、街に味方するが、傭兵は基本的に金に味方する。盗人以上の、社会のクズだ。そんなやつらが、女にすることなんて決まってる。

「ああ、分かった」

まあ、関わったら面倒というのが一般的な評価だが。

そして、気持ち良さそうに丸まるレイアの横に腰を降ろし、

「……ふう」

暖かな日差しと睡魔の連携攻撃で瞬殺され、波と船の木が波で軋む音を聞きながら眠りに落ちた。

第38話（後書き）

はい、波の音と木が軋む音で寝る自信があります。まあ、あの状況で寝るのはランサムの馬鹿さという事です。

第39話（前書き）

約一ヶ月の間を空けてしまい、申し訳ない。震災の影響を受ける地域ではなかったので、そのせいで遅れたというわけでもありませんので、ただ単に書けなかっただけになります。
今回は短めです。

第39話

目が覚めると陽が真上に昇っていた。

縁にもたれる体勢で寝ていたので、背筋が固まっていた。辺りを見回すと、横に爆睡中のレイアが寝転がっている。リリアナたちの姿が見えないが、船室にでもいるのだろう。

「眩しいな……」

頭上高くにある太陽は、陸地にいる時よりもいつそう鋭い光を放っているように感じる。

この天気だ、さぞかし光属性は増幅するんだろうな……嫌になる。海ということは水も、遮蔽物がなくて潮風も強いから風も増幅するか。火は空気が湿気ってるから減衰。この日差しで闇は減衰、何もないといいが……

「おい、ランサム」

ふと、寝ているはずのレイアから声がかかった。

「何だ？」

「飯」

わけが分からない。何が言いたいんだ？

「食いに行くぞ」

そう言つと、寝起きとは思えない動きで船室へと歩き出した。こいつの行動は分からない。いきなり何かするのが性格か？

「仕方ないな……」

まあ、離れるなと言われたんだ、付いていこう。

船内へ入ると、レイアは迷うことなく歩き続けた。食堂へ行くのだろうが、この船に乗ったことがあるのだろうか？それとも匂いをたどったか？

勝手な推測を立てていると、いきなりレイアが立ち止まり、ぶつかりそうになる。

「どうした？」

また突拍子もない……………リリアナたちはいつも一緒に行動してるんだろ？から馴れてそうだが、俺は馴れれそうにないな。

「なあ、ランサム。腕、本当に大丈夫か？」

「何だよ急に？」

いきなり心配されると気味が悪い……………なにかと裏がありそうと疑うのは、一般的には嫌な人間なんだろうな。

「王都でも腕をなくしたやつは見たことあるが、ここまで今まで通りに動けるやつは見たことない。変わるんだろ？バランスとかいろいろ……………あ、別におかしいとかそういうんじゃないからな！」

後半は慌てたように言うと、レイアは黙ってしまった。

前半だけ聞いて、デリカシーが無いのかと思ったのは悪くないよな？それにしても、後半の焦り様が面白かった。

しかし、バランスか。そういうええなんともないな……………言われてみれば確におかしい。

「バランスなら問題ないな。なんというか……………あれだ、馴れた」
適当に言っておこう。考えたら長くなりそうだし、何より無難だ。
「馴れた！？」

まるで、ガラスでも割ったような大きな声でレイアが言った。

レイアはあり得ないといった様子だな。当然だ、そんなにすぐ馴れるのはあり得ないよな。……………まあ、馴れるより、気付かない方があり得ないけどな。

「ああ、普段から跳び回ってただろ？その成果だ。王都でいたといっても、軽業ができない鎧を着こんだ兵士だろ？少なくとも、そいつらよりはバランス取れる自信がある」

「……………そうなのか？」

レイアは訝しげに小首を傾げた。

「そうとも」

なるべく自信を含ませるようにする。

これなら押しきれそうだな。

「ん……ならいいけどよ。何かあったら言えよ？」

レイアは顎を人差し指で二度かいた。

「ああ、分かった。俺も質問するぞ？」

いい加減にワイバーンのことを聞かないと、このままだと絶対忘れる。

「ワイバーンは群で動き、危険を察すれば広範囲に散った仲間を呼ぶ。なのに、なぜあの時は来なかったんだ？」

それを実際に見たことはない。しかし、話によるとあの強さが集まるので、過去に街が滅んだこともあるらしい。

「ああ、あれか。ワイバーンは一定の年齢を越えないと、仲間を呼んでも来ないんだ。あ！確か、図鑑が………」

レイアは思い出したように言うと、鞆をまさぐり始めた。
初耳だ。成人って概念がモンスターにもあるってことか？

「ああ、これだな。ほらっ、貸してやる。絶対返せよ」

鞆から茶色いカバーの厚い本を取り出すと、こちらに差し出してきた。

「おう、分かつ……」

俺の指先が本に触れる寸前に、さっと手を引つ込められた。

「礼は？」

ああ、そうだ。レイアはこういうのに敵しかった………まあ、当たり前のことなんだろう。一応、俺も勇者一行の一員ってことになってるしな。

「ありがとう」

「どういたしまして」

目を見て言うと、うつすらと微笑みながら渡してきた。

外見だけなら意外と美人だが、普段の性格から考えると複雑だ。

レイアの言葉遣いは男勝り　と、いうよりは男だが、これでいいのか？王都は兵士の男性が占める割合が多いから、その時の癖だろうか？

本を鞆に仕舞うと、意外にスペースを取り、鞆が直方体に近づいた。

「もういいか？」

「ああ、いいぞ」

返答を聞くと、レイアは再び歩き始めた。

このまま何事もなく、大陸に着きますように。願わくは、義手を入手後に、速やかに離脱をさせてくれ。

願いが叶ったのか、何事も起こらぬまま夜になった

一日目は物珍しさもあつてか、退屈はしなかった。しかし、走り回れないというのは、苦痛である。

「ちよつといいか？」

そして、一行の中で、一番元気なレイアと相部屋。アイクと相部屋がいいと言ったが、一行全体の安全面を考えて却下された。そして、比較的静かなセレナと相部屋がいいと言ったところ、ゴミを見る眼差しで見られた上、前科（牢屋で頭突きされた原因）を知っているレイアからは剣を突き付けられた。そこまで警戒しなくても、飢えてねえよ……多分。

「……………おい、聞いているのか？」

まったく、勘弁してほしい。何故に、こんなのと相部屋なのか……こんなことなら、この船の傭兵をみんな魚に食わせてやろうかな

……………
「おい」

肩に人の手の感触。ちなみに、部屋は俺が横に四人寝れるくらい
の広さだ。かなり狭いが、ベッドがある。シーツも何もない、木
だけのベッドだが、虫が湧くよりましだ。　　並んでるのが気に
食わないが。

「聞け」

背後からの衝撃と共に、体が少し前のめりになる。

ああ、うるさいから眠れないし、やることもないから壁に向かってベッドに座ってたんだっけ。

「いったい何だよ？」

さっきまでも言っていたのかも知れないが、よく聞こえなかった。さっきの衝撃は叩かれたのか？

あーあ、肉が食べたいな。けっこう前に、王宮の食堂で分厚い鹿のステーキを食べたが、美味しかったな。生焼けの肉があんなにうまいとは思わなかった。

「物音で起きれるか？」

「当たり前だ」

物音で起きれない？そんなやつは、スラムで一人暮らしできるわけないだろ。

「なら寝てもいいか。すまん、そろそろ寝よう」

そう言くと、レイアはランプの光を消した。

夜目が利くから、あまり意味がないんだがな。起きていてもすることもない、寝よう。

ギ……ギイ

ギギイ

ギギイ

ギギイ

うるせえ……………

第39話（後書き）

今回はたいした事は起こりませんでした。

震災後、関連性があるものがあつたため、丸々書き直したのは秘密。

第40話（前書き）

遅れたってレベルじゃありませんね、これ……

第40話

眠れん。

耳障りな軋むような音の出所を探すと、どうやらこの音は船体から出ているようだ。不意討ちに備え、肉体強化をしながら寝る身としては騒音にしか聞こえない。

レイアのベッドに目をやる。その上では、レイアがいびきこそ立てないが、ぐっすりと眠っている。

疲れているとはいえ、よくこんな音の中で寝れるな……。

「ねえ、ちょっといい？」

ふと、ドアの向こう、廊下からだろう。女の声が聞こえた。暇だし、盗み聞きするか。

「何だ、姉ちゃん？夜間は船室から出るなと伝えられているはずだぜ」

それに堅物そうな男が答えた。恐らく、船の警備にでも雇われた傭兵だろう。

「警備なんてつまらないことより、ちょっと私の部屋に来ない？」

その女の声色からして、完全に誘っていた。

なんとも、羨ましい。

「いや、金をまだもらってないんでな。何かあったら報酬がパアだ」しかし、その傭兵は残念そうに断った。まあ、報酬がまだなら当然か。

「そうね、何かあったら大変よね……………例えばこんな風な」男の豚のようなかすれた声と、液体が飛び散る音がした。

……………え？何事もなく、が無理になった。また面倒が起こ

る……次はどこを怪我するんだろうな。

「使えない男」

女がそう言うのと、男の体が床に落ちる音がした。そして、女は歩き出すと、明らかにこの部屋に向かってきている。

さて、一体どう来るか、相手は何人か……………

女は一步一步床を軋ませながら、ゆっくりとこのドアの前で立ち止まった。次の瞬間、刺突用の短剣が二本、壁を貫通してベッドの位置へ飛んできた。

それに驚くも、声を出すわけにはいかない。そして、たかが短剣くらい俺はいい。しかし、レイアは絶賛大睡眠中だ。よって、無防備なことこの上ない。レイアに何かあれば、稼業の続行が困難になってしまう。

自分に向かってくる短剣を無視して足腰へ肉体強化を最速で施し、レイアと短剣の間へ向けて全速力で飛び込んだ。全身を強化して防御力も上げたかったが、そんな暇は無かった。

「っ!？」

鋭い痛みが左脇腹に突き刺さった。なんとか声を出さず、そのままベッドに倒れ込む形になるが、急いで短剣を引き抜いて止血を施す。

「……………ん?ラ」

レイアに乗る形になったため、レイアが起きたが口を短剣を抜く際に多少濡れた右手で塞ぐ。

「しゃべるな、静かにしろ」

そしてなるべく低く、小さな声で耳打ちした。

これで黙ってくれるだろう、後はレイアに手伝ってもらって

「この変態がああああ!!死ねえ!!」

レイアの叫びと共に俺の体は宙を舞い、ドアを突き破って廊下に転がった。

なぜ……………理不尽だ。

「……………あらあら、お邪魔したかしら?」

そして、床に転がっている俺の目の前には先ほど傭兵を殺し、こちらにも攻撃を仕掛けた女。気のせいかな、先ほど止血した筈なのに血の流れる俺の腹と、ドアの無くなった部屋を可哀想なものを見る目付きで見ている気がした。殴り殺そうと思ったが、脳が揺れたのか体が動かない。

「いろいろと大変みたいね」

そう言いながら女は俺に持っていた香水のような物を吹き掛けた。

「……………なんだ？」

それは過剰なまでに甘ったるい臭いがし、気持ちが悪くなった。

女はなぜか驚いているようだった。

「あら？耐性があるのかしら」

女はそう言っていると、瓶の蓋を外した。

「生きてたら、がんばんなさいね」

そして俺の鼻を摘まむと、瓶の中身を口に流し込んだ。吐こうとしたが反射的に飲んでしまい、それが何秒も続いた。女が空になった瓶を投げ捨てると同時に意識が飛んだ。

なぜか、ゆっくりと揺れているような気がする。右へ、左へユラユラと……………揺れている？

目を開けると、そこには空が広がっていた。ただし、格子のようなもので区切られているが。

「起きたかランサム」

声の元に目をやると、手かせをはめられた勇者一行と、その他の船に乗っていた人々がいた。

「……………何があつた？」

妙にぐらつく頭を押さえつつ上体を起こすと、腹部にチクリとした痛みが走った。

「その、すまなかつたな……………」

かなり落ち込んだ様子のレイアが謝ってきたが、心当たりどころかこうなる前の記憶がない。

「何があつたつて聞いたんだ」

頭のぐらつきからか、ついつい眉間を押さえながら言った。

「しばらくすれば思い出すと思ひ出しますよ。今は過剰摂取の副作用が出ているでしょう。なんせ致死量を接種したんですから」

アークがレイアに代わつて説明しながら、どこか見覚えのある瓶を俺に投げた。その瓶にはこう書いてあつた。

『何でも卒倒魔法薬！人には一吹き、ゴブリンでも三吹き！人は五吹き以上したら痙攣しながら聖霊様の下に行くから注意してね！くれぐれも、お子様には使用しないでください』

なんとも危ない説明がふざけた口調で書かれていた。

「……これを俺はやられたのか？」

「いえ、やられたというよりは飲まされたようです」

アークは俺を奇怪なものを見る目で見ていた。

おい、飲まされたつてなんだよ。明らかに致死量じゃねえか。

「ここに連れてこられた時には、痙攣しながら泡吹いてましたよ」
あれは焦りました。とアークは付け加えるように言った。

「あー、今はどういう状況なんだ？」

もう痙攣云々はどうでもいい。状況を聞かないと。

「ここは甲板の真下ですよ。ほら、この格子に見覚えがあるでしょう？海賊に閉じ込められたんですよ」

アークはそう言いながら天井に付けられた格子を指差した。

やけに冷静だな、こいつは。

「捕まつた？お前なら一掃できるだろ」

俺がそう言つと、アークはため息をついた。

「いいですか？まず貴方が人質に、そして勇者様が攻撃できずに人質に、そして　と、いうふうになったんです」

「……………ああ、そう」

それを聞いて、意外にもグサリと来た。

ああ、聞かなけりやよかった。人質になったというのがまた情けない……………」

「ああ、やっと起きたのね」

聞き覚えのあるような無いような女の声が、頭上から聞こえた。

「誰だ……………」

「あら、やっぱり副作用かしら？それにしても、あの量を飲ませたのに元気ね」

顔を見上げて、それに見覚えが無かったので誰か分からないが、一つだけ分かった。

「お前か、俺にこの薬飲ませたの！」

「せいかりい。どう、気分は？」

飄々と言うその女に対し、ぞわりと殺意が湧いた。

「あらあら、どうしたの怖い顔して。怒りやすいと嫌われるわよ？」

その女は嘲笑うように声を格子の中に落とした。

ますます腹立つな……………殴るうにも格子がある上に、なぜか拘束はされていない。たぶん何かあるんだろう、下手に動けん……………」

「あら、来ないの？やっぱり考えはするのね」

俺が動けない理由を察したのか、意外そうに言った。

おそらく仕草や表情から判断したのだろう。どうやら、観察力や洞察力がいいようだ。

「まあ、いい判断ね。でもね、満点はあげれないわ」

そう言いながら、女は懐から手のひらと指を合わせたほどの長さの小さな杖を取り出した。

「よく、見てなさいよ」

女はそう言うと、杖が発光した。

おそらく魔力を流したのだろうが、発光の色が無色の光だ。

「レイア、あれは光属性か？」

「……………いや、たぶん違う。俺のは金色がかった光だ」

剣こそ没取されているが、レイアは真剣にそれを見て警戒してい

る。

そして、女がそれをこちらに向ける。

「さあ、ど〜ぞ！」

杖の光が消えた途端、レイアとアーク、リリアナを含む何人もの人々が首を押さえて苦しみ出した。

「おい！？」

床に首を押さえながらうずくまるレイアの元に向かうが、その目は見開かれて焦点が合っていない。

「しっかりしてください！」

横ではセレナがアークたちの元にいるが、レイアと同じ症状のようだ。

これはただ事じゃない。

「てめえ、何しやがった！」

女を見ると、その顔には不適な笑みが浮かんでいた。

「大したことないわよ？ちゃんと加減して苦しんでるだけだから。でも、もしあなたがおかしな真似をすれば、加減を間違えちゃうかも」

杖を見せびらかすように振ると、女は背を向けて歩き出した。

「くそつたれ……………！！」

できる事は何もない。

魔法に関してはほとんど知識が無いのでレイアたちの症状への対処の仕方も分からず、思わず歯を噛み締めてた。

第41話（前書き）

1ヶ月以上も未更新はないですね……

一話よりは文章はましになったでしょうか？

第41話

あの後、レイアたちを膝ほどの高さに調整した貨物の上に寝かした。セレナ案により、手当てをしやすくするため均等に間隔を開けて並べた。しかし、いまのところはそれだけしかない。まあ、さすが貨物船と言うべきか、貨物室がある程度はキレイなのが幸いだ。

倒れずに済んだのは俺とセレナを含めて五人ほど。しかし、残りの三人の内二人が身なりからして傭兵というのがただけない。彼らも仲間が倒れているからには、おかしな真似をしないといいが。「ランサムさん、なんともありませんか？」

目の前のレイアを見てみると、背後からセレナの声がかかった。

「いや、相変わらずだ。呼吸は浅いし、何より顔色が真っ青だ。アークならどうにかできるかもしれないが、生憎な……………」

自身に魔法を施せばアークは治るはずだがそれをしないのを見ると、魔力の操作自体ができないようだ。まあ、もし呪いのようなものなら解除はできないだろうが……

それを聞いたセレナは残念そうに目を伏せたが、すぐにこちらに向き直った。

「そうですね……私は彼らに水属性がいるかと思ひ話しかけてみたのですが、風しかいませんでした。よって、風には効かない物である、毒や呪いの可能性が高いですね。……ですが、こんな症状が出る物は心当たりがありません」

その声は、ひどく悔しそうな色をしていた。

まったくもって厄介だ。相手はまず、俺の強化された聴覚にも、気配の察知にずば抜けたセレナにも近づかれるまで察知されることなく事を起こした。

更には、ほぼ確定だろうがあのかの杖の発光がレイアたちの症状の始まりと仮定すると、一度の魔法で十数人をこの状態に追いやった。

船の規模からして、他の部屋にも捕虜はいるのだろう。しかし、あの女以外を見かけていないという点からすれば、捕虜を取る余裕を持ちながら制圧したということになる。

……………そもそも、最初から船にいたのか、途中から乗り込んだのかさえ分からない。

「毒か呪いか……………」

「ええ。状況から考えると無臭の毒ガスを発生させる魔法か、呪いをかける魔術ですね」

セレナは、アークの荷物を何から何までひっくり返しながら言った。

どうやら、意外にも緊急時には遠慮をしない性格のようだ。

それにしても、魔術とは何だったか……………レイアの図鑑で見かけたような気も、見かけなかった気もする。まあ、魔法関係と判断できれば十分だろ。

レイアたちが倒れてから二、三刻は経っただろうか。その間に、打開策をセレナと話し合っていくつか決めた。

まず一つ。力づく脱出し、レイアたちを殺される前に殺す。呪いなら発動者を倒せば消えるだろうが、リスクが大きすぎるので最終手段に決定。

二つ目。主にアークなどの、魔導師の荷物から打開策を探す。これはあまり望みがあるとはいえない。

三つ目。おそらく、動けるのは風属性しかないと思っている敵の裏をかき、俺が一人で殲滅を行う。その間は、俺の幻をセレナに作ってもらう。高等技術だが、セレナは少ない範囲ならできるようだ。三つの中で、これが最も成功率の高いものだろう。負担が俺にかかるが、レイアに死なれても困る。

と、いうわけから三つ目の案を実行するのだが、他の三人が敵の

可能性もある。そのため、見えない位置で俺の幻をセレナが作り、その位置から俺が脱出する事になった。

しかし、隠れる位置までどう行くかが問題だ。街中で尾行される場合などなら普通に抱き合いながらも行けばいいが、今の状況ではその類いの誤魔化しは使えない。

「さて、どうするか………」

呟きながら上を向くと、格子の向こうにまるで宝石箱をぶっちやかしたような星空が見える。思えば、星空を見るなんて久しぶりだろう。王都では周りを警戒するあまり、上を見ることはあっても空を見ることは無かったようだ。

夜空は海の上だと、陸よりもよく見えるようだ。灯の光が無いのが理由か、風通しが良いのが理由かはよく分からない。そういえば、星の配置から絵に見えるものもあるらしい。

今は見えないので見方を変えようと思い、首の傾きや視点の上下を変えてみる。しかし、俺にはバラバラに散っているようにしか見えない。

どうやら、どんな見方をして俺には絵には見えなさそうだ。

「どうしたんですか？」

一人で回ったり首を動かす俺を不信に思ったのか、先程まで会議をしていたセレナが話しかけてきた。

「いや、何でもない」

セレナに顔を向けて一度は本当の事を言おうと口を開いたが、星座を見ようとしたと言うのは少し気恥ずかしいのではぐらかす。

「ああ、星座ですか？海の上はよく見えます」

人が羞恥心から隠したのを知ってか知らずか、セレナはあっさりと図星を突いてきた。

そして、どうやらセレナには星座が見えるらしい。

「今日は鷹とユニコーン……あ、蟹も見えますね」

多少の気が紛れたのか、どこか楽しそうにセレナは話す。

うん。何をどうしたらそう見えるのか、さっぱり分からない。

「セレナ、どうすれば星座は見える？コツでもあるのか？」

そう言つと、セレナは嬉しそうな表情からきよとした表情になった。

「見えないんですか？」

「ああ、何も見えない」

見えないものは見えないんだ。かといって、見えなくて困るわけじゃないが、どこか疎外感を感じてしまうのはなぜだろう。

「星座はどんなに感受性の乏しい人にも生まれつき見えるはずなのですが……………」

初耳だ。それよりも、どこか貶された気もする。それとも、当たり前に見えるって事だろうか？いや、そうに違いない。

「あ、もしかしたら」

セレナは気休めにとレイアたちの額に置いていた布を、唯一の液体である酒に漬ける。

あまり冷たくは無いが、今はこれしかない。

「属性によって見え方は違います。私に見えるのはあくまでも風属性の視点なので」

「俺の場合は真っ暗か」

もう苦笑いしか出て来ない。闇属性であることの問題は大きなものだけかと思っていたが、こんな小さな問題があるとは想像していなかった。そして、こんな小さな問題があることから、もしかなくとももっと多くの問題があることが推測できる。

「でも、いい事もありますよ。かなり強力な毒への耐性があるようですし。えーっと、ほら、魔力も多いじゃないですか！」

セレナはフォローするように言うが、デメリットが大きい代償のようなものなので嬉しくない。その上、後者は俺の体質だろう。

「は……………」

自身の属性に呆れ、ついついため息を吐いてしまった。肩の力が抜けるとともに、あることに気が付いた。

「いない……………」

先ほどまで動いていた三人が、見える位置にいない。好機。この状況は、まさしくそれだった。

「セレナ」

声を抑えながらセレナに声をかけると、彼女も気付いていたようです。すでに何かを呟き始めていた。

もうここはセレナに任せていい。そう判断した俺は貨物室の奥へと向かった。

暗い貨物室の一番後部で最低部。ここなら気づかれずに出れるはずだ。

慎重に、慎重に。肉体強化で聴覚や嗅覚を増長させながら壁の向こうを探索。

耳を壁にあてながら壁に張り付いて十五分ほど経っただろうか。近くの部屋に誰もいず、壁の中がスカスカしている部屋を見つけた。そしてその壁を作る板の隙間に逆手に持った短刀を刺す。空洞ということもあり、力を込めるとすんなりが入った。

リリアナならこの壁を斬れるかもしれないな。そう思いつつ、右手で隙間を広げようとするが腕がない。

「やべえ……」

両手で出ることばかり考え、左手のみで出る方法は考えていない。どうしたものかとそのままの姿勢で固まったが、ある方法を思い付いた。何が起こるか分からないのでどうも遠慮したいが、状況の打開には仕方ない。

手袋をはずし、隙間に刺した短刀を鏢で止まるまで刺し込む。そして、柄を握る手に意識と魔力を集中させ、成功した光景をイメージする。そして魔力に指向性を持たせながら、短刀に一気に流し込む。

その瞬間、短刀の刃が光沢のある漆黒に染まり、触れている壁が

五ミリほど黒い煙となって消えた。

「よし」

思わず口角が上がった。

リリアナの真似事だが、意外にもキッチンと発動したようだ。最も、形を真似ただけで効果にも差異があるようだ。

そのままナイフを走らせて壁を作る木をくり抜いていく。肉体強化と違ってかなり集中力を食うようで、五十センチ四方の穴を空けた頃にはこめかみに違和感を覚えた。気持ち切り替えるために頭を振ると、多少靄がかかったその穴から物置部屋に通じ抜ける。出口付近にも木箱が積んであり、窮屈さを感じたが仕方ない。

床に片膝を着いてしゃがむと回りがよく見えた。掃除もあまりされていなかったようで、埃の積もった箱が狭い部屋に押し込まれている。

まあ、これでも充分キレイだ。まだまだ伝染病の元は湧かない。

辺りに誰もいないことを聴覚で確認すると、ゆつくりと廊下への扉を引く。あまり開けられていないドアの軋む音が、静かな廊下に染み入るように響いた。廊下からは、どこか懐かしい匂いが物置部屋に流れ込んだ。

一步一步、忍び足で船の中を歩き回る。一体どこにいるのだろうか。気配をまったく感じないから気味が悪い。

「それにしても広い……………」

ここは異常なほど広いのだ。船とは思えない広さの上、いつしかセレナたちの気配も感じない位置にまで来てしまった。引き返すベきか迷いつつ何度めかの曲がり角を曲がった時、気配を感じた。耳を澄ますと、どこか聞き覚えのある大人の息づかいも聞こえた。

それを聞いた途端、懐かしい匂いが強くなった気がした。不思議と、悪い気分にはならなかった。

第42話（前書き）

短いですが、キリがいいので

第42話

匂いと音をたどり、気配のする部屋の前にたどり着いた。中の様子を探るが、一人、それもビンごと煽って酒を飲んでいるような音まで聞こえる。

余裕綽々か？いい気なもんだ。

とりあえず、見逃すこともできないため、短刀を左手に持ってドアの前に何歩か離れて立つ。そして、肘でドアを吹き飛ばして突入するつもりで体制を整える。音が出るが、どれだけ探っても周りに気配はないため、一番確実な方法で行うことにする。入って右手にいるが、あまり関係はないだろう。

息を整え、心の中で数を数える。突入までのカウントだ。

1……2の……3！！

肉体強化による全身のバネを使い、イノシシのようにドアへと突撃する。ドアに体がぶつかる寸前に体を浮かせ、砲弾のようにドアを内側へ跳ね飛ばす。それに気づいたベッドに腰を掛けているフーアの男は左手で酒瓶をこちらに投げつけながら右で腰に差した剣を抜こうとするが、酔っているためかあまりにも遅い。膝を曲げた左足が床に着く瞬間に強引に伸ばし勢いの向きを変え、投擲された酒瓶の下をを繰りながら男へ短刀を持った左腕を突き出す。

「殺った」そう確信していた。

「相変わらず嫌なガキだ」

男がそう言いながら先ほどの酔った鈍さとは違う、獲物に食らいつく蛇のような瞬発力でこちらに跳んで来るまでは。

「ッ！？」

そのまま、驚きで目を見開いた俺に向かっていつのまにか剣から離れた右腕を突き出した。何の変哲もない右腕。しかし、もしかしたら……もしかしたらこの人物がアイツならそれは脅威以外の何物でもない。しかし、空中、伸びきった左腕。と、防ぐ手段がなかつ

た。

その手のひらから捻じれるように土色をした槍が伸び、俺の左腕のわきを通るようにしてその根元の柔らかい間接へと突き刺さると、そのまま肩甲骨を砕いて背中から飛び出した。その勢いが強いのか、両者が弾かれることもなく押される。

「ゴ……アあ……………」

左の肺をやられたらしく、口から血と共に異音が溢れる。

「おっと、死ぬんじゃないぞ?」

男はそのまま槍の先を着地地点の床に突き立てると、同じく左腕から出した槍で俺の右太もを上から左も貫くように突き立てた。思わず声が出そうになるが、なんとか飲み込む。

「何だ?まだ堪える癖があるのか。反応しないとサドの姉ちゃんに嫌われるぞ?」

男はフードの中から見える口を無理やり引つ張るように笑った。ぶん殴りたいし罵りもしたいが、関節をやられて腕が動かない上に、血が溢れるように気管から出てくるため話せもしない。

「なんだ?反応悪いな」

その声と共に、槍が動いた。動いたといっても引き抜かれたり、傷口をほじくられるわけでもない。槍が心臓のような鼓動を上げながら血管などの管という管をこじ開け始めた。

「まあ、これでいいだろ」

そしてその中へ入ると、一定間隔で螺旋階段のように渦巻きながら肉を掘り進む。そして一定の位置まで伸びると、槍から伸びていた根元が高速で回転し始めた。

「*%!”%‘\$>!!」

自分でも何を言っているのか、叫んでいるのかわからない。感じる苦痛を音に変換したような声が、俺の耳に届く。

おかしい。確か、複雑なことは苦手だった。こいつはアイツじゃない!!!

「おま……え、誰ダ?」

なんとか声を振り絞り、そう言った途端、男の口元が歪んだ。

「誰かって？野暮なことを聞くんだな……お前が思ってる通りだよ。お前を拾い、育てた　　だ」

嘘だ、確実に殺した。首をねじって、吊るして血を抜き、その後に頭をつ潰した。

「違う！お前は俺が殺した！！」
視界が溶ける。

これじゃダメか

「やっと終わったな。さて、俺は適当にバツクレるか。ランサム、お前はどする？」

辺り一面に魔族らしき風貌の死体。その中心に座り込み、正面ではボロボロのレイアが疲れたように笑っている。その手に持つ剣は、血糊と脂で光っている。

「どうした、ランサム？」

呆けてしまっているのを心配したのか、レイアが目の前に歩いてきた。

「かなり多かったからな。やっぱり格闘主体はキツいか？」

そう言つと、短剣を握りしめている俺の右手（・・・）を両手で包み込んだ。

「なっ！？」

なぜ右手がある？トカゲ野郎に食われた筈だ。

「ほら、力を抜け」

レイアが揉み解すように、短剣を固く握る手を擦る。

それに従い、なぜ自分でも力を込めていたのか分からない右手の力が抜けていく。

「なあ、何があったんだ？」

そう言つと、レイアはひどく驚いた顔をした。

「何って、やっと終わったんじゃないやねえか。急にボケちまったのか？」
頭がパンクしそうだ。

どうなってる？こんな事が起こったなら覚えていないなんてあり得ないし、俺は船の中にいたはずだ。

確か、壁をくり抜いて……………何かあったような、無かったような。

レイアは剣の血を払うと、隣に座り込んだ。

これは夢なのか？それとも、俺が忘れてるだけなのか？

「ああ、ちよつと動転してな……………そういえば、他のやつらはどうした？姿が見えないが？」

辺りを見回しても、魔族の死体以外は俺とレイアだけだ。

「他のやつらか……………」

レイアは立ち上がり、彼女から見て左を指差した。

「俺に見えたのはリリアナだけだったからな。あそこらへんだと思っぜ」

指差した先を見るが、地に伏す魔族の死体以外には何もない。

「おい、どこだよ？死体しかないぞ」

嫌な予感がする。

「ああ、そうだよな。分かりにくいか」

レイアは指を指した方向に歩き出す。自然とその後ろを俺も歩き出す。

しばらく歩くと、急にレイアが止まった。

「下になってたのか……………今、出してやるからな」

魔族の死体をどかし始めるレイアの背中が、ひどく悲しそうに見えた。

何体かの死体をどけた時、レイアの動きがピタリと止まった。見覚えのある綺麗な金髪が、レイアの背中の中の端に見えた。

「……………ランサム」

声が震えている。

「他のやつらを探そう」

レイアが早足で先ほどの場所に戻ろうとし、その場をどく。

先程まで立っていた足元には、リリアナがいた。いや、あったという方がいいだろう。

足は捻れ、左腕はいくつにも千切れ、胴には何本もの矢が刺さり、リリアナの着ていた衛兵の服から飛び出しており、肋骨らしき白いものもある。そして、かじられたような傷が、二十数個も全身にある。

極め付きは、顔が無かった。頭はある。しかし、その前にあるはずの顔が、強い殴打によって固め損ねたゼリーののように、その周りに飛散している。無論、顎や鼻なんて無かった。

「おいおい……………」

思わず後ずさると、卵のような物を踏んだ感触が足に伝わる。

恐る恐る足を上げると、水が地面に染み込んでいる。靴の裏を見ると、リリアナの目玉がへばりついていた。

「ランサム、行こう……………」

吐きそうになった所に、レイアに背後から右肩を捕まれた。

「あ、ああ」

なんとか声を絞り出し、首だけで振り向く。

「どうした、ランサム？」

立つ死体が、俺の目に映った。

第43話（前書き）

短いですが、やはりキリがいいので。

40話で一年かかって、内容は一週間進んだかどうかってかなり危ういよね。

第43話

走る、走る。時々背後から単発で飛来する閃光を避けつつ、逃げるためにひたすら死体だらけの荒れ地を走る。

「どこ 行く だ、ラ サムー！」

背後から、途切れ途切れに俺を呼ぶレイアの声が何度も聞こえる。本来なら立ち止まって文句を言うが、閃光を放つのがレイアな以上は止まるわけにはいかない。どうにもあの閃光は肉体強化に関係なく、物体を貫通するようだ。その証拠に、右耳がプラプラと揺れている。

「ちくしょおおお!!」

思わず声を張り上げて叫んでしまう。

「てよ ラン ム」

今度は魔族が持つていたであろう何かが飛んで来るのを感じるが、風を切る音からして斧か何かだ。

飛び込み前転の要領で思いつき前に跳び、斧を下に避ける。

「くそっ!？」

大勢を立て直しながら斧の軌跡を見ると、明らかに心臓狙い。完全に殺す気だ。

理解できない。なぜリリアナの死体を見つけた途端、こうなったのか訳が分からない。その時までのレイアも様子がおかしかったが

「ここまでじゃなかった……!」

後ろに首だけで振り返ると、図鑑で見るとようなゾンビのレイアがいる。

ゾンビへの対策方法。頭部の破壊か、放火。レイア相手ではどちらも難しいだろう。それに、しゃべる意志があるということはゾンビではない可能性が高い。

「おい、つか しろ! ンサ !!」

数メートル先の死体の手元にモーニングスター。鉄球に棘が生えた物が先端にある片手持ちのハンマーがある。あれを使おう。

地面に足がめり込むように柄を思いっきり蹴り上げ、二、三步進んだところで胸の高さでキャッチする。閃光が真横を通り抜けた瞬間に足を止め、モーニングスターを持った右手を振りかぶる。

「消えるー！」

「っ！？ランム！」

走ってくるレイアの顔面にモーニングスターを振り下ろした時、視界の隅に影が映った。

「が……！？」

それと同時に、蹴られた感触が左脇腹にし、右側に大きく吹き飛ばぶ。

次から次へと、いったい何なんだ。思考が追いつかない……………吹き飛びながら蹴りの元を見ると、腹に大穴の空いたアークがいた。

「嘘だろ、おい！？」

そのまま空中で体勢を立て直し、着地。こんどは、アークにモーニングスターを叩き付ける。

「彼も厄事をてくまたね。」

アークの声も途切れ途切れだ。

腕が振り下ろし切る前にアークの左腕が素早く伸び、手首を掴まれる。そして、引つ張られる勢いが乗せられた瞬間、拳闘士かと思うようなボディーブローが鳩尾にめり込んだ。

肺から空気が一気に押し出されるが、気絶しそうになるのを堪える。

「な……………」

肉体強化、効いてないのか？いや、体に魔力が満ちる感覚はあるんだ、そんなはずはない。

「ういこと柄であまんが、仕ありん」

その声と共に、アークの後ろ回し蹴りが右側頭部を狙って振るわ

れるが、とつさに半歩前に出て飛んできたふくらはぎに肘鉄を打ち込む。

「させ か!!」

怯んだアークに追撃しようとするが、その体の隙間を縫うように飛来した光が右肘を貫通したために断念。

防御ができないなら再生能力を強化するべきだと判断し、防御を捨てて再生に専念する。

すると、自分でも信じられない早さで傷が塞がる。しかし、その部分はまるで魔族のような、真っ青な皮膚になっている。

「どういう事だ……?」

だが、気にしている暇はない。

「くっ!?アーク、絶るぞ!」

その様子にレイアは焦ったようで、アークに指示を出した。

光線ではなく光弾がその皮膚に直撃するが、その表面からは散って人間の皮の部分を焼く。そして、その部分が再生し、更に水色の皮膚が広がる。

「近 離しか か………!!」

レイアとアークが左右から挟むように近づいて来たので、挟まれないようにバックステップで何度も下がる。

ふと、視界に船上の光景が映った気がしたが、アークとレイアに集中する。

左側のアークからの左足のハイキックを腰を落としてかわし、レイアからの顔を狙った右膝蹴りを脛を殴り付けて頭上に逸らす。

「っ……………!!」

痛みで怯んだレイアの左足を右手で掴み、力任せに振り回してアークにぶつける。

それを正面で受け止めたアークを、レイアを蹴り飛ばして二人とも吹き飛ばす。

鎧越したが、恐らくは骨が折れただろう。これで、しばらくはアークに専念できる。

アークの左フックを拳闘競技の構えで防ぎ、右ストレートで顎を狙う。

その瞬間、右手首があらぬ方向に捻れた。

「は！？」

思わずバックステップをしようとするが、アークの左腕に右手を掴まれて動けない。そして、アークは俺の二の腕を掴むと、いとも簡単に俺の水色の右肘をねじ曲げる。

「体の事は詳しいですから」

そう言うと、外側にバランスの崩れた俺の左側頭部に肘鉄を叩き込んだ。

それによって視界は歪み、意識は遠退く。だが、見方のいないこの状況で、気絶するわけにはいかない。

「な！？」

動かない右手の肘から先を左腕で切断し、意識を引き寄せると同時に腕の再生にかかる。

治した部分が魔族になるなら、それを利用すればいい。

この上昇した再生力なら腕でも、なんだって治せる。そんな高揚感を感じる。

「よし」

啞然とするアークの目の前で、腕は内側から再生した。尖った爪と裂傷のような紅い模様が気になるが、背に腹は変えられない。

その腕をアーク目掛けて振る

「やめるこの馬鹿！！」

後頭への鈍い衝撃と共に視界は揺らぎ、体が痺れる。

後ろをゆっくりと振り替えると、鞘に入ったロングソードを持つレイアがいた。

俺の右腕に目をやると、もう一撃を顔面に叩き込まれた。

「……………ごめんな」

泣きそうな声だったが、先ほどの一撃のせいで視界は暗転し、その顔を見ることは叶わなかった。

鈍痛を節々から感じながら目を開けると、そこは船室だった。上体を起こして薄暗い部屋の中を見回すと、隣のベッドにはレイアが寝ている。

「……………夢？」

相変わらず右腕はなく、レイアも安心した表情で眠っている。

「ん」

レイアが目を覚ましたようで、漏れるような声が聞こえた。

丁度いい、聞いた方が早いな。

「おい、レイア。起きろ」

レイアを軽く揺すり、完全に目を覚まさせる。

「ん…………？ああ、ランサム。おはよう」

レイアは上体を起こして大きなあくびをすると、グリグリと首や肩、腰を回す。

その暢気さから、先ほどの事は夢だと判断する。あんな事があつたのなら、少しぐらいは動揺するだろう。

「どうした？」

固まる俺に違和感を覚えたのか、レイアが不思議そうな顔で問いかける。

「いや、ちよつと嫌な夢を見た」

どうせなんだ、少し気を紛らす事を言ってもらおう。

「なんだそりゃ、いったいいくつなんだよ」

レイアは面白がるように笑いながら再び寝転ぶ。

「悪かったな。多分、原因は船だな」

同じように笑いながら、部屋の出入り口であるドアへと歩く。

そうそう。こういうのが欲しかったんだ

「ちよつと風に当たってくる」

だが、胸が悪いのはどうしようもない。外気に当たるのが一番だろ。

「そうか。俺はまだ眠いから少し横になる」

レイアはそう言うと、目を閉じてしまった。

俺は軋むドアを開けながら、大陸に渡った後の事を思い描いた。

「行っただか」

目を開けて視線だけをドアに向けるが、開く様子はない。

「痛っ！」

肋骨の軟骨と硬骨の間が完全に治ってないのか、体を捻った途端に鋭い痛みが走った。

まったく。あそこまで思いっきり蹴らなくてもいいだろう………薄暗い中手探りで髪止めを探すと、ランサムの腕を切り落としたロングソードの柄に触れてしまい、憂鬱な気持ちになった。

「……………馬鹿野郎」

女に薬を盛られたランサムは理性を失い。女を殺し、その後は部屋に閉じ籠った。

対処法を考えている間に抜け穴を作って脱出。そして、リリアナを瀕死に追い込んだ後に甲板で俺とアークと戦闘。気絶させて今に至る。

「それにしても……………ランサム、お前は何者なんだ？」

昨日の魔族の腕を思い出し、ベッドの隅で聖霊に祈った。

第44話（前書き）

話を進めたいので色々とカット

第44話

久々になる土の感触を感じつつ、魚の生臭い匂いが潮風に乗るのを肌で感じる。

あの後、二日ほどで大陸にたどり着いた。たいして変わった事は無かったが、エールの味に飽きてしまった事だけは述べておく。

「おい、出発するぞランサム」

少しこの街で休みたいのだが、レイア曰く「船で休んだら？」だ、そうだ。

それにしても、手続きが終わってすぐに出発は早すぎるだろ。なかなか大きな街だから見て回りたかったな。

「ちよつとぐらい待てよ」

そう言う間にも、レイアたちは門に向けて歩き出している。

人混みの中を掻き分けながらそれに走りで追いつくと、リリアナが小さく手招きをしていた。

「何だよ？」

前のレイアに気づかれないように、近くに寄って小声で言う。

まあ、察しは付くが。

「義手の事だ。付けるか、抜けるか？」

「付けるに決まってるだろ」

義手が欲しくてここにいるんだ、抜けたら自腹になるだろ。

「……………そうか。前にはここにも工房があつたのだが、どうやら首都に移転したらしい」

リリアナもレイアには隠しておきたいのか、声を低くして言う。

「首都には行く予定は確かにあるが、先に行かなければならない場所がある。すまないな」

残念そうと言うより、煩わしそうにリリアナは言う。

「そんな事か？手に入るなら別にいい」

まあ、用事がある訳でもないんだ、そこまで急ぐことは無いだろ

う。

「そうか。なら、どんなのにするか決めておけ」

そう言いながら、『名作義手』戦闘編』と表紙に書かれた厚い本を手渡してくる。

試しになんページが開くと、いかにも固そうな物や、骨のような軽そうな無機物の右腕が、ずらりと載っている。

この中から選ぶのか……………

「しっかりと性能も見ろ事だ。体の一部になるのだからな」

リリアナはそういうと、スタスタと早歩きになってしまった。

少しぐらいオススメとか言ってくれよ……………

そう思いながら、渋々とページを捲った。

「まったく、次から次へと」

出発して大した距離も進まぬ内に気づけた草むらからの視線に、うんざりしていた。

しかも、襲ってくることはなく、息を潜めて追って来るのだ。

「セレナ」

「兎です」

確実に気付いているであろうセレナの側に寄って声をかけると、王都の兵士特有の暗号を言われる。

兎は一般市民などの、無害な人物を意味する。その他には、蛇は商人、鼠は軽装、熊は重装の敵、そして龍が仲間だ。

「兎なら、様子見だな」

セレナの索敵能力は確かだな物だと、俺は信じる。

さて、どうするか。

「石でもなげるか？」

セレナにそうふざけて言うが、当然の如く返答は無い。

はいはい、ふざけて悪かったな。

その視線を気にしつつも、黙々とレイアの後を追いかける。

そのまま数時間ほど歩いていると、不意にレイアが立ち止まった。

「魔物だ。下から来るぞ」

そう言つと、勢い良く剣を地面に突き刺した。

勢いはかなり付いていたようで、レイアは片膝を着きながら刀身を根本まで地面に沈ませる。

「下？モグラみたいな奴だな」

そう軽口を叩いてやると、レイアは背を向けたまま言つた。

「モグラならよかったんだがな……………」

そう言つた途端、苦痛に満ちた声を上げる何かが地面から飛び出した。

それは濃い緑の粘り気のある液体を両目から滴らせ、下顎が左右にパツクリと開いた全身に血管の浮き上がる人間だった。

「うえ」

その姿に、思わず声を漏らしてしまった。

それに体毛は多少残っているが、その身には何も纏っていない。

更には歓喜と絶望を合わせたような、歪な形で表情が固まっている。最も気色が悪いのは、その腕がまるでオケラのように、物を掘るための形をしているからだ。

「あの両腕に気を付ける。ほとんどの鉋物は掘れる上に、怪力だからな」

リリアナは抜いたサーベルの刀身を発行させつつ言つと、それに向かつて一気に駆け出した。

これらの相手に慣れてる。そう思った。

「ハア！」

そして、一瞬で距離を詰めたリリアナは、そいつの頭を一閃で跳ねた。

「え？」

あまりの呆気なさに俺が固まっていると、レイアがリリアナに向

けて駆け出した。

そして、その勢いをロングソードに乗せ、リリアナの背後を狙うように振りかぶった。

「アアアアア！」

次の瞬間、聞くに耐えない声を上げながら、その狙った位置の地面から口から緑を撒き散らすそれが出現し、

「ギッ

」

その背後から降り下ろされたロングソードにより、体を左右に分けられた。

慣れすぎている事に感心していると、足元が震動するのを感じて真横にステップで移動する。

「アアアアア！」

すると、先程の個体と全く同じ声を上げるそれが、地面から飛び出した。

腰から下が地面の下にあり、明らかに隙だらけなのでその頭をボールを高くに上げるように蹴り飛ばす。

すると、まるで死体を蹴ったような柔らかい感触と共に、その頭は宙に狭い放物線を描いた。

「ランサム、まだまだ来るぞ」

リリアナはそう言うと、新たに飛び出して来たその上顎と下顎を、上げていた右腕を巻き込みながらサーベルで切り離れた。

まだまだ地下にいるのか、足に地下の震動が響く。

真横に出てきた二匹目の右腕の突きを避けると同時に左手で掴み、後ろから地面から飛び出す勢いのまま飛びかかってきた三匹目に真横から叩きつける。

「ギ……………」

鈍い声を出しながらそれが宙で止まった所に、衝撃力を重視した空気の塊を叩き込む。それによって柔らかな肉は結合組織から剥がれると、大きな関節ごとにハラバラになって飛び散った。

近寄る音がないために辺りの状況を伺うと、各々の方法でその

首を執拗に狙っている。

弱点がそこなのだろう。

「ん？」

セレナに目をやると、先程からいた兎の方に向けて矢を放っていた。

人助けなのだろうか。余裕だな。

そう思っている内に地中の音が無くなり、レイアが剣を納めた。

「終わりだな。出発するぞ」

そう言つと、レイアは何事も無かったかのように再び歩き出した。やけに無感動だな。「気色ワリイ」とか言つと思つたんだが。

そう思いつつも、取りあえずはその後を追った。

レイアが焦る。首都に行く前の寄り道が、とても面倒な気がしてきた。

「何度目だよこれ……………」

あれから半日ほど歩いて夕方になったが、断続的に人間モグラの襲撃を受けていた。

オマケに、なぜかこちらを見ている一般人は、そのとばかりを受けながらも付いて来ている。

山に入ったんだぞ？死にたいのかお前は。

「リリアナ、地図あるか？」

「ん？街ならもう直ぐだぞ」

俺の思考を読んだようにリリアナは言う。

それは予想できるだろうが、街が見えないのはどういう事だ？

「こんな山の中に街がある？ドワーフの洞窟でもあんのかよ」

そう馬鹿にするように笑ってやると、リリアナが驚いた声を上げた。

「よく分かったな。てつきり着くまで気づかないかと思ったよ」

「何!？」

おいおい、ドワーフって言ったら鉱物を集めるのが有名だぞ。これは一人旅用の金を集めるために、俺に与えられたチャンスか？

「……………分かっていだろうが、手癖の悪い真似をしたら両腕が義手になるぞ？」

再犯する犯罪者の考えは分かりやすいのだろうか、五秒足らずで釘を打たれた。

これじゃ、単独行動は許されないかもしれない。

「まあ、長居はしないぞ。二日が精々だ」

「二日か…………」

二日で何ができるだろうか。精々、その盗み関連を取り仕切っている奴に、盗品を売る許可を得るぐらいか？

第45話

徐々に数の減る人間モグラの襲撃を受けながら、黙々と山を登るレイアを追う。未だに、一般人はその後を付いて来ているのが、何処と無く不愉快だが。

「リリアナ。さっきから付いて来てるあいつ、ぶん殴って、帰るように交渉していいか？」

「やめろ」

こんな会話を聞きつつも、興味も示さずペースも一切落とさず、山道を通らずに直線に登るレイアに、正直呆れてしまった。

ドワーフに対して、勅命でも受けたのか？

苔の生えた大きな岩や、浅くて細い小川を横目で見ながらひたすら登る。鹿や兎は無視し、狼や熊は襲ってくれば駆除する。腹が減れば固いままの干し肉を、喉が渴けば簡易な水筒からぬるい水を。

正直言って、少しぐらいは休みたい。

「せめて道を通ろうぜ……………」

先頭に行くレイアに言うが、まるで耳に何かを詰めているようだ。こんなくしょう。

あれから、二時間ほど登っただろう。息を切らせながら藪を抜けると、目の前が岩壁の大きな広場に出た。その中心でやっとレイアが止まった事に、安堵が胸を撫で下ろす。

「レイア、休憩か？」

問い掛けるも、やはり無言。何か、レイアにやったかな俺…………？
そう思った時、再び地響きが辺りに響く。また出るのか…………。弱いやつにしてくれよ、ホント。

広場の中央の地面が一瞬で盛り上がると、次の瞬間には土煙を卷

き上げながら吹き飛んだ。

石や土の塊が体を打つが、ダメージを負うほどの物は無いので肉体強化で耐える。

「避ける！」

正面からレイアの絶叫が聞こえた時には、彼女は背中を向けながら、こちらに勢いよく飛んできた。

「い！？」

反応が遅れて胸で受け止めると、レイアの鎧はかなり良いものらしく、肋骨の軟骨と硬骨の境目が軋む。もしかしたら、折れたかもしれない。

「どうし

」

「ま……え………」

血を吐くレイアに抱き抱えたまま呼び掛けると、それを遮って途切れ途切れの警告を受けた。

それに従って正面を見たときには、風船のように膨らんだ人間モグラが目前に迫っていた。

「アーク！」

レイアを後ろのアークがいるであろう位置に放り投げ、左腕と右足で胴と頭を庇う。しかし、顔の右半分と、首は庇うことができなかった。

人間モグラが破裂というよりも炸裂し、その破片と体内にあったであろう鉱石が辺りに飛び散る。それに加えて、正面にはその巨大な腕が、鋭利な破片となつて襲いかかる。

声を出す暇も無く、庇い切れなかった部分がミンチにされた。

気が付くと、左目だけでアークの顔を見上げていた。体の感覚は殆ど無いが、辛うじて目と耳は大丈夫のようだ。恐らくセレナの矢

だろうが、無数の何かが虫の羽音のような風を切る音を作っている。
「アーク、どうなってる」 声をかけると、アークは驚いた顔でこちらを見た。ひどい声だ、喉が裂けてたのか？

「レイアさんが、地下からの敵を殲滅しています。あなた達の怪我は、浅くありませんから休んで下さい」

アークは状況の説明を優先してくれたようで、淡々と説明をしてくれた。だが、あなた『達』という言葉が引つ掛かった。十中八九、レイアだ。

「レイアはどうした？」

アークの視線が、俺の死角である、右側に移る。

「魔法で障壁を張ったので、外傷はかなり少ないです。しかし、あくまでも外傷の防御なので、内臓の損傷が激しいですね。鎧で強化されてなければ、かなり危険でした」

どうやら、鎧による肉体強化は効果が薄いようだ。まあ、死んでないならいいか。

「あの人間モグラは何だ？自爆なんてしやがって」

「あれはモールマイナーです。あの爆発は、ブロウという虫が内部に入り込んだ結果です。しかし、ブロウの生息圏は荒れ地の筈……」

そのモールマイナーとブロウが協力し、地中でも爆発しながら俺等を襲ったのか？モンスターが協力するなんて、聞いたこと無いぞ。オマケに、ブロウの生息圏とは違うか。

レイア、もとい勇者といくと、有り得ない事が起こるらしい。そもそも、俺があいつに追われたのも、都合が良すぎるって言えば良すぎるな。

「アーク、リリアナは？」

「後方の警戒を頼んでいます。彼女は前衛と言っても、力押しでは無いので爆発からの離脱が用意ですから」

面制圧から離脱できるほど速いらしい。慣れもあるのだろうか、とんでもないな。

段々と体の感覚が戻ってきたが、少なくとも数十の破片が全身に刺さっている。肉体強化で押し出してしまうか。ん？左手が千切れかけたのか、何かおかしいな。

まだまだ魔力は残っているので、再生をかなりの早さで行う。数十秒経てば、自由に動けるだろう。

「もう少しで参戦できそうだ。レイアの剣、借りるぞ」

上体を起こしてそう言い、レイアの剣を手を取った。見た目よりかなり軽い。レイアには丁度いいのかもしれないが、俺には軽すぎるくらいだ。

まあ、機動力重視なら、間合いの取れるこれの方がいい。鞘を地面に投げ捨て、リリアナに合流するために駆け出した。

リリアナは、一人で数体のモールマ　マ　……人間モグラを相手していた。

辺りにある、人間モグラが数度爆発した後のクレーターを利用し、そこに奴等を集めて起爆寸前の奴を蹴り入れたり、そこに伏せて爆発凌いだり。速いからこそできる、そんな戦い方をしていた。

「リリアナ、手を貸す」

リリアナは、空いた左腕を変った動きで振る。衛兵の指示の飛ばし方だ。

その意味は、『私を囷にしる』。つまり、敵の正面には入るな、ということになる。ワンパターンの合図しか無いため、その場の状況で読み取り方を変えないといけないのが面倒だ。

なぜ知ってるかって？じゃないと、何年も逃げねえよ。

リリアナと対峙する人間モグラの右に回り込み、リリアナが牽制をしている間に、力任せに剣で薙ぐ。切れ味は上々で、剣術の経験が無いにも関わらず、すんなりと三つの首が宙を舞う。

だが、その首の無い体から骨の位置が変わる音がしたため、離脱して近くのクレーターに伏せる。その三秒後、頭上を破片が通るのと共に、胸に鋭い痛みが走る。

息をする度、ゴボゴボという水温が体の中から響き、咳が止まらない。

「肺か……!!」

肉体強化で再生を始めるが、なぜか治りが遅い。その上、肺の中の血が消えるわけでもない。

更に、相手が待ってくれる訳もない。

「アア……ア………!!」

無理矢理体を引き起こし、人間モグラを縦に両断する。その時見えた自分の左手に、鳥肌が立った。

「な……!?!」

剣の柄からインクのように滲み出た何かが、ジワジワと俺の手の甲までを、ガラスの様な見た目にしつつある。思わず、剣を放り出した。

すると、その部分は白煙をうつすらと上げながら色を変え、濃い水色の肌となった。触つてみると、以前に殴ったワイバーンの鱗のような硬さと、人肌の柔軟さがある。

「どうなってるんだよ………」

そう言つて、肺の傷が治り、中の血も何処かへ消えているのに気付き、青ざめる。本能的に見られたらマズイと感じ、上着を千切つて巻き付ける。

そして、素手のまま、リリアナの援護に向かった。

セレナの発射音が止んで十数秒後、足元の揺れが遠くに消えた。
「終わったか……」

そう眩き、直接触れたくは無いので、上着を巻き付けてロングソードを持つ。鞘も探さないといけなかったが、捨てた辺りをうろろするするとすぐ見つかった。ちなみに、レイアは未だに目覚めていなかった。

そうになると、やっぱり運ぶ必要がある。そして、この中で、一番腕力があるのは俺である。

「重い」

リリアナの ローキック

ランサムは ぼうぎよした

「まったく！貴様は！！」

ギリギリと歯を噛み締めるリリアナ。歯並びが悪くなるぞ。

現在、レイアをおんぶしている。肩に担ぎたかったのだが、アイクによるドクターストップがかかった。内臓に悪いらしい。

「で？ドワーフの街を通り抜けるんだろ、入り口はどこだ？」

広場の正面にある壁を爪先で蹴るが、空洞音もしない。山を間違えたんじゃないか？

「合ってますよ。しかし、戦闘があつたので閉ざしているのですよ。もう少しで開きますよ」

アイクがそう言うと同時に、巨大な岩の壁が揺れ始める。

「丁度よかった。さあ、少し離れましょう」

アイクの言葉に従って壁から数メートル離れると、ゴリゴリという音共に壁が奥に下がり始めた。

第45話（後書き）

ネタを忘れないようにメモを始めました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6835m/>

え、勇者！？こっちに来るな！

2011年8月21日03時14分発行